

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

[はじめに](#)

[omhelp:CLIコマンドのヘルプ](#)

[omreport:Instrumentation Service\(計装サービス\)を使用したシステム状態の表示](#)

[omconfig Instrumentation Service\(計装サービス\)を使ったコンポーネントの管理](#)

[omconfig system assetinfo: 所有コスト値の編集](#)

[omreport rac:Remote Access Controller コンポーネントの参照](#)


[omconfig rac:Remote Access Controller の管理](#)


[Storage Management Service\(ストレージ管理サービス\)の使い方](#)

[CLIコマンド結果の使い方](#)

[用語集](#)

メモおよび注意

 **メモ:** コンピュータの操作に役立つ重要な情報が記載されています。

 **注意:** ハードウェアの損傷やデータ損失の可能性があることを示し、その問題を回避する方法を説明しています。

このマニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。2006 すべての著作権は Dell Inc. にあります。

Dell Inc. からの書面による許可なしにこのマニュアルを複写することは、いかなる方法によっても禁じられています。

このマニュアルで使用されている商標: Dell, DELL ロゴ, PowerEdge, OpenManage は、Dell Inc. の商標です。Microsoft, Windows, Windows Server, MS-DOS, Windows NT は、Microsoft Corporation の登録商標です。SUSE は、アメリカ合衆国およびその他の国における Novell, Inc. の登録商標です。Red Hat および Red Hat Enterprise Linux は、Red Hat, Inc. の登録商標です。Intel, Pentium, Itanium は、Intel Corporation の登録商標で、Intel386 は、Intel Corporation の商標です。AMD, AMD Opteron, AMD-V, AMD PowerNow! は、AMD, AMD Opteron, AMD-V、および AMD PowerNow! は Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。VESA は Video Electronic Standards Association の登録商標です。UNIX は Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。OS/2 は International Business Machines Corporation. の登録商標です。

商標または製品の権利を主張する事業体を表すために、その他の商標や社名が使用されている場合があります。これらの商標や会社名は、Dell Inc. が所有するものではありません。

2006 年 12 月

[目次ページに戻る](#)

omconfig system assetinfo: 所有コスト値の編集

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

- [omconfig システム資産情報の概要](#)
- [取得情報の追加](#)
- [減価償却情報の追加](#)
- [保証延長情報の追加](#)
- [リース情報の追加](#)
- [メンテナンス情報の追加](#)
- [アウトソース情報の追加](#)
- [所有者情報の追加](#)
- [サービス契約情報の追加](#)
- [サポート情報の追加](#)
- [システム情報の追加](#)
- [保証情報の追加](#)

omconfig システム資産情報の概要

omconfig system assetinfo コマンドを使うと、システムの所有コスト合計を構成する総括的なパラメータセットの編集が簡単にできます。この項では、omconfig system assetinfo コマンドで報告および設定可能なパラメータについて説明します。

omconfig system assetinfo コマンドを使って、構成可能なオブジェクトを制御する値を設定することができます。assetinfo 設定機能の例にはシステム所有者の設定値、購入金額、有効なリース内容詳細、減価償却方式とレート、システムのロケーション、保証および保証期間の延長、アウトソーシング詳細、およびサービスレベルの許諾書などがあります。

資産情報を追加するために必要なユーザーレベル

パワーユーザーとシステム管理者が資産情報の追加および編集を実行できます。

取得情報の追加

「取得」とは、企業によるシステム購入またはリースに関する事実を指します。omconfig system assetinfo info=acquisition コマンドを使って、システムの購入またはリースに関する詳細を追加します。表 5-1 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 5-1. omconfig system assetinfo info=acquisition

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig	system	assetinfo	info=acquisition		
				costcenter=<テスト>	システムを取得した企業名またはコード。
				expensed=yes no	システムが特定目的、または研究開発部門や販売部門など、特定部署のための経費とされるかどうか。
				installdate=<mmddyy>	システムのインストール日。
				ponum=<数値>	システム代金支払いを承認した文書番号。
				purchasecost=<数値>	所有者が支払ったシステム代金。
				purchasedate=<年月日>	所有者がシステムを購入した日。
				signauth=<テキスト>	システム購入またはサービス コールの承認者名。
				waybill=<数値>	受け取った商品の貨物受領書。

取得情報を追加するためのコマンド例

取得パラメータの値を入力するには、コマンドを次の形式で入力します。omconfig system assetinfo info=acquisition <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition purchasedate=122101
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。たとえば、**info=acquisition** に複数のパラメータ値を入力する場合、次の例を構文ガイドとして使用してください。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition purchasecost=5000
waybill=123456 installdate=120501 purchasedate=050601 ponum=9999 signauth="John Smith" expensed=yes costcenter=finance
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

減価償却情報の追加

減価償却とは、時間の経過とともに資産の価値を減らしていく計算方法です。たとえば、5 年間の耐用年数が期待されるシステムの減価償却は年間 20 パーセントです。**omconfig system assetinfo=depreciation** コマンドを使って、システムの減価償却を計算する方法に関する詳細を追加します。[表 5-2](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 5-2. omconfig system assetinfo info=depreciation

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				
		assetinfo			
			info=depreciation		
				duration=<数値>	システムが減価償却される年数または月数。
				method=<テキスト>	システムの減価償却計算に使用するステップと仮定。
				percent=<数値>	資産の価値切り下げまたは減価償却率(百分率)。
				unit=months years	ユニットは月または年単位です。

減価償却情報を追加するためのコマンド例

減価償却パラメータの値を入力するには、コマンドを次の形式で入力します。**omconfig system assetinfo info=depreciation** <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation method=straightline
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

保証延長情報の追加

omconfig system extwarranty コマンドを使って、保証延長情報の値を割り当てます。保証は、製造元または販売店とシステム購入との間で取り交わす契約です。保証では、指定した期間または使用範囲内でどのコンポーネントの修理や交換をカバーするかを識別します。保証延長は、当初の保証期限が切れた後に有効になります。保証の値の編集方法に関する詳細は、「[保証情報の追加](#)」を参照してください。

[表 5-3](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 5-3. omconfig system assetinfo info=extwarranty

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				

		assetinfo		
			info=extwarranty	
				cost=<コスト> 保証延長サービスにかかるコスト。
				enddate=<有効期限日> 保証延長契約の有効期限。
				provider=<保証会社名> 保証延長サービスを提供する会社。
				startdate=<開始日> 保証延長サービスの開始日。

保証延長情報を追加するためのコマンド例

保証延長サービスパラメータの値を提供するには、コマンドを次の形式で入力します。omconfig system assetinfo info=extwarranty <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=extwarranty enddate=012503
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の omconfig system assetinfo コマンドを同時に入力できます。例を見るには、[取得情報を追加するためのコマンド例](#)を参照してください。

リース情報の追加

リースとは、指定期間中システムの使用料を支払うという契約です。システムの所有権は賃貸人に属します。[表 5-4](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 5-4. omconfig system assetinfo info=lease

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				
		assetinfo			
			info=lease		
				buyout=<金額>	賃貸人からシステムを購入する場合支払う金額。
				lessor=<リース会社名>	システムのリースを提供する会社。
				multischedule=true false	システム リースのコストが 2 種類以上の料金表によって計算されるかどうか。
				ratefactor=<因数>	リース料の計算に使用するファクター。
				value=<残差>	リース終了時のシステムの適正市場価格。

リース情報を追加するためのコマンド例

リースパラメータの値を入力するには、コマンドを次の形式で入力します。omconfig system assetinfo info=lease <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=lease value=4500
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の omconfig system assetinfo コマンドを同時に入力できます。例を見るには、[取得情報を追加するためのコマンド例](#)を参照してください。

メンテナンス情報の追加

メンテナンスとは、システムが正常に稼動し続けるように行う保守作業を指します。[表 5-5](#) は、メンテナンス情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-5. omconfig system assetinfo info=maintenance

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig	system	assetinfo	info=maintenance		
				enddate=<有効期限日>	保証延長契約の有効期限。
	provider=<保証会社名>	メンテナンス サービスを提供する会社。			
	startdate=<開始日>	メンテナンスの開始日。			
	restrictions=<文字列>	メンテナンス契約でカバーされない作業。			

メンテナンス情報を追加するためのコマンド例

メンテナンスパラメータの値を入力するには、コマンドを次の形式で入力します。omconfig system assetinfo info=maintenance <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=maintenance startdate=012504
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の omconfig system assetinfo コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

アウトソース情報の追加

アウトソースとは、システムの正常運転に必要な保守作業を別の会社に委託することです。[表 5-6](#) は、アウトソース情報を追加するために有効なパラメータを表示しています。

表 5-6. omconfig system assetinfo info=outsorce

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig	system	assetinfo	info=outsorce		
				levels=<数値>	プロバイダが提供するサービスのレベル。
	problemcomponent=<コンポーネント名>	メンテナンスを必要とするシステム部品。			
	providerfee=<メンテナンス料>	メンテナンス料金。			
	servicefee=<サービス料>	サービス料金。			
	signauth=<名前>	サービスの契約者、または承認者。			

アウトソース情報を追加するためのコマンド例

アウトソースパラメータの値を入力するには、コマンドを次の形式で入力します。omconfig system assetinfo info=outsorce <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=outsorce providerfee=75
```

次のメッセージが表示されます。

Asset information set successfully.

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の `omconfig system assetinfo` コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

所有者情報の追加

所有者はシステムの法的所有権を有する当事者を指します。[表 5-7](#) は、所有者情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-7. `omconfig system assetinfo info=owner`

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig	system	assetinfo	info=owner		
				insuranceco=<会社>	システムを保証する保険会社名。
				ownername=<所有会社名>	システムを所有する会社名。
				type=owned leased rented	ユーザーがシステムを所有しているか、リースか、レンタルかの分類。

所有者情報を追加するためのコマンド例

所有者パラメータに値を設定するときは、次の形式でコマンドを入力します。`omconfig system assetinfo info=owner <「名前=値」のペア 2>` たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=owner type=rented
```

次のメッセージが表示されます。

Asset information set successfully.

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の `omconfig system assetinfo` コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

サービス契約情報の追加

サービス契約とは、システムの予防的なメンテナンス作業と修理にかかる手数料を指定する契約です。[表 5-8](#) は、契約情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-8. `omconfig system assetinfo info=service`

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig	system	assetinfo	info=service		
				renewed=true false	サービス契約が更新されたかどうか。
				type=<文字列>	契約でカバーされるサービスの種類。
				vendor=<ベンダー名>	システムのサービスを提供する企業。

サービス情報を追加するためのコマンド例

サービスパラメータの値を提供するには、コマンドを次の形式で入力します。**omconfig system assetinfo info=service** <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=service vendor=fixssystemco
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

サポート情報の追加

サポートとは、ユーザーがタスクを実行する際、システムの適切な使用に関するガイダンスを必要とする場合に、システムユーザーが利用できるテクニカル サポートを指します。[表 5-9](#) は、サポート情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-9. omconfig system assetinfo info=support

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				
		assetinfo			
			info=support		
				automaticfix=<アプリケーション名>	問題を自動的に解決するのに使用するアプリケーション名。
				helpdesk=<テキスト>	電話番号、電子メールアドレス、またはウェブサイトアドレスなどのヘルプデスクまたは連絡先情報
				outsourced=true false	外部の企業がテクニカル サポートを提供するか、またはシステム所有者の社員がテクニカル サポートを提供するかの選択。
				type=network storage	サポートがネットワーク付属のデバイス、またはストレージデバイスに対するものであるかどうか。

サポート情報を追加するためのコマンド例

サポートパラメータに値を設定するときは、次の形式でコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=support** <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=support outsourced=true
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

システム情報の追加

システム情報には、システムのプライマリユーザー、プライマリユーザーの電話番号、およびシステムの設置場所が含まれます。[表 5-10](#) は、システム情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-10. omconfig system assetinfo info=system

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				
		assetinfo			
			info=system		

				location=<テキスト>	システム所在地
				primaryphone=<数値>	システムのプライマリユーザーの電話番号。
				primaryuser=<ユーザー>	システムのプライマリユーザー。

システム情報を追加するためのコマンド例

システム パラメータに値を設定するときは、次の形式でコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=system** <「名前=値」のペア 2> たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=system location=firstfloor
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

保証情報の追加

omconfig system warranty コマンドを使って、保証情報の値を割り当てます。保証は、製造元または販売店とシステム購入との間で取り交わす契約です。保証では、指定した期間または使用範囲内でどのコンポーネントの修理や交換をカバーするかを識別します。保証延長サービス値の編集方法に関する詳細は、「[保証延長情報の追加](#)」を参照してください。[表 5-11](#) は、保証情報の追加に有効なパラメータを表示しています。

表 5-11. omconfig system assetinfo info=warranty

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	用途
omconfig					
	system				
		assetinfo			
			info=warranty		
				cost=<コスト>	保証サービスにかかるコスト。
				duration=<期間>	保証が有効な日数または月数。
				enddate=<有効期限日>	保証サービスの有効期限。
				unit=days months	期間の単位が日数か月数かの選択。

保証情報を追加するためのコマンド例

保証パラメータに値を設定するときは、次の形式でコマンドを入力します。**omconfig system assetinfo info=warranty** <「名前=値」のペア 2>。たとえば、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=warranty unit=days
```

次のメッセージが表示されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

すべての「名前=値」のペア 2が同じ「名前=値」のペア 1 に属する限り、複数の **omconfig system assetinfo** コマンドを同時に入力できます。例を見るには、「[取得情報を追加するためのコマンド例](#)」を参照してください。

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

omconfig Instrumentation Service（計装サービス）を使ったコンポーネントの管理

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

- [パラメータ表の規則](#)
- [omconfig コマンドの概要](#)
- [omconfig コマンドのヘルプ](#)
- [omconfig about](#)
- [omconfig chassis](#)
- [omconfig preferences](#)
- [omconfig system](#)

omconfig コマンドを使用すると、警告イベントの定義、警告操作の設定、ログのクリアのほか、システムシャットダウンの設定に使用する値の入力や、その他のシステム管理タスクを実行できます。

omconfig 機能の例には、コマンド、警告、ハードウェアログをクリアする、システムシャットダウンを設定して実行する管理者権限、電流プローブ、ファン、電圧プローブ、温度プローブで警告イベントの値を指定したりデフォルト設定するパワーユーザーおよび管理者権限、イントルージョン、電流プローブ、ファン、電圧プローブおよび温度プローブで警告または障害イベントが発生したときに警告措置を設定するパワーユーザーおよび権利者権限などがあります。

omconfig システムコマンドを使った所有権情報のコスト（assetinfo）の表示と管理方法の詳細に関しては、「[omconfig system assetinfo: 所有コスト値の編集](#)」を参照してください。

omreport コマンドを使って omconfig コマンドの実行に必要な情報を取得しなくてはならない場合が頻繁に発生します。たとえば、温度プローブの警告イベントの最低温度を編集する場合は、設定するプローブのインデックスを知っておく必要があります。そのような場合は、omreport chassis temps コマンドを使用すると、プローブのリストとそのインデックスを表示できます。omreport コマンドについては、「[omreport: Instrumentation Service（計装サービス）を使用したシステム状態の表示](#)」を参照してください。

パラメータ表の規則

コマンドに使えるパラメータをリストにする場合、パラメータはコマンドラインインタフェースに表示される順ではなくアルファベット順に並んでいます。

記号「|」は「パイプ」と呼ばれることがあり、「排他的論理和」または「演算子」を表します。たとえば、「有効 | 無効」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

omconfig コマンドの概要

メモ: 本項では可能な全ての omconfig コマンドを一覧表示しますが、システムで使用できるコマンドはシステム構成に依存します。システムにインストールされていないコンポーネントのヘルプを表示したり、またはコマンドを実行すると、Server Administrator はコンポーネントまたは機能がシステムで見つからない旨のメッセージを発行します。

表 4-1 は omconfig コマンドの高レベルな概要です。「コマンドレベル 2」および「コマンドレベル 3」とタイトルの付いた欄には omconfig で使用できる主な引数を一覧表示します。「ユーザー特権が必要」とはコマンドの実行に必要な特権の種類を表します（U=ユーザー、P=パワーユーザー、A=システム管理者）。「用途」は omconfig を使って実行される操作についての概略です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

表 4-1. omconfig コマンドレベル 1、2、および 3

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	必要なユーザー権限	用途
omconfig				
	about		U、P、A	Server Administrator プログラムのバージョン番号とプロパティを表示します。
		details=true	U、P、A	インストールされている全ての Server Administrator プログラムの情報を表示します。
	preferences			
		cdvformat	A	カスタムデミットフォーマット（cdv）のデータフィールドで分けるタデミタを指示します。
		dirservice	A	Active Directory サービスを設定します。
		snmp	A	新しい SNMP ルートパスワードを設定します。SNMP Set 操作を設定します。
		useraccess	A	システム管理者レベルの下にいるユーザーが Server Administrator を使用できるかどうかを指定します。
	system			
		alertaction	P、A	イントルージョン、ファン、温度、電圧、電源装置、メモリ、および冗長の警告またはエラー イベントに対処するのに使用する操作を事前に決定します。
		alertlog	P、A	システム管理者がログをクリアできるようにする。
		assetinfo	P、A	減価償却値、リース、メンテナンス、サービス、およびサポートを含むシステムの所有権のコストを入力して編集します。
		cmdlog	P、A	システム管理者がログをクリアできるようにする。
		esmlog	P、A	システム管理者がログをクリアできるようにする。
		events	P、A	SNMP トラップを有効または無効にします。
		pedestinations	P、A	警告送信先の IP アドレスを設定します。

		platformevents	A	特定のプラットフォームイベントで行うべきシャットダウン措置があれば決定します。また、プラットフォームイベントのフィルタ警告生成を有効にしたり無効にします。
		recovery	P,A	システムがハングの状態にあるオペレーティング システムにどう応対するかを事前に決定します。
		shutdown	A	システムをシャットダウンする場合に、システム管理者がいくつかのオプションから選択できるようにします。
		thrmshutdown	A	温度イベントがシステムシャットダウンをトリガする重大度レベルを設定します。
		webserver	A	Web Server を開始、または停止します。
	chassis			
		biossetup	A	BIOS が管理する特定のシステム部品の動作を設定します。
		bmc	A	リモートアクセス情報を設定します。 メモ: このサブコマンドは今後のリリースで段階的に廃止され、 remoteaccess サブコマンドに置き換えられます。
		currents	P,A	電流ブロープ警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。
		fans	P,A	ファンブロープ警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 メモ: 組み込み型サーバー管理 (ESM3) および Dell™ PowerEdge™ x8xx システムでは、しきい値を変更することはできません。
		fancontrol	P,A	ファン速度を、静かさと冷却速度のいずれかを選んで最適化できます。
		frontpanel	A	電源ボタンとマスク不可能割り込み (NMI) がシステムに存在すれば設定します。
		info	P,A	管理タグやシャーシ名の初期値を設定したり、値を編集したりできます。
		leds	P,A	シャーシ フォールト LED や シャーシ識別 LED の点滅時を指定して、システム ハードドライブの LED をクリアできるようにします。
		memorymode	A	スベアバンクとミラーリング メモリ モードを有効にしたり無効にしたりするだけでなく、使用するモードも指定します。
		remoteaccess	A	リモートアクセス情報を設定します。
		temps	P,A	警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 メモ: ESM3 および PowerEdge x8xx システムでは、しきい値を変更することはできません。
		volts	P,A	警告しきい値をデフォルトで、または値を指定して設定します。 メモ: ESM3 および PowerEdge x8xx システムでは、しきい値を変更することはできません。
	storage			「Storage Management Service (ストレージ管理サービス) の使い方」 を参照してください。

omconfig コマンドのヘルプ

omconfig -? を使って、**omconfig** に使用できるコマンドの一覧を入手します。

omconfig <コマンドレベル2> -? を使ってレベル 2 のコマンドである **about**、**chassis**、**preferences**、および **system** のヘルプを表示します。**omconfig system -?** に関する次の情報は **omconfig chassis** コマンドのヘルプにも同様に適用できます。

omconfig system -? を使って、**omconfig system** に使用できるコマンドの一覧を入手します。

omconfig preferences -? を使って、カスタム区切りフォーマット (cdv) である **cdvformat** のような、**omconfig preferences** に使用できるコマンドリストを取得できます。cdv 用のデリミタリストを表示するには、以下のコマンドをタイプします。

```
omconfig preferences cdvformat -?
```

omconfig system <コマンドレベル 3> -? の形式のコマンドを使って、特定の **omconfig system** コマンドの実行に必要なパラメータを一覧表示します。たとえば、次のコマンドを使って **omconfig system alertaction** と **omconfig system shutdown** に有効なパラメータの一覧を生成します。

```
omconfig system alertaction -?
```

```
omconfig system shutdown -?
```

omconfig system alertaction コマンドを使う場合、いろいろなオプションがあるので全ての CLI ヘルプがスクロールしてしまう前に読むことができます。

コマンド出力を 1 画面ごとにスクロールするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction -? | more
```

上の例では、「|more」があるため、スペースキーを押して CLI ヘルプ出力の次の画面を表示できます。

omconfig system alertaction -? コマンドの全てのヘルプを含んだファイルを作成するには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction -? -outa alert.txt
```

ここでの `-outa` によって `alert.txt` と呼ばれるファイルにコマンドの出力を向けます。

Microsoft® Windows®, Red Hat® Enterprise Linux®, SUSE® Linux Enterprise Server のオペレーティングシステム上で `alertaction` コマンドについてのヘルプを読むには、以下のように入力します。

```
more alert.txt
```

omconfig about

`omconfig about` コマンドを使って、システムにインストールされているシステム管理アプリケーションの製品名とバージョン番号を確認します。次に `omconfig about` コマンドからの出力を例示します。

```
Product name : Dell OpenManage Server Administrator
Version : 5.x.x
Copyright : Copyright (C) Dell Inc.
1995-2006. All rights reserved.
Company : Dell Inc.
```

Server Administrator 環境に関する詳細を知るには、以下のように入力します。

```
omconfig about details=true
```


Server Administrator には多くのサービスが含まれており、それぞれ独自のバージョン番号を持っています。内容 フィールドにはサービスのバージョン番号にあわせてその他の有用な詳細情報が報告されます。以下に続く出力は例であり、使用できる Server Administrator の設定とバージョンによって異なります。

Contains:	Instrumentation Service 5.x.x
	Storage Management Service 3.x.x
	Sun JRE - OEM Installed Version 3.x.x
	Secure Port Server 1.x.x
	Core Service 1.x.x
	Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
	Storage Management Service Integration Layer 1.x.x
	Server Administrator 5.x.x

omconfig chassis


`omconfig chassis` コマンドを使って、電流プローブ、ファンプローブ、電圧プローブ、および温度プローブの値をデフォルトまたは指定値に設定したり、システム起動時の BIOS 動作を設定したり、メモリエラーカウンターのクリア、あるいはシステム構成で許可される電源ボタン管理機能の有効・無効を切り替えたりできます。


`omconfig chassis -?` を使って、`omconfig chassis` コマンド全の一覧を表示します。

 **メモ:** モジュラシステムのサーバモジュールに CLI コマンドを実行すると、シャーンはサーバモジュールのみを参照します。

omconfig chassis biossetup

`omconfig chassis biossetup` コマンドを使って、システムの BIOS セットアップ起動時間設定で通常使用できるシステム BIOS 設定を構成します。

 **注意:** 特定の BIOS 設定のオプションを変更するとシステムが無効になったり、またはオペレーティングシステムを再インストールする必要がある場合があります。

 **メモ:** BIOS 設定 オプションの変更を有効にするには、システムを再起動する必要があります。


 **メモ:** 各システムで全ての BIOS 設定オプションが使用できるわけではありません。

表 4-2 は、このコマンドで使用できる「名前=値」のペアを表示します。

表 4-2. BIOS 設定


「名前=値」のペア 1 attribute=	「名前=値」のペア 2 setting=	説明
attribute=acpwrrrecovery	setting=off last on	off: システムはオフになっています。 last: システムは以前の状況に戻ります。 on: システムがオンになっています。
attribute=bezel	setting=enable disable	enable: システム起動中のベゼル取り外しインテリジェントチェックを有効にします。

		disable: システム起動中のベゼル取り外しインテリジェントチェックを無効にします。
attribute=bootsequence	setting=diskettefirst hdnonly devicelist cdromfirst	BIOS にシステムを起動するデバイスと、起動ルーチンが各デバイスをチェックする順序を伝えます。
attribute=conredirect	setting=enable disable	enable: シリアルポート 1 に BIOS 画面をリダイレクトします。キーボードとテキスト出力はシリアルポート 2 にリダイレクトされます。 disable: BIOS コンソールのリダイレクトをオフにします。
attribute=crab	setting=enable disable	enable: システム再起動後に BIOS コンソールリダイレクトを有効にします。 disable: BIOS コンソールリダイレクトを無効にします。 メモ: コマンド crab は、Dell PowerEdge x9xx のシステムでのみ有効です。
attribute=cpuht	setting=enable disable	enable: 論理プロセッサの hyper threading を有効にします。 disable: 論理プロセッサの hyper threading を無効にします。
attribute=cpuvt	setting=enable disable	enable: 仮想化を有効にします。 disable: 仮想化を無効にします。
attribute=dbs	setting=enable disable	enable: システムの要求に基づいた電源管理 (DBS) を有効にします。 disable: システムの DBS を無効にします。
attribute=diskette	setting=off auto writeprotect	off: ディスクドライブを無効にします。 auto: ディスクドライブを自動的に有効にします。 writeprotect: 書き込みはできません。ディスクドライブを読み取り専用にします。
attribute=dualnic	setting=off onpxeboth onpxenone onpxenic1 onpxenic2	off: NIC は無効です。 onpxeboth: 両方の NIC で PXE を使用できます。 onpxenone: PXE はいずれの NIC でも使用できません。 onpxenic1: PXE は NIC 1 で使用できます。 onpxenic2: PXE は NIC 2 で使用できます。
attribute=extserial	setting=com1 com2 rad	com1: 外付けのシリアルコネクタを COM 1 にマップします。 com2: 外付けのシリアルコネクタを COM 2 にマップします。 rad: 外部シリアルコネクタをリモートアクセスドライブにマップします。
attribute=fbr	setting=9600 19200 57600 115200	9600: コンソールリダイレクトのフェイルセーフボーレートを 9600 bps に設定します。 19200: コンソールリダイレクトのフェイルセーフボーレートを 19200 bps に設定します。 57600: コンソールリダイレクトのフェイルセーフボーレートを 57600 bps に設定します。 115200: コンソールリダイレクトのフェイルセーフボーレートを 115200 bps に設定します。
attribute=ide	setting=on offforce=true	on: このデバイスを有効にします。 off: このデバイスを無効にします。 force=true: 設定変更の確認。
attribute=ideprdrv	setting=off auto	off: デバイスを無効にします。 auto: デバイスを自動的に検知して有効にします。
attribute=intrusion	setting=enable disable	enable: システム起動中にインテリジェントチェックを有効にします。システムにもベゼルインテリジェントチェック機能がある場合、このインテリジェントオプションはシステムのベゼルの取り外しをチェックします。 disable: システム起動中にインテリジェントチェックを無効にします。
attribute=mouse	setting=on off	on: マウスを有効にします。 off: マウスを無効にします。
attribute=nic1	setting=enabled disabled enablednonepxe	enabled: システム起動中に最初の NIC を有効にします (システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします)。 disabled: システム起動中に最初の NIC を無効にします。 enablednonepxe: システム起動中に最初の NIC を有効にします (システムに PXE がある場合は PXE をオフの状態にします)。
attribute=nic2	setting=enabled disabled enablednonepxe	enabled: システム起動中に2番目の NIC を有効にします (システムに PXE がある場合は PXE をオンの状態にします)。

		<p>disabled: システム起動中に2番目の NIC を無効にします。</p> <p>enablednonepxe: システム起動中に2番目の NIC を有効にします（システムに PXE がある場合は PXE をオフの状態にします）。</p>
attribute=numlock	setting=on off	<p>on: キーボードを数字のキーとして使います。</p> <p>off: キーボードを矢印キーとして使います。</p>
attribute=ppaddress	setting=off lpt1 lpt2 lpt3	<p>off: パラレルポートアドレスを無効にします。</p> <p>lpt1: LPT1 上のデバイスの位置を検索します。</p> <p>lpt2: LPT2 上のデバイスの位置を検索します。</p> <p>lpt3: LPT3 上のデバイスの位置を検索します。</p>
attribute=ppmode	setting=at ps2 ecp epp	<p>at: パラレルポートモードをタイプ AT に設定します。</p> <p>ps2: パラレルポートモードをタイプ PS/2 に設定します。</p> <p>ecp: パラレルポートモードをタイプ ECP に設定します（拡張機能ポート）。</p> <p>epp: パラレルポートモードをタイプ ECP に設定します（強化パラレルポート）。</p>
attribute=primaryscsi	setting=on offforce=true	<p>注意: primary scsi、romb、romba、または rombb の設定を変更する場合、システムはオペレーティングシステムを再インストールするまで操作不能となります。</p> <p>on: このデバイスを有効にします。</p> <p>off: このデバイスを無効にします。</p> <p>force=true: 設定変更の確認。</p>
attribute=romb	setting=raid off scsiforce=true	<p>raid: BIOS に RAID-on-motherboard を RAID デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>off: システム起動中にデバイスを無効にします。</p> <p>scsi: BIOS にこのデバイスを SCSI デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>force=true: 設定変更の確認。</p>
attribute=romba	setting=raid scsiforce=true	<p>raid: BIOS に RAID-on-motherboard チャンネル A を RAID デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>scsi: BIOS にこのデバイスを SCSI デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>force=true: 設定変更の確認。</p>
attribute=rombb	setting=raid scsiforce=true	<p>raid: BIOS に RAID-on-motherboard チャンネル B を RAID デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>scsi: BIOS にこのデバイスを SCSI デバイスとして検出するように指示します。</p> <p>force=true: 設定変更の確認。</p>
attribute=sata	setting=off ata raid	<p>off: SATA コントローラを無効にします。</p> <p>ata: オンボード SATA コントローラを ATA モードに設定します。</p> <p>raid: オンボード SATA コントローラを RAID モードに設定します。</p>
attribute=sataport (0..7) または (A..H)	setting=off auto	<p>off: SATA ポートを無効にします。</p> <p>auto: SATA ポートを自動的に有効にします。</p>
attribute=secondaryscsi	setting=on off	<p>on: このデバイスを有効にします。</p> <p>off: このデバイスを無効にします。</p>
attribute=serialcom	setting=off on com1 com2	<p>off: シリアル通信設定を無効にします。</p> <p>on: コンソールリダイレクトのないシリアル通信設定を有効にします。</p> <p>com1: COM 1 経由のコンソールリダイレクトのあるシリアル通信設定を有効にします。</p> <p>com2: COM 2 経由のコンソールリダイレクトのあるシリアル通信設定を有効にします。</p>
attribute=serialport1	setting=off auto com1 com3 bmcserial bmcnic rac com1bmc	<p>off: シリアルポート 1 を無効にします。</p> <p>auto: シリアルポート 1 を COM ポートにマップします。</p> <p>com1: シリアルポート 1 を COM ポート 1 にマップします。</p> <p>com3: シリアルポート 1 を COM ポート 3 にマップします。</p> <p>bmcserial: シリアルポート 1 を BMC シリアルにマップします。</p>


		<p>bmcnic: シリアルポート 1 をベースボード管理コントローラ (BMC) ネットワークインタフェースコントローラ (NIC) にマップします。</p> <p>rac: シリアルポート 1 をRemote Access Controller (RAC) にマップします。</p> <p>com1bmc: シリアルポート 1 を COM ポート 1 bmc にマップします。</p> <p>メモ: このコマンドは、PowerEdge 1850、2800、および 2850 のシステムでのみ有効です。</p>
attribute=serialport2	setting=off auto com2 com4	<p>off: シリアルポート 2 を無効にします。</p> <p>auto: シリアルポート 2 を COM ポートにマップします。</p> <p>com2: シリアルポート 2 を COM ポート 2 にマップします。</p> <p>com4: シリアルポート 2 を COM ポート 4 にマップします。</p>
attribute=speaker	setting=on off	<p>on: スピーカーを有効にします。</p> <p>off: スピーカーを無効にします。</p>
attribute=uausb	setting=on backonly off	<p>on: ユーザーがアクセス可能な USB ポートを有効にします。</p> <p>backonly: システムの背面にあるユーザーがアクセス可能な USB ポートのみを有効にします。</p> <p>off: ユーザーがアクセス可能な USB ポートを無効にします。</p>
attribute=usb	setting=enabled disabled	<p>enabled: USB ポートを有効にします。</p> <p>disabled: USB ポートを無効にします。</p> <p>メモ: システムのハードウェアによって、2 つの属性、usb と usbb のどちらかひとつだけが USB ポートの設定に使用可能です。</p>
attribute=usbb	setting=enabled enabledwithbios disabled	<p>enabled: システム起動中に USB ポートを有効にします (BIOS サポートなし)。</p> <p>enabledwithbios: システム起動中に USB ポートを有効にします (BIOS サポートあり)。</p> <p>disabled: システム起動中に USB ポートを無効にします。</p> <p>メモ: システムのハードウェアによって、2 つの属性、usb と usbb のどちらかひとつだけが USB ポートの設定に使用可能です。</p>

omconfig chassis bmc

 **メモ:** このコマンドは、今後のリリースで段階的に廃止されます。これは、将来 **omconfig chassis remoteaccess** コマンドに置き換えられます。

omconfig chassis bmc コマンドを使用して次を設定します。

- 1 ローカルエリアネットワーク (LAN) 上の BMC
- 1 BMC のシリアルポート
- 1 LAN 接続でのシリアル BMC
- 1 シリアルポートのターミナル設定
- 1 LAN 接続におけるシリアルの詳細設定
- 1 BMC ユーザーについての情報

 **メモ:** ユーザー情報を設定するには、ユーザー ID を入力する必要があります。

次のように入力します。

```
omconfig chassis bmc
```

omconfig chassis bmc コマンドからの出力には、有効な設定の一覧が表示されます。[表 4-3](#) は、有効なパラメータを表示します。

表 4-3. omconfig chassis bmc

「名前=値」のペア	「名前=値」のペア 2	説明
-----------	-------------	----

1		
config=		
config=advsol	characcuminterval=number	number: 文字累積間隔を 5 ミリ秒に設定します。
	charsendthreshold=number	number: 文字数を設定します。BMC は、この文字数（以上）がベースボードシリアルコントローラから BMC に受け入れられるとすぐに自動的にこの文字数が含まれたシリアルオーバー LAN データパケットを送信します。
config=nic	enable=true false	true: IPMI オーバー LAN を有効にします。 false: IPMI オーバー LAN を無効にします。
	encryptkey=text	text: IPMI セッションを暗号化するためのテキスト。 メモ: オプション text は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。
	gateway=gateway	Gateway: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合のゲートウェイアドレスを設定します。
	enablenic=true false	true: DRAC NIC を有効にします。 false: DRAC NIC を無効にします。 メモ: オプション enablenic は、DRAC 5 がインストールされている PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。
	IP address=IP	IP: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合の IP アドレスを設定します。
	ipsource=static dhcp systemsoftware	static: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが固定で割り当てられた IP アドレスの場合、静的です。 dhcp: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが動的ホスト設定プロトコルの場合、DHCP です。 systemsoftware: BMC LAN インタフェースの IP アドレスのソースがシステムソフトウェアからのものである場合、システムソフトウェアです。 メモ: すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。
config=nic (続き)	nicselection=nic1 teamednic1nic2 dracnic	nic1: NIC 1 を有効にします。 teamednic1nic2: NIC チーム機能を有効にします。 dracnic: DRAC 5 がインストールされている場合は、DRAC NIC を有効にします。 メモ: オプション nicselection は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。 メモ: システムに複数の NIC が内蔵されている場合は、NIC チームオプションを選択すると、NIC の間で BMC 管理トラフィックを共有できます。
	privilegelevel=administrator operator user	administrator: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。 operator: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。 user: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。
	subnet=Subnet	subnet: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合のサブネットマスクを設定します。
	vlanenable=true false	true: 仮想 LAN 識別を有効にします。 false: 仮想 LAN 識別を無効にします。
	vlanid=number	number: 1~4094 までの仮想 LAN 識別。
	vlanpriority=number	number: 0~7 までの仮想 LAN 識別の優先順位。
config=serial	baudrate=9600 19200 38400 57600 115200	9600: 接続速度を 9600 bps に設定します。 19200: 接続速度を 19200 bps に設定します。 38400: 接続速度を 38400 bps に設定します。 57600: 接続速度を 57600 bps に設定します。 115200: 接続速度を 115200 bps に設定します。 メモ: 9600、19200、38400、および 57600 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。9600 および 57600 のボーレートは、PowerEdge x9xx のシステムでサポートされています。115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。

	flowcontrol=none rtscts	<p>none: シリアルポートを介した通信フローの制御がありません。</p> <p>rtscts: RTS は送信の準備ができた (Ready to Send)、CTS は明確に送信する (Clear to Send) の意味です。</p>
config=serial (続き)	mode=directbasic directterminal directbasicterminal modembasic modemterminal modembasicterminal	<p>directbasic: シリアル接続で IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。</p> <p>directterminal: シリアル接続で印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。</p> <p>directbasicterminal: シリアル接続上での基本モードとターミナルモードのメッセージ。</p> <p>modembasic: モデムでの IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。</p> <p>modemterminal: モデムで印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。</p> <p>modembasicterminal: モデムを使った基本メッセージとターミナルメッセージ。</p> <p>メモ: すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。</p>
	privilegelevel=adminstrator operator user	<p>adminstrator: シリアル接続で受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。</p> <p>operator: シリアル接続で受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。</p> <p>user: シリアル接続で受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。</p>
config=serialoverlan	enable=true false	<p>true: BMC でシリアルオーバー LAN を有効にします。</p> <p>false: BMC でシリアルオーバー LAN を無効にします。</p>
	baudrate=9600 19200 38400 57600 115200	<p>9600: 揮発性および非揮発性接続速度を 9600 bps に設定します。</p> <p>19200: 揮発性および非揮発性接続速度を 19200 bps に設定します。</p> <p>38400: 揮発性および非揮発性接続速度を 38400 bps に設定します。</p> <p>57600: 揮発性および非揮発性接続速度を 57600 bps に設定します。</p> <p>115200: 揮発性および非揮発性接続速度を 115200 bps に設定します。</p> <p>メモ: 9600 および 19200 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。9600 および 57600 のボーレートは、PowerEdge x9xx のシステムでサポートされています。115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。</p>
	privilegelevel=adminstrator operator user	<p>adminstrator: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。</p> <p>operator: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。</p> <p>user: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。</p>
config=setto default		デフォルトの設定を使用します。
config=terminalmode	deletecontrol=outputdel outputbkspspbks	<p>outputdel: BMC は、 か を受け取ると、 を出力します。</p> <p>outputbkspspbks: BMC は、<bksp>またはを受け取ると、<bksp><sp><bksp>を出力します。</p>
	echocontrol=enabled disabled	<p>enabled: 画面に送信する文字を有効にします。</p> <p>disabled: 画面に送信する文字を無効にします。</p>
	handshakingcontrol=enabled disabled	<p>enabled: 入力バッファが別のコマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示します。</p> <p>disabled: 入力バッファが別のコマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示しません。</p>
	inputlinesequence=cr null	<p>cr: コンソールは新しいラインシーケンスに <CR> を使用します。</p> <p>null: コンソールは新しいラインシーケンスに <NULL> を使用します。</p>
	lineediting=enabled disabled	<p>enabled: ラインをタイプしたとき、ライン編集を有効にします。</p> <p>disable: ラインをタイプしたとき、ライン編集を無効にします。</p>
	newlinesequence=none crlf null cr lfcr lf	<p>none: BMC は終結シーケンスを使用しません。</p> <p>crlf: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<CR-LF>を使用します。</p> <p>null: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<NULL>を使用します。</p> <p>cr: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<CR>を使用します。</p>

		<p>lfor: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<LF-CR>を使用します。</p> <p>lf: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<LF>を使用します。</p>
config=user	id=number enable=true false	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>enable=true: ユーザーを有効にします。</p> <p>enable=false: ユーザーを無効にします。</p>
	id=number enableserialoverlan=true false	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>enableserialoverlan=true: serialoverlan を有効にします。</p> <p>enableserialoverlan=false: serialoverlan を無効にします。</p> <p>メモ: オプション enableserialoverlan は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。</p>
	id=number name=text	<p>number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>name=text: ユーザーの名前。</p>
	id=number newpw=text confirmnewpw=text	<p>number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>newpw=text: ユーザーの新しいパスワード。</p> <p>confirmnewpw=text: ユーザーの新しいパスワードの確認。</p>
	id=number serialaccesslevel=administrator operator user none	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>serialaccesslevel=administrator: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=operator: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてオペレータのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=user: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてユーザーのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=none: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルのアクセス特権がありません。</p>
config=user (続き)	id=user id dracusergroup=admin poweruser guest testalert custom none	<p>id=user id: 設定されているユーザーのユーザー ID。</p> <p>メモ: RAC グループのみを設定できます。dracusergroup オプションは、システムに DRAC 5 が存在する場合のみ、使用可能です。</p> <p>dracusergroup=admin: システム管理者ユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=poweruser: パワーユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=guest: ゲストユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=testalert: テスト警告ユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=custom: カスタムユーザー特権を有効にします。</p> <p>メモ: dracusergroup=custom の「名前=値」のペアの詳細に関しては、表 4-4 を参照してください。</p> <p>dracusergroup=none: ユーザー特権を有効にしません。</p>
	id=number lanaccesslevel=administrator operator user none	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>lanaccesslevel=administrator: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=operator: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてオペレータのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=user: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてユーザーのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=none: ID を持つユーザーは、LAN チャネルのアクセス特権がありません。</p>



表 4-4. omconfig chassis bmc config=user id=<ユーザー ID> dracusergroup=custom

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
config=		

config=user	id=user id dracusergroup=custom	logindrac= true false configuredrac= true false configure users= true false clearlogs= true false executeservercommands= true false accessconsoleredir= true false accessvirtualmedia= true false testalerts= true false
-------------	------------------------------------	---

omconfig chassis currents

omconfig chassis currents コマンドを使って、アンペアブロープ警告しきい値を設定します。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。

-  **メモ:** 設定可能なしきい値はシステム構成によって異なります。
-  **メモ:** 組み込みシステム管理 3 (ESM3) 機能を持つシステムでは警告しきい値をデフォルト値に設定することはできません。

電流警告しきい値に対する有効なパラメータ

表 4-5 は、電流しきい値設定に有効なパラメータを表示します。


-  **メモ:** インデックスパラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合、Server Administrator はシステムにあるすべての電流ブロープ用に設定された状態、読み取り値、およびしきい値の概要を表示します。すべてのシステムに、電流ブロープが存在しないシステムもあります。インデックスを指定する場合、Server Administrator は特定の電流ブロープの概要を表示します。

表 4-5. omconfig chassis currents

「名前=値」のペア	説明
index=<n>	ブロープまたはブロープインデックスの番号（指定が必要）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。
minwarnthresh=<n>	最小警告しきい値（小数点以下 3 桁）。
maxwarnthresh=<n>	最大警告しきい値（小数点以下 3 桁）。

デフォルトの最小および最大警告しきい値

電流の上限と下限警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis currents index=0 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

最小および最大警告しきい値の指定

電流ブロープの警告しきい値を指定する場合、設定するブロープ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、ブロープ 0 を設定します。

```
omconfig chassis currents index=0 minwarnthresh=3.310 maxwarnthresh=3.381
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
Current probe warning threshold(s) set successfully.
```

（電流ブロープの警告しきい値は正常に設定されました。）

omconfig chassis fans

omconfig chassis fan コマンドを使って、ファンブロープ警告しきい値を設定します。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。


ファン警告しきい値の有効なパラメータ

表 4-6 は、ファン警告しきい値設定に有効なパラメータを表示します。

表 4-6. omconfig chassis fans

「名前=値」のペア	説明
index=<n>	ブロープまたはブロープインデックスの番号（指定が必要）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。
minwarnthresh=<n>	最小警告しきい値。
maxwarnthresh=<n>	最大警告しきい値。

デフォルトの最小および最大警告しきい値


 **メモ:** ESM 3、ESM4、および BMC の機能を持つシステムでは警告しきい値をデフォルト値に設定することはできません。

上限と下限ファン警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis fans index=0 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

最小および最大警告しきい値の指定

 **メモ:** ファンブロープの最小および最大警告しきい値は、PowerEdge x8xx および x9xx のシステムでは設定できません。

ファンブロープの警告しきい値を指定する場合、設定するブロープ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、ブロープ 0 を設定します。最初のコマンドは最小しきい値のみを設定し、2 番目のコマンドは最小および最大しきい値の両方を設定します。

```
omconfig chassis fans index=0 minwarnthresh=4580
omconfig chassis fans index=0 minwarnthresh=4580 maxwarnthresh=9160
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
Fan probe warning threshold(s) set successfully.
（ファンブロープの警告しきい値は正常に設定されました。）
```

omconfig chassis fancontrol

omconfig chassis fancontrol コマンドを使って、ファン速度を設定します。ファン速度は、静かまたは冷却速度に合わせて最適化できます。表 4-7 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-7. omconfig chassis fancontrol

「名前=値」のペア	説明
speed=quiet	静かに操作が実行されるようにファン速度を設定します。
speed=maxcool	最大冷却が実行されるようにファン速度を設定します。

omconfig chassis frontpanel

omconfig chassis frontpanel コマンドを使って、電源ボタンとマスク不可割込み (NMI) ボタンを設定し、LCD ライン番号を指定および設定します。


 **メモ:** 電源ボタンと NMI ボタンがシステムにある場合、これらを設定することができます。

表 4-8 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-8. omconfig chassis frontpanel

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
lcdindex=<インデックス>	なし	LCD ライン番号を指定します。
config=none default custom	なし	none: LCD テキストを「なし」に設定します。 default: LCD テキストをデフォルトに設定します。 custom: LCD テキストをカスタムに設定します。
text=<カスタムテキスト>	なし	config=custom のときに LCD のカスタムテキストを設定します。
nmibutton	enable=true false	true: システムの NMI ボタンを有効にします。 false: システムの NMI ボタンを無効にします。
powerbutton	enable=true false	true: システムの電源ボタンを有効にします。 false: システムの電源ボタンを無効にします。

omconfig chassis info

omconfig chassis info コマンドを使って、システムの管理タグとシャーシ名を入力します。システムがモジュラシステムの場合、モジュラコンポーネントの管理タグも入力できます。表 4-9 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-9. omconfig chassis info

「名前=値」のペア	説明
index=<数値>	管理タグまたは名前を設定するシャーシの番号。
tag=<テキスト>	英数字テキストによる管理タグ。10 文字以下の英数字を使用します。
name=<テキスト>	シャーシ名

以下の例では、メインシステムシャーシの管理タグを **buildsys** に設定します。

```
omconfig chassis info index=0 tag=buildsys
```

インデックス 0 はメインシステムシャーシのデフォルト値です。次のコマンドでは `index=n` が省略されていますが、結果は同じです。

```
omconfig chassis info tag=buildsys
```

有効なコマンドが実行されると、結果として次のメッセージが表示されます。

```
Chassis info set successfully.
```

(シャーシ情報は正常に設定されました。)

シャーシによっては、異なる名前を割り当てることができます。メインシステムシャーシの名前を変更することはできません。下の例では、シャーシ 2 の名前を **storscsi1** から **storscsia** に変更します。

```
omconfig chassis info index=2 name=storscsia
```

他のコマンドでは、シャーシ 2 (メイン シャーシ=0) がない場合、CLI によってエラーメッセージが表示されます。CLI では、存在するシステム構成に対してのみコマンドを実行できます。

omconfig chassis leds

omconfig chassis leds コマンドを使って、シャーシフォールト LED またはシャーシ識別 LED が点滅する時間を指定して、システムのハードドライブの LED をクリアすることができます。表 4-10 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-10. omconfig chassis leds

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	説明
index=<n>	なし	LED が存在するシャーシ番号 (デフォルトはメインシステムシャーシであるシャーシ 0)。
led=fault	severity=warning critical	警告イベントまたは重要イベントの発生時に、LED を点滅するように選択します。
led=hdfault	action=clear	ハードドライブのフォールト数を 0 に戻します。

led=identify	flash=off on time-out=<n>	シャーシ識別 LED をオフまたはオンに設定します。LED が点滅するタイムアウト値を秒数で設定します。
--------------	--------------------------------	--

omconfig chassis memorymode

omconfig chassis memorymode コマンドを使用して、メモリエラーが発生したときにシステムのメモリで使用する冗長性モードを指定します。

冗長メモリを使うと、現在使用中のモジュールに許容できないエラーが検出されたときに、システムを使用できる他のメモリモジュールに切り替えることができます。**omconfig chassis memorymode** コマンドを使用すると、冗長性を無効にすることができます。冗長性を無効にすると、システムが使用しているモジュールにエラーが発生したときに、使用できる他のメモリモジュールに切り替えないようにシステムに指示を出すことになります。冗長性を有効にする場合、スベア、ミラー、および RAID の中から選択する必要があります。

スベアモードを使用すると、訂正可能なメモリイベントが検出されたときにシステムメモリのバンクが無効になり、スベアバンクが有効になって、オリジナルバンクのデータがすべてスベアバンクにコピーされます。スベアバンクには、少なくとも 3 つの同一メモリのバンクが必要です。オペレーティングシステムはスベアバンクを認識しません。

ミラーモードは、訂正不可能なメモリイベントが検出されたときに、メモリの冗長コピーに切り替えます。ミラーリングされたメモリに切り替えた後、システムは次回再起動時までオリジナルのシステムメモリに切り替わりません。このモードではオペレーティングシステムはインストールされているシステムメモリの半分を認識しません。

RAID モードでは、メモリチェックとエラー回復のレベルが向上しますが、メモリ容量が低下します。

[表 4-11](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-11. omconfig chassis memorymode

「名前=値」のペア 1	説明
index=<n>	メモリモジュールが常駐するシャーシ番号（デフォルトはメインシステムシャーシのシャーシ 0 です）。
redundancy=spare mirror disabled raid5	Spare は訂正可能なメモリイベントを持つメモリモジュールを無効にし、エラーがあったモジュールのデータをスベアバンクにコピーします。 Disabled は、訂正不可能なメモリイベントが検出されたときにシステムでその他のメモリモジュールを使用しないことを示します。 Mirror は、エラーのあったモジュールに訂正不可能なメモリイベントが検出された場合、システムをミラーリングされたメモリのコピーに切り替えます。ミラーモードでは、オペレーティングシステムはシステムが再起動されるまでオリジナルのモジュールに戻りません。 RAID5 はシステムメモリの設定方法です。これは理論的には、ハードドライブのストレージシステムで使用される RAID 5 モードに似ています。このメモリモードでは、メモリチェックとエラー回復のレベルが向上しますが、メモリ容量が低下します。サポートしている RAID モードは、循環パリティの RAID レベル 5 ストライピングです。

omconfig chassis remoteaccess

メモ: このコマンドは、PowerEdge x8xx および x9xx のシステムにのみ適用可能です。

omconfig chassis remoteaccess コマンドを使用して次を設定します。

- ローカルエリアネットワーク（LAN）上のリモートアクセス。
- インストールされている BMC または RAC 用のシリアルポート。
- シリアルオーバー LAN 接続の BMC または RAC。
- シリアルポートのターミナル設定。
- LAN 接続におけるシリアルの詳細設定。
- BMC または RAC ユーザーの情報。

メモ: ユーザー情報を設定するには、ユーザー ID を入力する必要があります。

次のように入力します。

```
omconfig chassis remoteaccess
```

omconfig chassis remoteaccess コマンドからの出力には、有効な設定の一覧が表示されます。[表 4-3](#) は、有効なパラメータを表示します。

表 4-12. omconfig chassis remoteaccess

「名前=値」のペア 1 config=	「名前=値」のペア 2	説明
config=advsol	characcuminterval=number	number: 文字累積間隔を 5 ミリ秒に設定します。
	charsendthreshold=number	number: 文字数を設定します。BMC は、この文字数（以上）がベースボードシリアルコントローラから BMC に受け入れられるとすぐに自動的にこの文字数が含まれたシリアルオーバー LAN データパケットを送信します。
config=nic	enable=true false	true: IPMI オーバー LAN を有効にします。

		<p>false: IPMI オーバー LAN を無効にします。</p>
	<p>encryptkey=text</p> <p>confirmencryptkey=text</p>	<p>text: 暗号化と暗号化の確認に使用されるテキスト。</p> <p>メモ: オプション text は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。</p>
	<p>gateway=Gateway</p>	<p>Gateway: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合のゲートウェイアドレスを設定します。</p>
	<p>enablenic=true false</p>	<p>true: DRAC NIC を有効にします。</p> <p>false: DRAC NIC を無効にします。</p> <p>メモ: オプション enablenic は、DRAC 5 がインストールされている PowerEdge x9xx のシステムでサポートされています。</p>
	<p>IP address=IP</p>	<p>ip: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合の IP アドレスを設定します。</p>
config=nic (続き)	<p>ipsource=static dhcp systemsoftware</p>	<p>static: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが固定で割り当てられた IP アドレスの場合、静的です。</p> <p>dhcp: BMC LAN インタフェースの IP アドレスが動的ホスト設定プロトコルの場合、DHCP です。</p> <p>systemsoftware: BMC LAN インタフェースの IP アドレスのソースがシステムソフトウェアからのものである場合、システムソフトウェアです。</p> <p>メモ: すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。</p>
	<p>nicselection=nic1 teamednic1nic2 dracnic</p>	<p>nic1: NIC 1 を有効にします。</p> <p>teamednic1nic2: NIC チーム機能を有効にします。</p> <p>dracnic: DRAC 5 がインストールされている場合は、DRAC NIC を有効にします。</p> <p>メモ: オプション nicselection は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。</p>
	<p>privilegelevel=adminstrator operator user</p>	<p>administrator: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。</p> <p>operator: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。</p> <p>user: LAN チャネルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。</p>
	<p>subnet=Subnet</p>	<p>subnet: BMC LAN インタフェースの IP アドレスソースに静的アドレスを選択した場合のサブネットマスクを設定します。</p>
config=nic (続き)	<p>vlanenable=true false</p>	<p>true: 仮想 LAN 識別を有効にします。</p> <p>false: 仮想 LAN 識別を無効にします。</p>
	<p>vlanid=number</p>	<p>number: 1~4094 までの仮想 LAN 識別。</p>
	<p>vlanpriority=number</p>	<p>number: 0~7 までの仮想 LAN 識別の優先順位。</p>
config=serial	<p>baudrate=9600 19200 38400 57600 115200</p>	<p>9600: 接続速度を 9600 bps に設定します。</p> <p>19200: 接続速度を 19200 bps に設定します。</p> <p>38400: 揮発性および非揮発性接続速度を 38400 bps に設定します。</p> <p>57600: 揮発性および非揮発性接続速度を 57600 bps に設定します。</p> <p>115200: 揮発性および非揮発性接続速度を 115200 bps に設定します。</p> <p>メモ: 9600 および 19200 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。9600 19200 38400 および 57600 のボーレートは、PowerEdge x9xx のシステムでサポートされています。115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。</p>
	<p>flowcontrol=none rtscts</p>	<p>none: シリアルポートを介した通信フローの制御がありません。</p> <p>rtscts: RTS は送信の準備ができた (Ready to Send)、CTS は明確に送信する (Clear to Send) の意味です。</p>
config=serial (続き)	<p>mode=directbasic directterminal directbasicterminal modembasic modemterminal modembasicterminal</p>	<p>directbasic: シリアル接続で IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。</p> <p>directterminal: シリアル接続で印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。</p> <p>directbasicterminal: シリアル接続上での基本モードとターミナルモードのメッセージ。</p> <p>modembasic: モデムでの IPMI メッセージに使用するメッセージの種類。</p>

		<p>modemterminal: モデムで印刷可能な ASCII 文字を使い、限定数のテキストコマンドを使用できるメッセージの種類。</p> <p>modembasicterminal: モデムを使った基本メッセージとターミナルメッセージ。</p> <p>メモ: すべてのコマンドがシステムでサポートされているわけではありません。</p>
	privilegelevel=administrator operator user	<p>administrator: シリアル接続で受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。</p> <p>operator: シリアル接続で受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。</p> <p>user: シリアル接続で受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。</p>
config=serialoverlan	enable=true false	<p>true: BMC でシリアルオーバー LAN を有効にします。</p> <p>false: BMC でシリアルオーバー LAN を無効にします。</p>
	baudrate=9600 19200 38400 57600 115200	<p>9600: 揮発性および非揮発性接続速度を 9600 bps に設定します。</p> <p>19200: 揮発性および非揮発性接続速度を 19200 bps に設定します。</p> <p>38400: 揮発性および非揮発性接続速度を 38400 bps に設定します。</p> <p>57600: 揮発性および非揮発性接続速度を 57600 bps に設定します。</p> <p>115200: 揮発性および非揮発性接続速度を 115200 bps に設定します。</p> <p>メモ: 9600 および 19200 のボーレートは、PowerEdge 1800、1850、2800、および 2850 のシステムでサポートされています。9600 および 57600 のボーレートは、PowerEdge x9xx のシステムでサポートされています。115200 のボーレートは、DRAC 5 がインストールされている特定のシステムでサポートされています。</p>
	privilegelevel=administrator operator user	<p>administrator: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をアドミニストレータに設定します。</p> <p>operator: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をオペレータに設定します。</p> <p>user: シリアルオーバー LAN チャネルで受け入れられる最大特権をユーザーに設定します。</p>
config=setto default		デフォルトの設定を使用します。
config=terminalmode	deletecontrol=outputdel outputbkspspbks	<p>outputdel: BMC は、<bksp> か を受け取ると、 を出力します。</p> <p>outputbkspspbks: BMC は、<bksp>またはを受け取ると、<bksp><sp><bksp>を出力します。</p>
config=terminalmode (続き)	echocontrol=enabled disabled	<p>enabled: 画面に送信する文字を有効にします。</p> <p>disabled: 画面に送信する文字を無効にします。</p>
	handshakingcontrol=enabled disabled	<p>enabled: 入力バッファが別のコマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示します。</p> <p>disabled: 入力バッファが別のコマンドを受け入れる準備ができたときに、文字シーケンスを出力するよう BMC に指示しません。</p>
	inputlinesequence=cr null	<p>cr: コンソールは新しいラインシーケンスに <CR> を使用します。</p> <p>null: コンソールは新しいラインシーケンスに <NULL> を使用します。</p>
	lineediting=enabled disabled	<p>enabled: ラインをタイプしたとき、ライン編集を有効にします。</p> <p>disable: ラインをタイプしたとき、ライン編集を無効にします。</p>
	newlinesequence=none crlf null cr lfcr lf	<p>none: BMC は終結シーケンスを使用しません。</p> <p>crlf: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<CR-LF>を使用しません。</p> <p>null: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<NULL>を使用しません。</p> <p>cr: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<CR>を使用します。</p> <p>lfcr: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<LF-CR>を使用しません。</p> <p>lf: BMC は、新しいラインがコンソールに書き込まれたときに、新しいラインシーケンスに<LF>を使用します。</p>
config=user	id=number enable=true false	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>enable=true: ユーザーを有効にします。</p> <p>enable=false: ユーザーを無効にします。</p>
	id=number enableserialoverlan=true false	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p>


		<p>enableserialoverlan=true: シリアルオーバー LAN を有効にします。</p> <p>enableserialoverlan=false: シリアルオーバー LAN を無効にします。</p> <p>メモ: オプション enableserialoverlan は、PowerEdge x9xx のシステムでのみサポートされています。</p>
	id=number name=text	<p>number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>name=text: ユーザーの名前。</p>
	id=number newpw=text confirmnewpw=text	<p>number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>newpw=text: ユーザーの新しいパスワード。</p> <p>confirmnewpw=text: ユーザーの新しいパスワードの確認。</p>
	id=number serialaccesslevel=administrator operator user none	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>serialaccesslevel=administrator: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=operator: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてオペレータのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=user: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルについてユーザーのアクセス特権があります。</p> <p>serialaccesslevel=none: ID を持つユーザーは、シリアルポートチャネルのアクセス特権がありません。</p>
config=user (続き)	id=number lanaccesslevel=administrator operator user none	<p>id=number: 設定されているユーザーの ID 番号。</p> <p>lanaccesslevel=administrator: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてアドミニストレータのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=operator: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてオペレータのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=user: ID を持つユーザーは、LAN チャネルについてユーザーのアクセス特権があります。</p> <p>lanaccesslevel=none: ID を持つユーザーは、LAN チャネルのアクセス特権がありません。</p>
	id=user id dracusergroup=admin poweruser guest testalert custom none	<p>id=user id: 設定されているユーザーのユーザー ID。</p> <p>dracusergroup=admin: システム管理者ユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=poweruser: パワーユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=guest: ゲストユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=testalert: テスト警告ユーザー特権を有効にします。</p> <p>dracusergroup=custom: カスタムユーザー特権を有効にします。</p> <p>メモ: dracusergroup=custom の「名前=値」のペアの詳細に関しては、表 4-13 を参照してください。</p> <p>dracusergroup=none: ユーザー特権を有効にしません。</p>

表 4-13. omconfig chassis remoteaccess config=user id=<ユーザー ID> dracusergroup=custom

「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2	「名前=値」のペア 3	説明
config=user (続き)	id=user id	logindrac= true false	true/false: DRAC へのログインを有効または無効にします。
	dracusergroup=custom	configuredrac= true false	true/false: DRAC の設定を有効または無効にします。
		configure users= true false	true/false: ユーザーの設定を有効または無効にします。
		clearlogs= true false	true/false: ログのクリアを有効または無効にします。
		executeservercommands= true false	true/false: サーバーコマンドの実行を有効または無効にします。
		accessconsoleredir= true false	true/false: コンソールリダイレクトへのアクセスを有効または無効にします。
		accessvirtualmedia= true false	true/false: 仮想メディアへのアクセスを有効または無効にします。
		testalerts= true false	true/false: テスト警告を有効または無効にします。

omconfig chassis temps

omconfig chassis temps コマンドを使って、温度プローブの警告しきい値を設定します。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。

 **メモ:** 設定可能なしきい値はシステム構成によって異なります。


温度警告しきい値の有効なパラメータ

[表 4-14](#) は、温度警告しきい値設定に有効なパラメータを表示します。

表 4-14. omconfig chassis temps

「名前=値」のペア	説明
index=<n>	プローブまたはプローブインデックスの番号（指定が必要）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。
minwarnthresh=<n>	最小警告しきい値（小数点以下 1 桁）。
maxwarnthresh=<n>	最大警告しきい値（小数点以下 1 桁）。

デフォルトの最小および最大警告しきい値


 **メモ:** センサーを管理する機能はシステムによって異なります。

上限と下限温度警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis temps index=0 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

最小および最大警告しきい値の指定

 **メモ:** PowerEdge x8xx および x9xx のシステムでは、大気の温度に関してのみ温度プローブの警告しきい値を設定できます。

温度プローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、プローブ 4 を設定します。

```
omconfig chassis temps index=4 minwarnthresh=11.2 maxwarnthresh=58.7
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
Temperature probe warning threshold(s) set successfully.
```

(温度プローブの警告しきい値は正常に設定されました。)

omconfig chassis volts

omconfig chassis volts コマンドを使って、電圧プローブ警告しきい値を設定します。他のコンポーネントに関しては、警告とエラーしきい値の両方を表示することができますが、エラーしきい値を設定することはできません。最小および最大エラーしきい値はシステム製造元によって設定されます。

電圧警告しきい値の有効なパラメータ

[表 4-15](#) は、電圧警告しきい値に有効なパラメータを表示します。


 **メモ:** 設定可能なしきい値はシステム構成によって異なります。

表 4-15. omconfig chassis volts

「名前=値」のペア	説明
index=<n>	プローブインデックス（指定する必要があります）。
warnthresh=default	最小および最大警告しきい値をデフォルトの状態に設定します。

minwarnthresh=<n>	最小警告しきい値（小数点以下 3 桁）。
maxwarnthresh=<n>	最大警告しきい値（小数点以下 3 桁）。

デフォルトの最小および最大警告しきい値

メモ: ESM 3 機能を持つシステムでは警告しきい値をデフォルト値に設定することはできません。

上限と下限電圧警告しきい値の両方を、推奨されているデフォルト値に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig chassis volts index=2 warnthresh=default
```

1 つの値をデフォルト状態にして別の値を設定することはできません。つまり、最小警告しきい値をデフォルト状態にすると、最大警告しきい値もデフォルト値を選択することになります。

最小および最大警告しきい値の指定

メモ: 電圧の最小および最大警告しきい値は、PowerEdge x8xx のシステムでは設定できません。

電圧プローブの警告しきい値を指定する場合、設定するプローブ番号と最小、および / あるいは最大警告しきい値を指定する必要があります。次の例では、プローブ 0 を設定します。

```
omconfig chassis volts index=0 minwarnthresh=1.900 maxwarnthresh=2.250
```

このコマンドを実行して、システムによる指定値の設定が完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
Voltage probe warning threshold(s) set successfully.
```

（電圧プローブの警告しきい値は正常に設定されました。）

omconfig preferences

omconfig preferences コマンドを使用して、システムのユーザー設定を設定します。コマンドラインで、SNMP ルートパスワードを設定し、Server Administrator にアクセスできるユーザーレベルを指定できます。Active Directory service と SNMP Set 操作も設定できます。

omconfig preferences cdvformat

omconfig preferences cdvformat を使用して、レポートされたデータフィールドをカスタム区切りフォーマットで分けるデリミタを指定します。デリミタの有効値は、exclamation（感嘆符）、semicolon（セミコロン）、at（@マーク）、hash（シャープ記号）、dollar（ドル記号）、percent（パーセント記号）、caret（caret）、asterisk（アスタリスク）、tilde（波型記号）、question（疑問符）、colon（コロン）、comma（コンマ）、pipe（パイプ）です。

アスタリスクを使ってデータフィールドを分けるデリミタの設定の例は以下のとおりです。

```
omconfig preferences cdvformat delimiter=asterisk
```

omconfig preferences dirservice

omconfig preferences dirservice コマンドを使用すると、Active Directory サービスを設定できます。<製品名>oem.ini ファイルは、これらの変更を反映して修正されます。<製品名>oem.ini ファイルに "adproductname" がいない場合は、デフォルト値が使用されます。デフォルト値は <コンピュータ名><製品名> で、<コンピュータ名> は Server Administrator を実行しているコンピュータの名前、<製品名> は omprv32.ini で定義されている製品の名前を指します。Server Administrator の場合、これは "omsa" です。

したがって、Server Administrator を実行している "myOmsa" という名前のコンピュータの場合、デフォルト名は "myOmsa-omsa" となります。これは、スナップインツールを使って Active Directory で定義されている Server Administrator の名前です。ユーザー特権を検索するには、この名前が Active Directory のアプリケーションオブジェクトの名前と一致する必要があります。

メモ: このコマンドは、Windows オペレーティングシステムを実行しているシステムのみ適用します。

表 4-16 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-16. Active Directory サービスの設定パラメータ

「名前=値」のペア	説明
prodname=<テキスト>	Active Directory の設定変更を適用する製品を指定します。 Prodname は、omprv32.ini で定義した製品の名前を指します。Server Administrator の場合、これは "omsa" です。
enable=<true false>	true: Active Directory サービスの認証サポートと Active Directory ログイン オプションをログインページで有効にします。 false: Active Directory サービスの認証サポートと Active Directory ログイン オプションをログインページで無効にします。 Active Directory ログイン オプションが表示されない場合、ログインできるのはローカルマシンのアカウントのみです。

adprodnname=<テキスト>	Active Directory サービスで定義した製品の名前を指定します。この名前は、ユーザー認証のために製品を Active Directory の権限データに関連付けます。
--------------------	---

omconfig preferences snmp

SNMP ルートパスワードを設定すると、システム管理者は重要なシステム管理介入を行うことができる SNMP 設定操作へのアクセスを制限することができます。SNMP ルートパスワードは、通常どおり（1つのコマンドラインにすべてのパラメータを入力）か、またはインタラクティブに設定できます。

omconfig preferences snmp コマンドを使って、SNMP Set 操作を設定することもできます。

注意: インタラクティブモードは、SNMP ルートパスワードを設定するのに一層安全な方法です。非インタラクティブモードでは、newpw と confirmnewpw オプションに入力する値は、入力したときにシステムのモニタに表示されます。インタラクティブモードでは、パスワードに入力した値はマスクされています。

SNMP ルートパスワードに設定するパラメータは、インタラクティブに設定しても非インタラクティブに設定しても同じです。

メモ: setting=rootpw を指定しても、その他の「名前=値」ペアのパラメータを指定しない場合、インタラクティブモードを入力したことになり、コマンドラインは残りの値の入力を求めます。

表 4-17 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-17. SNMP ルートパスワードのパラメータ

「名前=値」のペア	説明
setting=rootpw	必須。
oldpw=<古いパスワード>	古い SNMP ルートパスワードを入力します。
newpw=<新しいパスワード>	新しい SNMP ルートパスワードを設定します。
confirmnewpw=<新しいパスワード>	新しい SNMP ルートパスワードを確認します。

omconfig preferences snmp setting=rootpw と入力すると、システムは、必須パラメータへの値の入力を求めます。

omconfig preferences snmp と入力する場合、初期コマンドラインのすべてのパラメータを提供する必要があります。たとえば以下ようになります。

```
omconfig preferences snmp setting=rootpw oldpw=openmanage newpw=serveradmin confirmnewpw=serveradmin
```

表 4-18. SNMP Set 操作パラメータ

「名前=値」のペア	説明
setting=snmpset	必要
enable=true	SNMP Set 操作を有効にする
enable=false	SNMP Set 操作を無効にする

たとえば、SNMP Set 操作を無効にするには、次のコマンドを使います。

```
omconfig preferences snmp setting=snmpset enable=false
```

メモ: SNMP Set 操作を有効 / 無効にするコマンドを実行した後で、サービスを再起動して変更を有効にします。対応 Microsoft Windows オペレーティングシステムを使用しているシステムでは、Windows SNMP サービスを再起動します。対応 Red Hat Enterprise Linux および SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムを使用しているシステムでは、svadmin-services.sh restart コマンドを実行して Server Administrator サービスを再起動します。

omconfig preferences useraccess

企業の方針によっては、Server Administrator に対して一部のユーザーが持つアクセスを制限した方がいい場合があります。omconfig preferences useraccess コマンドを使用すると、Server Administrator にアクセスできるユーザーまたはパワーユーザーの権利を与えたり差し控えることができます。

表 4-19 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-19. システム管理者、パワーユーザーおよびユーザー用のユーザーアクセス有効化

コマンド	結果	説明
omconfig preferences useraccess enable=user	Server Administrator アクセスをユーザー、パワーユーザーおよびシステム管理者に与えます。	最も制限のないユーザーアクセスです。
omconfig preferences useraccess enable=poweruser	Server Administrator アクセスをパワーユーザーとシステム管理者に与えます。	ユーザーレベルのアクセスのみを除外します。

omconfig preferences useraccess enable=admin	Server Administrator アクセスをシステム管理者にのみ与えます。	最も制限的なユーザーアクセスです。
--	---	-------------------

omconfig system

omconfig system コマンドを使って、ログのクリア、シャットダウン方法の決定、所有コストの初期値設定および編集、ハンク状態にあるオペレーティングシステムの対応方法決定などが実行できます。

omconfig system alertaction

omconfig system alertaction コマンドを使って、コンポーネントに警告またはエラーイベントが発生した場合の対応方法を決定します。

警告処置の定義

警告処置とは、指定した条件が満たされた場合にシステムが実行する操作です。警告処置は、イントルージョン、ファン、温度、電圧、電源装置、メモリ、および冗長に関し警告またはエラーイベントが発生した場合、どのように対処するかを事前に決定するものです。

たとえば、ファンロープの最小警告しきい値が 600 RPM である場合、システムのファンロープがファン 300 RPM を読み取ると、システムはファンロープ警告が発生します。警告処置設定によって、このイベントの通知方法が決定されます。警告またはエラー範囲内にある温度、電圧、および電流フロープ読み取り値に対して警告処置を設定することもできます。

警告処置を設定する構文

警告処置を設定するには 2 つの「名前=値」のペア が必要になります。最初の「名前=値」のペアはイベントタイプです。2 番目の「名前=値」のペアはこのイベントで実行する操作です。たとえば、次のコマンドを参照してください。

```
omconfig system alertaction event=powersupply broadcast=true
```

この場合、イベントは電源装置エラーで、操作は全ての Server Administrator ユーザーへのメッセージ送信です。

使用できる警告処置

表 4-20 は、警告処置の設定が可能なコンポーネントの警告処置を表示します。

表 4-20. 警告イベントとエラーイベントに設定できる警告処置

警告処置の設定	説明
alert=true false	true: システムのコンソール警告を有効にします。有効になると、Server Administrator を実行しているシステムに取り付けられたモニタの画面表示上に警告メッセージが表示されます。 false: システムのコンソール警告を無効にします。
broadcast=true false	true: アクティブなターミナル（またはリモートデスクトップ）セッション（Windows）内のすべてのユーザー、およびローカルシステム（Linux）上のオペレータへのメッセージまたは警告の送信を有効にします。 false: 警告送信を無効にします。
clearall=true	このイベントの処置をすべてクリアします。
execappth=<文字列>	このウィンドウに説明されるコンポーネントのイベントが発生した場合に実行するアプリケーションの完全パスとファイル名を設定します。
execapp=false	実行可能なアプリケーションを無効にします。

警告処理を設定できるコンポーネントとイベント

表 4-21 では警告処置を設定できるコンポーネントとイベントを一覧表示します。コンポーネントはアルファベット順に表示しますが、警告イベントは常にコンポーネントのエラーイベントより先に表示します。

表 4-21. 警告処置の設定可能なイベント

イベント名	説明
event=batterywarn	バッテリーがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=batteryfail	バッテリーロープがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=currentwarn	電流ロープが警告値を検出した場合の処置を設定します。

event=currentfail	電流プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=fanwarn	ファンプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=fanfail	ファンプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=hardwarelogwarn	ハードウェアログがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=hardwarelogfull	ハードウェアログがいっぱいのときの処置を設定します。
event=intrusion	シャーシイントルージョンイベントを検出した場合の処置を設定します。
event=memprefail	メモリプローブがプリエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=memfail	メモリプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=powersupply	電源装置がエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=powersupplywarn	電源装置が警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=processorwarn	プロセッサがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=processorfail	プロセッサプローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=redundegrad	冗長コンポーネントが使用できなくなり、コンポーネントの完全冗長性が失われた場合の処置を設定します。
event=redunlost	1つまたは複数の冗長コンポーネントが使用できなくなり、冗長コンポーネントの損失または冗長性不能状態になった場合の処置を設定します。
event=tempwarn	温度プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=tempfail	温度プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=voltwarn	電圧プローブが警告値を検出した場合の処置を設定します。
event=voltfail	電圧プローブがエラー値を検出した場合の処置を設定します。
event=watchdogasr	ウォッチドッグ自動システム回復（ASR）がハングしたオペレーティングシステムに対して実行された後に、次のシステムスタートアップで Server Administrator が実行する処置を設定します。

警告処置コマンド例

以下に有効なコマンドの例を示します。各コマンドが成功すると、次のメッセージが表示されます。

```
Alert action(s) configured successfully.
```

（警告処置は正常に設定されました。）

電流プローブ処置の例

電流プローブが警告イベントを検出した場合に発するシステムのコンソール警告を無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=currentwarn alert=false
```

電流プローブがエラーイベントを検出した場合にメッセージの送信を有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=currentfail broadcast=true
```

ファンプローブ処置の例

ファンプローブがエラー値を検出した場合に警告を発生させるには、次のように入力します。


```
omconfig system alertaction event=fanfail alert=true
```

シャーシイントルージョン処置の例

シャーシイントルージョンの警告処置の全てをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertaction event=intrusion clearall=true
```


ログをクリアするコマンド

 **メモ:** 警告メッセージの詳細については、「Dell OpenManage™ Server Administrator メッセージリファレンスガイド」を参照してください。

omconfig system コマンドを使って、3 種類のログをクリアできます。表示できるログには、警告ログ、コマンドログ、ハードウェアまたは ESM ログがあります。

警告ログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system alertlog action=clear
```

 **メモ:** 無効な RAC ユーザー名を入力すると、コマンドログが表示できないことがあります。コマンドログをクリアするとこの状態が解決します。

コマンドログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system cmdlog action=clear
```

ESM ログをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig system esmlog action=clear
```

omconfig system pedestinations

omconfig system pedestinations コマンドを使用して、警告宛先の IP アドレスを設定します。

表 4-22 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。


 **メモ:** インデックスと IP アドレスをパラメータとして一緒に指定するか、コミュニティ文字列だけをパラメータに設定することができます。

表 4-22. omconfig system pedestinations

「名前=値」のペア	説明
destenable=true false	true: 有効な IP アドレスが設定された後で、個別のプラットフォームイベントフィルタ宛先を有効にします。 false: 個別のプラットフォームイベントフィルタを無効にします。
index=number	宛先のインデックスを設定します。
ipaddress=ip address	宛先の IP アドレスを設定します。
communitystr=text	パスワードとして機能し、BMC と送信先管理ステーションの間で送信される SNMP メッセージを認証するのに使用されるテキストを設定します。

omconfig system platformevents

omconfig system platformevents コマンドを使用して特定のプラットフォームイベントにシャットダウン措置を設定します。また、プラットフォームイベントフィルタ警告生成を有効または無効にすることもできます。


 **注意:** プラットフォームイベントシャットダウン処置を「none」以外に設定していた場合、指定のイベントが発生するとシステムは強制終了されます。このシャットダウンはファームウェアによって開始され、最初にオペレーティングシステムや実行中のアプリケーションをシャットダウンせずに実行されます。

表 4-23 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。


 **メモ:** 警告設定は相互に排他的で、1 度に 1 つしか設定できません。処置設定も相互に排他的で、1 度に 1 つしか設定できません。ただし、警告設定と処置設定は互いに排他的ではありません。

表 4-23. シャットダウン処置

シャットダウン処置	説明
alert=disable	SNMP 警告を無効にします。
alert=enable	SNMP 警告の送信を有効にします。
action=none	システムがハング、またはクラッシュしたときに処置を行いません。
action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。
action=reboot	オペレーティングシステムを強制終了し、システム起動を開始して、BIOS チェックを実行してからオペレーティングシステムを読み込み直します。

表 4-24 は、プラットフォームイベントを設定できるコンポーネントとイベントの一覧を表示します。コンポーネントはアルファベット順に表示しますが、警告イベントは常にコンポーネントのエラーイベントより先に表示します。


表 4-24. omconfig system platformevents

イベント名	説明
alertsenable=true false	true: プラットフォームイベントフィルタ警告の生成を有効にします。 false: プラットフォームイベントフィルタ警告の生成を無効にします。 メモ: この設定は個別のプラットフォームイベントフィルタ警告設定とは無関係です。プラットフォームイベントフィルタで警告を生成するには、個別の警告とグローバル

	イベント警告の両方を有効にする必要があります。
event=batterywarn	バッテリーがエラーの状態を保留していることをバッテリーデバイスが検出した場合の処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=batteryfail	バッテリーデバイスでバッテリーが失敗したことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=discretevolt	別々の電圧プローブで電圧が低すぎて適切な操作が行えないことが検出された場合、処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=fanfail	ファンプローブでファンの稼働が遅すぎる、または動いていないことが検出された場合、処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=hardwarelogfail	ハードウェアログでエラー値が検出された場合、警告生成を有効または無効にします。
event=intrusion	シャーシが開かれた場合に処置を設定したり、警告生成を有効または無効にします。
event=powerwarn	電源デバイスプローブで電源、電圧規制モジュール、DC ツー DC 変圧器がエラー条件を保留している場合に処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=powerabsent	プロセッサプローブで電源装置が不在であることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=powerfail	電源デバイスプローブで電源、電圧規制モジュール、DC ツー DC 変圧器が失敗した場合に処置を設定したり警告生成を有効または無効にします。
event=processorwarn	プロセッサプローブによってプロセッサがピークパフォーマンスまたは速度を下回っていることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=processorfail	プロセッサプローブでプロセッサが失敗したことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=processorabsent	プロセッサプローブでプロセッサが不在であることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=redundegrad	システムのファンまたは電源が動作不能になり、その結果そのコンポーネントの冗長性が不完全になった場合に処置を設定するか、警告生成を有効または無効にします。
event=redunlost	システムのファンまたは電源が動作不能になり、その結果そのコンポーネントの冗長性が失われたか「動作している冗長コンポーネントがない」状態になったときに処置を設定するか、警告生成を有効または無効にします。
event=tempwarn	温度プローブで温度が最大温度または最低温度に近づいていることが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=tempfail	温度プローブで温度が高すぎ、または低すぎて適切な操作ができないことが検出された場合に処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=voltfail	電圧プローブで電圧が低すぎて適切な操作が行えないことが検出された場合、処置を設定するか警告生成を有効または無効にします。
event=watchdogasr	システムがハングした、または応答していない場合、ASR によって設定された警告生成を有効または無効にします。

omconfig system events

omconfig system events コマンドを使用して、システムのコンポーネントの SNMP トラップを有効および無効にします。

 **メモ:** すべてのイベントの種類がシステム上にあるとは限りません。

omconfig system events コマンドの「名前=値」ペアには 4 つのパラメータがあります。

- 1 source
- 1 type
- 1 severity
- 1 index

ソース

現在のところ、SNMP が唯一のサポートされた、システムコンポーネントイベント通知ソースなので、source=snmptraps が必要な「名前=値」のペアです。

```
omconfig system events source=snmptraps
```

種類

イベントの種類は、イベントに関与するコンポーネントの名前を示しています。表 4-25 は、システムイベントの種類の有効なパラメータを表示します。

表 4-25. システムイベントタイプパラメータ

「名前=値」のペア	説明
type=accords	AC 電源コードのイベントを設定します。
type=battery	バッテリーのイベントを設定します。
type=all	すべてのデバイスの種類のイベントを設定します。
type=currents	アンペア数のイベントを設定します。
type=fanenclosures	ファンエンクロージャのイベントを設定します。
type=fans	ファンのイベントを設定します。
type=intrusion	シャーシイントルージョンのイベントを設定します。
type=log	ログのイベントを設定します。

type=memory	メモリのイベントを設定します。
type=powersupplies	電源装置のイベントを設定します。
type=redundancy	冗長性のイベントを設定します。
type=temps	温度のイベントを設定します。
type=volts	電圧のイベントを設定します。

重大度

イベント設定のコンテキストでは、重大度は Server Administrator がコンポーネントの種類のイベントを通知する前にイベントがどれくらい重大であるかを決定します。同じシステムシャーシに同じ種類の複数のコンポーネントがある場合、index=<n> パラメータを使用して、コンポーネントの番号に従ってイベントの重大度を通知するかどうか指定することもできます。表 4-26 は、有効な重大度のパラメータを表示します。

表 4-26. システム設定重大度パラメータ

コマンド	結果	説明
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=info	情報イベント、警告イベントおよび重要イベントの通知を有効にします。	最も制限の少ないイベント通知。
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=warning	警告イベントと重要イベントの通知を有効にします。	コンポーネントが通常の状態に戻ったときなどに、情報イベント通知を省略します。
omconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=critical	重要イベントのみの通知を有効にします。	制限的なイベント通知。
mconfig system events type=<コンポーネント 名> severity=none	イベント通知を無効にします。	イベント通知はありません。

Index

インデックスは、特定のコンポーネントのイベント番号を指します。インデックス パラメータはオプションです。インデックスパラメータを省略すると、イベントは、すべてのファンなど指定された種類のすべてのコンポーネント用に設定されます。たとえば、システムに 2 つ以上のファンが含まれる場合、特定のファンのイベント通知を有効にしたり無効にできます。コマンド例を次に示します。

```
omconfig system events type=fan index=0 severity=critical
```

このコマンド例の結果、Server Administrator はシステムシャーシの最初のファン（インデックス 0）が重大ファン RPM に達した場合にのみ SNMP トラップを送信します。

omconfig system webserver

omconfig system webserver コマンドを使用して、ウェブサーバを開始したり、または停止します。表 4-27 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-27. Web Server 設定パラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=start	Web Server をスタートします。
action=stop	Web Server を停止します。
action=restart	Web Server を再起動します。

omconfig システム回復

omconfig system recovery コマンドを使って、オペレーティングシステムがハング状態またはクラッシュした場合に実行する操作を設定します。システムのオペレーティングシステムがハング状態であると判断される前に、何秒間経過する必要があるかを設定することもできます。表 4-28 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。


 **メモ:** タイマーの上限と下限はシステムのモデルと構成によって異なります。

表 4-28. 回復パラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=none	オペレーティングシステムがハングまたはクラッシュした場合に、何もしません。
action=reboot	オペレーティングシステムをシャットダウン後、システムを起動し、BIOS チェックを実行してオペレーティングシステムを再ロードします。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。

action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。パワーサイクルはハードドライブのようなシステム部品を再初期化する場合に役立ちます。
timer=<n>	システムでオペレーティングシステムがハングの状態にあると判断される前に経過する必要がある秒数（20 秒から 480 秒）

回復コマンド例

オペレーティングシステムのハング状態を検出してからパワーサイクルに移行させるには、次のように入力します。

```
omconfig system recovery action=powercycle
```

ハング状態が 120 秒継続してから回復操作を開始するよう設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system recovery timer=120
```

omconfig system shutdown

omconfig system shutdown コマンドを使って、システムのシャットダウン方法を決定します。デフォルト設定では、システムのシャットダウン時、電源をオフにする前にオペレーティングシステムをシャットダウンします。オペレーティングシステムをシャットダウンするとまず、システムの電源をオフにする前にファイルシステムを終了します。オペレーティングシステムを最初にシャットダウンしたくない場合は、パラメータ **osfirst=false** を使うことができます。[表 4-29](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-29. シャットダウンパラメータ

「名前=値」のペア	説明
action=reboot	オペレーティングシステムをシャットダウン後、システムを起動し、BIOS チェックを実行してオペレーティングシステムを再ロードします。
action=poweroff	システムの電源をオフにします。
action=powercycle	システムの電源をオフにしてから、一時停止し、再度電源をオンにして、システムを再起動します。パワーサイクルはハードドライブのようなシステム部品を再初期化する場合に役立ちます。
osfirst=true false	true: システムをシャットダウンする前にファイルシステムを終了して、オペレーティングシステムを終了します。 false: システムをシャットダウンする前に、オペレーティングシステムをシャットダウンしたりファイルシステムを閉じません。

シャットダウンコマンド例

シャットダウン後再起動するように設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system shutdown action=reboot
```

システムの電源をオフにする前に、オペレーティングシステムのシャットダウンを省略するには、次のように入力します。

```
omconfig system shutdown action=reboot osfirst=false
```

omconfig system thrmshutdown

omconfig system thrmshutdown コマンドを使って、サーマルシャットダウン操作を設定します。温度プローブが温度プローブ警告またはエラーイベントを検出する場合に、温度シャットダウンが発生するように設定することができます。

[表 4-30](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 4-30. サーマルシャットダウンパラメータ

「名前=値」のペア	説明
severity=disabled warning failure	disabled: サーマル シャットダウンを無効にする。システム管理者による操作が必要です。 warning: 温度警告イベントが検出されると、シャットダウンを実行します。警告イベントは、シャーシ内の温度（摂氏）が最大温度警告しきい値を越した場合に発生します。 failure: 温度エラーイベントが検出されると、シャットダウンを実行します。 エラーイベントは、シャーシ内の温度（摂氏）が最大温度エラーしきい値を越した場合に発生します。

サーマルシャットダウンコマンドの例

温度プローブがエラーイベントを検出した場合に温度シャットダウンをトリガするには、次のように入力します。

```
omconfig system thrmshutdown severity=failure
```

システム管理者が **omconfig system shutdown** を手動で開始するように、サーマルシャットダウンを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig system thrmshutdown severity=disabled
```

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

omconfig rac: Remote Access Controller の管理

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

- [パラメータ表の規則](#)
- [omconfig rac コマンドの概要](#)
- [omconfig rac コマンドのヘルプ](#)
- [omconfig rac authentication](#)
- [omconfig rac dialinusers](#)
- [omconfig rac dialoutusers](#)
- [omconfig rac generatecert](#)
- [omconfig rac modem](#)
- [omconfig rac network](#)
- [omconfig rac snmptraps](#)
- [omconfig rac remote](#)
- [omconfig rac rmdialinuser](#)
- [omconfig rac rmdialoutuser](#)
- [omconfig rac rmsnmptrap](#)
- [omconfig rac rmuser](#)
- [omconfig rac reset](#)
- [omconfig rac uploadcert](#)
- [omconfig rac users](#)

omconfig rac コマンドを使って、リモートアクセスサービス(RAS)で操作可能なコンポーネントを設定できます。CLI コマンド **omconfig rac** は Remote Access Controller(RAC)ソフトウェアインタフェースを使ってこれらの動作可能なコンポーネントを設定します。

📌 **メモ:** マニュアルに記載される機能はそのシステムによって RAC で使用できない場合もあります。たとえば、ダイヤルアップモデムの使用がサポートされているのは DRAC III のみです。

📌 **メモ:** コマンドは、DRAC III、DRAC III/XT、ERA、ERA/O を持つシステムでのみ使用できます (DRAC 4 および DRAC 5 を持つシステムでは使用できません)。

Server Administrator を使って他のシステムとメインシステムシャreshンコンポーネントを設定する方法については、「[omconfig Instrumentation Service \(計装サービス\)を使ったコンポーネントの管理](#)」を参照してください。omconfig システムコマンドを使った所有権情報のコスト(assetinfo)の表示と管理方法の詳細に関しては、「[omconfig system assetinfo: 所有コスト値の編集](#)」を参照してください。

omreport rac コマンドを使って omconfig rac コマンドの実行に必要な情報を取得しなくてはならない場合が頻繁に発生します。omreport rac コマンドについては、「[omconfig rac: Remote Access Controllerの管理](#)」を参照してください。

パラメータ表の規則

パラメータ表では、入力パラメータをコマンドラインインタフェースで一覧される順番ではなく、設定の優先順に表示します。

記号「|」は「パイプ」と呼ばれることがあり、「排他的論理和」または「演算子」を表します。たとえば、「有効 | 無効」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

omconfig rac コマンドの概要

📌 **メモ:** 各 omconfig rac コマンドの実行後に、Remote Access Controller をリセットする必要があります。また、Remote Access Controller をリセットしたら、後続の omconfig rac コマンドを実行する前に、約 1 分待機する必要があります。

📌 **メモ:** この項では可能な omconfig rac コマンドすべてをリストにしますが、お使いのシステムで使用できるコマンドはシステムの設定によって異なります。ヘルプを表示したり、またはシステムにインストールされていないコンポーネントのコマンドを実行する場合、Server Administrator はコンポーネントまたは機能がこのシステムで見つからない旨のメッセージを発行します。

表 7-1 は omconfig rac コマンドの高レベルな概要です。「コマンドレベル 3」とタイトルが付いた欄は omconfig rac で使用できる主な引数を一覧表示します。「必要なユーザー権限」はコマンドを実行するのに必要な権限の種類を参照します。その種類には、U=ユーザー、P=パワーユーザー、および A=システム管理者があります。「用途」は omconfig rac を使って実行される操作についての概略です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

表 7-1. omconfig rac のコマンドレベル 1、コマンドレベル 2、およびコマンドレベル 3 のオプション

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	必要なユーザー権限	用途
omconfig				
	rac			
		authentication	A	認証プロパティを設定します。
		dialinusers	A	ダイヤルインユーザープロパティを設定します。
		dialoutusers	A	ダイヤルアウトユーザープロパティを設定します。
		generatecert	A	証明書の署名要求(CSR)を生成します。
		modem	A	モデムのプロパティを設定します。
		network	A	ネットワークプロパティを設定します。
		snmptraps	A	Set SNMPトラップ プロパティを設定します。
		remote	A	リモート機能のプロパティを設定します。

		rm dialinuser	A	ダイヤルインユーザーの削除。
		rm dialoutuser	A	ダイヤルアウトユーザーの削除。
		rmsnmptrap	A	SNMPトラップの削除。
		rmuser	A	ユーザーの削除。
		reset	A	RAC をリセットします。
		uploadcert	A	サーバまたは CA 証明書をアップロードします。
		users	A	ユーザープロパティを設定します。

omconfig rac コマンドのヘルプ

omconfig rac -? コマンドを使って、**omconfig rac** に使用できるコマンドの一覧を取得します。

omconfig rac <コマンドレベル 3> -? を使って、**dialinusers**、**dialoutusers**、**modem**、**network**、**remote** などを使う「名前=値」のペアの一覧を表示します。

次のように入力します。

```
omconfig rac dialinusers -?
```

以下は Server Administrator の返答の引用です。

```
dialinusers Set dial-in user properties.

Valid parameters are:

(有効パラメータは次のとおりです。)

username=<テキスト: 必須>

index=<数値: 0~15>

password=<テキスト>

callbacknumber=<番号>

callbacktype=<テキスト>
```

omconfig rac authentication

omconfig rac authentication コマンドを使用して、リモートアクセスインタフェースを使用しようとしているシステムのローカルオペレーティングシステム認証を有効にするかどうか指定します。ローカルオペレーティングシステム認証を有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig rac authentication localauthenable=true
```

ローカルオペレーティングシステム認証を無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig rac authentication localauthenable=false
```

ローカルオペレーティングシステム認証

omconfig rac authentication コマンドを使って、ユーザーのローカルオペレーティングシステム認証を、Remote Access Controller 用に有効にするか無効にするか指定することができます。

RAC には、ユーザーアクセスを認証する方法が 2 つあります。RAC 認証とローカルオペレーティングシステム認証です。RAC 認証は常に **有効** になっています。システム管理者は、RAC へのアクセスを許可する特定のユーザーアカウントとパスワードを設定することができます。

オペレーティングシステムでは、システム管理者が異なるレベルのユーザーとユーザーアカウントを定義する必要があります。各ユーザーレベルによって与えられる特権が異なります。RAC におけるローカルオペレーティングシステム認証は、オペレーティングシステムのユーザーに 1 組の特権を定義し、RAC に別のユーザーとアカウントを設定することを希望しないシステム管理者が使用できるオプションです。RAC のローカルオペレーティングシステム認証を有効にすると、RAC にログインするオペレーティングシステム上でシステム管理者状態を持つすべてのユーザーを有効にすることになります。

omconfig rac authentication のコマンド例

以下のように入力します。

```
omconfig rac authentication localauthenable=true
```


これで、オペレーティングシステムでシステム管理者特権を持つすべてのユーザーのアクセスを許可するように RAC を設定しました。

以下のように入力します。

```
omconfig rac authentication localauthenable=false
```

RAC システム管理者によって定義されたユーザー名とパスワードを持つユーザーにのみアクセスを許可するように RAC を設定しました。

omconfig rac dialinusers

 **メモ:** マニュアルに記載される機能はそのシステムによって RAC で使用できない場合もあります。たとえば、ダイヤルアップモデムの使用がサポートされているのは DRAC III のみです。

omconfig rac dialinusers コマンドを使ってダイヤルイン特権を持つ各ユーザーの要件を指定します。システム管理者は各ユーザーのユーザー名、パスワード、および他のプロパティの値を指定することができます。[表 7-2](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-2. omconfig rac dialinusers

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	PPP(ポイントツーポイント)ユーザーのユーザー名を設定します。
index=<数値:0~15>	ダイヤルインユーザーインデックスを設定して、ユーザー名やパスワードなどを自動入力します。インデックスは RAC にある 16 個のユーザーの「ポジション」から 1 つを指定します。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定されていない場合、RAC で次に使用できるポジションにエントリが追加されます。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定され、別のエントリがそのポジションに対して既に存在する場合、キーフィールドパラメータを使ってコマンドを実行するかどうか決定します。ユーザーが提供するキーフィールドが RAC のその特定の位置でエントリのキーフィールドに一致する場合、RAC エントリは編集されます。そうでない場合、コマンドは失敗します。
password=<テキスト>	この PPP ユーザーのパスワードを設定します。
callbacknumber=<数値>	コールバック番号を設定します。
callbacktype=なし プリセット ユーザー指定	コールバックの種類を設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。次のように入力します。

```
omconfig rac dialinusers username=jdoe
```

次の例では、**omconfig rac dialinusers** コマンドで使える全てのコマンドパラメータの値を提供します。次のように入力します。

```
omconfig rac dialinusers username=jdoe index=0 password=steven70 callbacknumber=4441022 callbacktype=preset
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac dialoutusers

omconfig rac dialoutusers コマンドを使ってダイヤルイン特権を持つ各ユーザーの要件を指定します。システム管理者は各ダイヤルアウトユーザーの姓、パスワード、IP アドレス、および他のプロパティの値を指定することができます。[表 7-3](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-3. omconfig rac dialoutusers

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	IP アドレスを設定します。アドレスはドットで区切られた 10 進表記法で指定する必要があります。
index=<数値:0~15>	ダイヤルアウトユーザーインデックスを設定して、ユーザー名やパスワードなどを自動入力します。インデックスは RAC にある 16 個のユーザーの「ポジション」から 1 つを指定します。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定されていない場合、RAC で次に使用できるポジションにエントリが追加されます。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定され、別のエントリがそのポジションに対して既に存在する場合、キーフィールドパラメータを使ってコマンドを実行するかどうか決定します。ユーザーが提供するキーフィールドが RAC のその特定の位置でエントリのキーフィールドに一致する場合、RAC エントリは編集されます。そうでない場合、コマンドは失敗します。
username=<テキスト>	PPP(ポイントツーポイント)ダイヤルアウトユーザー名を設定します。
password=<テキスト>	この PPP ユーザーのパスワードを設定します。

>	
phonenumber=<数値>	この PPP ユーザーの連絡先番号を設定します。
authtype=any encrypted	このユーザーに必要な認証タイプを設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。次のように入力します。

```
omconfig rac dialoutusers ipaddr=14.16.53.18
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

次の例では、**omconfig rac dialoutusers** コマンドで使える全てのコマンドパラメータの値を提供します。次のように入力します。

```
omconfig rac dialoutusers ipaddr=14.16.53.18 index=1 username=sustein password=74 chaunu phonenumber=4021027 authtype=any
```

次のメッセージが表示されます。


```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)


omconfig rac generatecert

omconfig rac generatecert コマンドを使用して、認証局 (CA) に送る証明書署名要求 (CSR) を生成します。認証局とは、IT 業界で認められている事業者で、信頼性に優れたスクリーニング、身分証明、およびその他の重要なセキュリティ条件の高水準を満たしています。CA の例には、Thawte および VeriSign があります。CA は CSR を受理すると、CSR に含まれる情報を調べ、検証します。応募者が CA のセキュリティ標準を満たしていると、CA はネットワークおよびインターネット上で処理を行う応募者を一意に識別する証明書を発行します。

RAC では **omconfig rac generatecert** コマンドを使用して CSR を生成することができます。それから CSR を CA に申し込みます。CA が CSR を認可すると、証明書が送られてきます。**omconfig rac uploadcert** コマンドを使用して証明書を RAC にアップロードします。新しい証明書をアップロードすると、RAC に付いてきたデフォルトの RAC 証明書は上書きされます。

 **メモ:** スペースが含まれる完全修飾パス名またはファイル名がある場合は、文字列を二重引用符で括弧する必要があります。たとえば、アップデート パッケージが `c:\security\files\certificates\sslcert.cer` にある場合、「security」と「files」の間にスペースがあるため、完全修飾パスを二重引用符で括弧する必要があります。次の例は、完全修飾パスとファイル名を引用符で囲んだコマンド例です。

```
omconfig rac generatecert file="c:\security\files\certificates\sslcert.cer"
```

 **メモ:** 2 文字の国番号を除き、その他のすべてのパラメータ値は文字列です。パラメータは (必須) と指定されている場合のみ必要です。

 **メモ:** このコマンドは FTP プロトコルを使用して RAC ファームウェアと通信します。コマンドは、ファイアウォールソフトウェアがインストールされている場合、失敗することがあります。

表 7-4 は、CSR の生成に使う必須とオプションのパラメータを表示しています。

表 7-4. omconfig rac generatecert

「名前=値」のペア	説明
commonname=<テキスト>	証明書を要求する、システムを他のシステムと区別する固有のテキスト文字列を入力します (必須)。
countrycode=<テキスト>	システムが所在する国を表す 2 文字の国番号。ISO 標準 3166 を参照してください (必須)。
emailaddress=<テキスト>	システムの電子メールアドレス。
file=<テキスト>	生成する CSR の絶対パス名、またはファイル名 (括弧付き) (必須)。ファイル名のみを提供した場合は、CSR ファイルは現在作業中のディレクトリに置かれます。
locality=<テキスト>	システムが所在する市の名前またはその他の場所名。
orgname=<テキスト>	所属組織名 (必須)。
orgunit=<テキスト>	証明書を申し込んでいる組織内の部署または支部の名前 (必須)。
state=<テキスト>	州または都道府県の名前。

CSR を生成したら、**omconfig rac uploadcert** コマンドを使用して証明書を RAC にアップロードできます。

omconfig rac modem

omconfig rac modem コマンドを使用して、RAC のモデムがあればそのプロパティを設定します。表 7-5 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-5. omconfig rac modem

「名前=値」のペア	説明
baudrate=<数値>	モデム速度はビット/秒です。デフォルトのボーレートは 38400 です。
initstring=<テキスト>	RAC に必要な初期化文字列です。
dialtype=tone pulse	ダイヤルの種類がトーンかパルスが指定します。
countrycode=<2 文字の国番号>	システムが所在する国を表す国番号を指定します。

国番号パラメータと `omconfig rac modem` コマンドを使用して、システムが所在する国をコードで指定する場合の例は次のとおりです。

```
omconfig rac modem countrycode=US
```

表 7-6 は、このパラメータの設定に使用する国番号を示しています。

表 7-6. omconfig rac modem の国番号パラメータ用の国番号

国	国番号	国	国番号
オーストラリア	AU	日本	JA
オーストリア	AS	韓国	KO
ベルギー	BE	ルクセンブルグ	LU
ブルガリア	BU	メキシコ	ME
カナダ	CA	オランダ	NE
中国	CH	ニュージーランド	NW
チェコおよびスロバキア共和国	CZ	ノルウェー	NO
デンマーク	DE	フィリピン	PH
フィンランド	FI	ポーランド	PO
フランス	FR	ポルトガル	PR
ドイツ	GE	ロシア	RU
ギリシャ	GR	シンガポール	SI
香港	HO	スペイン	SP
ハンガリー	HU	スウェーデン	SW
インド	IN	スイス	SZ
アイルランド	IR	台湾	TA
イスラエル	IS	英国	UK
イタリア	IT	米国	US

omconfig rac network

`omconfig rac network` コマンドを使って、ネットワークパラメータの値を指定します。表 7-7 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-7. omconfig rac network

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	IP アドレスを設定します。アドレスはドットで区切られた 10 進表記法で指定する必要があります。
subnetmask=<テキスト>	サブネットマスクを設定します。マスクはドットで区切られた 10 進表記法で指定される必要があります。
gateway=<テキスト>	ゲートウェイを設定します。ゲートウェイはドットで区切られた 10 進表記法で指定される必要があります。
nicenable=true false	true : NIC を有効にします。 false : NIC を無効にします。
dhcpenable=true false	true : DHCP を有効にします。 false : DHCP を無効にします。
smtpaddr=<テキスト>	SMTP アドレスを設定します。アドレスはドットで区切られた 10 進表記法で指定する必要があります。
smtpenable=true false	true : SMTP を有効にします。 false : SMTP を無効にします。
dialinenable=true false	true : ダイヤルイン通信を有効にします。

	false :ダイヤルイン通信を無効にします。
dialindhcpenable=true false	true :ダイヤルインの DHCP(dynamic host configuration protocol)を有効にします。 false :ダイヤルインの動的ホスト構成プロトコール(DHCP)を無効にします。
dialinaddr=<テキスト>	ベース IP アドレスを設定します。アドレスはドット形式 10 進表記法で指定される必要があります。
dialinauthype=any encrypted	必要な認証タイプを設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。次のように入力します。

```
omconfig rac network ipaddr=123.169.555.216
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac snmptraps

omconfig rac snmptraps コマンドを使って、SNMP トラッププロパティ値を指定します。[表 7-8](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-8. omconfig rac snmptraps

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	IP アドレスを設定します。アドレスはドットで区切られた 10 進表記法で指定する必要があります。
index=<数値:0~15>	SNMP トラップ インデックスを設定します。インデックスは RAC で 16 のトラップの "位置" を指定します。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定されていない場合、RAC で次に使用できるポジションにエントリが追加されます。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定され、別のエントリがそのポジションに対して既に存在する場合、キーフィールドパラメータを使ってコマンドを実行するかどうか決定します。ユーザーが提供するキー フィールドが RAC のその特定の位置でエントリのキー フィールドに一致する場合、RAC エントリは編集されます。そうでない場合、コマンドは失敗します。
trapsenable=true false	true : SNMP トラップを有効にします。 false : SNMP トラップを無効にします。
community=<テキスト>	コミュニティを設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac snmptraps ipaddr=123.166.555.216 index=1 trapsenable true community=dell
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

次の例では、**omconfig rac snmptraps** コマンドで使える全てのコマンドパラメータの値を提供します。次のように入力します。

```
omconfig rac snmptraps ipaddr=123.166.555.216 index=0 trapsenable=true community=dell
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac remote

omconfig rac remote コマンドを使って、リモート機能プロパティ値を指定します。[表 7-9](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-9. omconfig rac remote

「名前=値」のペア	説明
floppyftpenable=true false	true :リモートブートを有効にします。 false :リモートブートを無効にします。
floppyftpipaddr=<テキスト>	フロッピー TFTP アドレスを設定します。
floppyftppath=<テキスト>	フロッピー TFTP パスを設定します。
fwupdateftpipaddr=<テキスト>	ファームウェア TFTP アドレスを設定します。
fwupdateftppath=<テキスト>	ファームウェア アップデートのイメージが存在するサーバ上の TFTP のディレクトリパスを設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac remote floppyftpenable=true
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac rmdialinuser

omconfig rac rmdialinuser コマンドを使って、ダイヤルインユーザーを削除します。表 7-10 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-10. omconfig rac rmdialinuser

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	削除するエントリのユーザー名を指定します。ユーザー名が指定されていない場合、インデックスが指定されている必要があります。
index=<数値>	削除するエントリのインデックスを指定します。インデックスが指定されていない場合、ユーザー名が指定されている必要があります。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac rmdialinuser username=jdoe
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac rmdialoutuser

omconfig rac rmdialoutuser コマンドを使ってダイヤルアウトユーザープロパティを削除します。表 7-11 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-11. omconfig rac rmdialoutuser

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	削除するエントリのユーザー名を指定します。ユーザー名が指定されていない場合、インデックスが指定されている必要があります。
index=<数値>	削除するエントリのインデックスを指定します。インデックスが指定されていない場合、ユーザー名が指定されている必要があります。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac rmdialoutuser username=jdoe
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac rmsnmptrap

omconfig rac rmsnmptrap コマンドを使って、SNMP トラッププロパティを削除します。[表 7-12](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-12. omconfig rac rmsnmptrap

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	削除するエントリの IP アドレスを指定します。この値は ドットで区切られた 10 進表記法で指定する必要があります。IP アドレスが指定されていない場合、インデックスが指定されている必要があります。
index=<数値>	削除するエントリのインデックスを指定します。インデックスが指定されていない場合、IP アドレスを指定する必要があります。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac rmsnmptrap ipaddr=123.199.152.216
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac rmuser

omconfig rac rmuser コマンドを使って、ユーザーを削除します。[表 7-13](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-13. omconfig rac rmuser

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	削除するエントリのユーザー名を指定します。ユーザー名が指定されていない場合、インデックスが指定されている必要があります。
index=<数値>	削除するエントリのインデックスを指定します。インデックスが指定されていない場合、ユーザー名が指定されている必要があります。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。

次のように入力します。

```
omconfig rac rmuser username=jdoe
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

omconfig rac reset

omconfig rac reset コマンドを使って、RAC をリセットします。

omconfig rac uploadcert

omconfig rac uploadcert コマンドを使って、サーバーまたは CA 証明書を RAC にアップロードします。証明書の完全修飾パス名を入力し、アップロードする証明書の種類を選択する必要があります。アップロードできる 2 種類の証明書は、サーバー証明書か、認証局 (CA) から取得できる証明書です。認証局の例には、Thawte Server CA または VeriSign, Inc. などがあります。

 **メモ:** このコマンドは FTP プロトコルを使用して RAC ファームウェアと通信します。コマンドは、ファイアウォールソフトウェアがインストールされている場合、失敗することがあります。

表 7-14 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-14. omconfig rac uploadcert

「名前=値」のペア	説明
file=<テキスト>	RAC にアップロードする証明書の絶対パス名 (ファイル名と拡張子を含む) (必須)。
type=server ca	アップロードしている証明書がサーバー証明書あるいは CA 証明書かを示します。

omconfig rac users

omconfig rac users コマンドを使って、ユーザープロパティの値を指定します。表 7-15 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 7-15. omconfig rac users

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	ユーザー名を設定します。
index=<数値:0~15>	エントリのインデックスを指定します。インデックスは RAC にある 16 個のユーザーの「ポジション」から 1 つを指定します。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定されていない場合、RAC で次に使用できるポジションにエントリが追加されます。 インデックスが omconfig rac コマンドで指定され、別のエントリがそのポジションに対して既に存在する場合、キーフィールドパラメータを使ってコマンドを実行するかどうか決定します。ユーザーが提供するキーフィールドが RAC のその特定の位置でエントリのキーフィールドに一致する場合、RAC エントリは編集されます。そうでない場合、コマンドは失敗します。
userpassword=<テキスト>	パスワードを設定します。
numericpagenable=true false	true: 数値ページングを有効にします。 false: 数値ページングを無効にします。
numericpagenumber=<数値>	数値ページング番号を設定します。
numericpagemsg=<テキスト>	数値ページングメッセージを設定します。
emailpagenable=true false	true: 電子メールページングを有効にします。 false: 電子メールページングを無効にします。
emailaddress=<テキスト>	電子メールアドレスを設定します。
emailmsg=<テキスト>	電子メールメッセージを設定します。
alphapagenable=true false	true: アルファページングを有効にします。 false: 英字ページングを無効にします。
alphanumeric=<数値>	英数字を設定します。
alphaprotocol=8N1 7E0	プロトコルを設定します。
alphabaudrate=<数値>	アルファボーレートを設定します。
alphapagerid=<数値>	アルファページャー ID を設定します。
apphacustommsg=<テキスト>	アルファ カスタム メッセージを設定します。
alphapagerpassword=<テキスト>	アルファページャーパスワードを設定します。

コマンドの例

次の例では、「名前=値」のペアを 1 つ設定します。次のように入力します。

```
omconfig rac users username=jdoe
```

次のメッセージが表示されます。

```
Command Successful. Please reset RAC card!
```

(コマンドは成功しました。RAC カードをリセットしてください。)

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

用語集

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザズガイド

以下に、Dell™ のユーザーマニュアルで使用されている専門用語、略語、および頭字語の説明を一覧表示しています。

A

アンペア (ampere) の略語。

AC 電源スイッチ

主要 AC 入力に障害が起きたときに、スタンバイの AC 入力に切り替えることによって AC 電源冗長を提供する 2 つの AC 電源入力を持つスイッチ。

AC

交流電流 (Alternating Current) の略語。

ADB

割り当てデータベース (assign database) の略語。

AGP

アクセラレイテッドグラフィックポートの略語。Intel® Pentium® Pro システムで使用できる高パフォーマンスのグラフィックインタフェース。

ASCII

情報交換用米国標準コード (American Standard Code for Information Interchange) の頭字語。ASCII 文字セットの文字だけを含むテキストファイル (通常、Microsoft® Windows® のメモ帳などのテキストエディタで作成) は、ASCII ファイルと呼ばれます。

ASIC

特定用途向け集積回路 (Application-Specific Integrated Circuit) の頭字語。

ASPI

高機能 SCSI プログラムインタフェース (Advanced SCSI programming interface) の頭字語。

ASR

自動システム回復 (Automatic System Recovery) の略。ASR は、1 つまたは複数のドメインがソフトウェアやハードウェアのエラー、または受け入れられない環境のためにシステムが非アクティブになった場合に、システムが適切に設定されたドメインを実行するよう復元する手順から構成されています。

autoexec.bat ファイル

autoexec.bat ファイルは起動時に実行されます (config.sys ファイルのコマンド実行後)。この起動ファイルには、コンピュータに接続されている各デバイスの特徴を定義するコマンドが入っており、アクティブディレクトリ以外のディレクトリにあるプログラムを検索して実行します。

BGA

Ball Grid Array の略語で、PC ボードへの接続に、ピンではなく、ソルジャーボールのアレイを用いる IC パッケージ。

BIOS

基本入出力システム（Basic Input/Output System）の頭字語。コンピュータの BIOS は、フラッシュメモリチップに格納された複数のプログラムからなります。BIOSは次の事項を制御します。

- 1 プロセッサと周辺デバイス（キーボード、ビデオアダプタなど）との間の通信
- 1 各種の制御機能（システムメッセージなど）

BMC

ベースボード管理コントローラの略。このコントローラは IPMI 構造にインテリジェンスを提供します。

bpi

インチあたりのビット数（bits per inch）の略語。

bps

秒あたりのビット数（bits per second）の略語。

BTU

英国熱量単位（British thermal unit）の略語。

C

摂氏（Celsius）の略語。

CA

認証局（Certificate Authority）の略語。

CDRAM

Cached DRAM の略語。三菱が開発した小型 SRAM キャッシュを含む高速 DRAM メモリチップ。

CD-ROM

コンパクト ディスク読み取り専用メモリ（compact disc read-only memory）の略語。CDドライブは光学技術を使用して、CD からデータを読み取ります。CD は読み取り専用ストレージデバイスです。標準 CDドライブで新しいデータをCDに書き込むことはできません。

CI/O

総合的な入力/出力（Comprehensive Input/Output）の略語。

CIM

DMTFからの管理情報について説明したモデル、Common Information Model の略語。CIM は実装に依存しないため、異なる管理アプリケーションでさまざまなソースから必要なデータを収集できます。CIMにはシステム、ネットワーク、アプリケーションおよびデバイスのスキーマが含まれ、新しいスキーマが追加されます。SNMP エージェントからの MIB データおよびDMI 標準システムからの MIF データと CIM データとの交換におけるマッピングネットワーク技術を提供します。

CIMOM

Common Information Model Object Manager の略語。

cm

センチメートル。

CMOS

相補形金属酸化膜半導体（Complementary metal-oxide semiconductor）の略語。通常、コンピュータの CMOS メモリチップは NVRAM 記憶用に使用されます。

COM *n*

コンピュータにある 4 つのシリアルポートのデバイス名は COM1、COM2、COM3、および COM4 です。割り込みのデフォルトは COM1 と COM3 は IRQ4、COM2 と COM4 は IRQ3 です。したがって、シリアルデバイスを実行するソフトウェアを設定するときには、割り込みのコンフリクトが発生しないように注意する必要があります。

config.sys ファイル

コンピュータを起動すると、（`autoexec.bat` ファイルのコマンドが実行される前に）`config.sys` ファイルが実行されます。この起動ファイルには、インストールするデバイスや使用するドライバを指定するコマンドが含まれます。このファイルには、オペレーティングシステムのメモリ使用方法とファイル管理方法を決定するコマンドが含まれます。

COO

所有コスト（Cost Of Ownership）の略語。

cpi

インチあたり文字（characters per inch）の略語。

CPU

中央処理装置（Central processing unit）の略語。「マイクロプロセッサ」を参照してください。

CRC

Cyclic Redundancy Code の略語。格納または転送するデータが破壊されている場合、それを検出するためにそのデータから算出した数値。CRC を再計算して元々転送された値と比較することによって、転送エラーの種類が検出できます。

CSR

証明書署名要求（Certificate Signing Request）の略語。他のシステムへの接続を求めるシステムの身元を特定し認証する、ウェブサーバによって生成された複雑なテキストファイル。各 CSR に存在するデジタル署名は、システムのセキュリティを特定するのに役立ちます。

Server Administrator を実行しているシステムに Remote Access Controller がある場合、Remote Access Controller に付属している CSR は Dell に属します。独自の CSR を会社が生成する場合、認証局から固有の CSR を要求して、Dell CSR を上書きすることができます。

cursor

ブロック、アンダースコア、ポインタなど、次のキーボードまたはマウス動作が起きる場所を表すマーク。

DAT

デジタル オーディオ テープ（Digital Audio Tape）の略語。

dB

デシベル（decibel）の略語。

dBA

補正デシベル（adjusted decibel）の略語。

DC

直流電流（Direct Current）の略語。

DHCP

Dynamic Host Configuration Protocol の略語。IP アドレスを各システムに静的に割り当ててではなく、サーバによって発行するネットワークの設定方法。

DIMM

デュアル インライン メモリモジュール（Dual in-line memory module）の略語。DRAMチップを持つ小さな回路基板で、システム基板に接続します。

DIN

ドイツ工業規格（Deutsche Industrie Norm）の頭字語。ドイツの標準設定を行う組織。

DIN コネクタは、DIN によって定義された多くの標準に従うコネクタです。DIN コネクタは、パソコンで幅広く使用されています。たとえば、PC のキーボードコネクタは DIN コネクタです。

DIP

デュアル インライン パッケージ（dual in-line package）の略語。システム基板や拡張カードなどの回路基板には、回路基板を設定するための DIP スイッチが含まれている場合があります。DIP スイッチは常にオンとオフの切り替えスイッチです。

directory

ディレクトリは、関連ファイルを階層的な「反転ツリー」構造でディスク上にまとめます。各ディスクには「root」ディレクトリがあります。たとえば、C:\> のプロンプトは、ハードドライブ C のルートディレクトリであることを示しています。ルートディレクトリから分かれて追加されたディレクトリは、「サブディレクトリ」と呼ばれます。サブディレクトリには、そこから分かれる追加のディレクトリを含めることができます。

DMA

ダイレクトメモリアクセス（direct memory access）の略語。DMA チャンネルを使うと、RAM とデバイス間の特定の種類のデータ転送を行ってプロセッサをバイパスできます。

DMI

デスクトップ管理インタフェース（Desktop Management Interface）の略語。DMI はコンピュータシステムのソフトウェアおよびハードウェアの管理を有効にします。DMI は、オペレーティングシステム、メモリ、周辺機器、拡張カード、および管理タグなどのシステムコンポーネントに関する情報を収集します。システムコンポーネントに関する情報は、MIF 形式のファイルとして表示されます。

DMTF

Distributed Management Task Force の略で、デル社がメンバーとして加盟するハードウェアおよびソフトウェア プロバイダを代表する企業の国際的な資本連合。

dpi

ドットパー インチ（dots per inch）の略語。

DPMS

ディスプレイ電力管理信号（Display Power Management Signaling）の略語。モニタの電力管理状況をアクティブにするために、ビデオ コントローラが送信するハードウェア信号を定義する Video Electronics Standards Association（VESA®）によって作成された標準。モニタは、コンピュータのビデオコントローラから適切な信号を受信した後で電力管理状態に入るよう設計されている場合、DPMS 準拠と呼ばれます。

DRAC

リモート管理機能（Remote Management Capability）の略語。RACを参照してください。

DRAM

ダイナミック ランダム アクセス メモリ (Dynamic random-access memory) の略語。コンピュータのRAMは通常、DRAM チップによって構成されています。DRAM チップは電荷を長く保持できないため、コンピュータの DRAM チップは定期的によりフレッシュされます。

DTE

データ端末装置 (Data terminal equipment) の略語。コンピュータシステムのように、ケーブルまたは通信回線を使ってデジタル形式でデータを送信できるデバイス。DTE は、モデムのようなデータ通信機器 (DCE) デバイス を使って、ケーブルまたは通信回線に接続されます。

ECC

誤り検出訂正 (Error checking and correction) の略語。

ECP

拡張機能ポート (Extended Capabilities Port) の略語。

EDO

拡張データ出力ダイナミックランダムアクセスメモリ (Extended data output dynamic random access memory) の略語。コンベンショナル DRAM より高速な DRAM です。EDO RAM は前のブロックを CPU に送信すると同時に次のメモリのブロックを取り込むことができます。

EEPROM

電氣的消去可能なPROM (Electrically erasable programmable read-only memory) の略語。

EIDE

Enhanced Integrated Drive Electronics の略語。EIDE デバイスは、従来のIDE標準に、1 つ以上の次の拡張機能を提供します。

- 1 最大 16 MB/秒のデータ転送レート
- 1 CD など、ハードドライブ以外のドライブもサポート
- 1 528 MB 以上の容量を持つハードドライブをサポート
- 1 2 つのデバイスを接続したコントローラを最大 2 つまでサポート

EISA

32 ビット拡張バスデザインである拡張業界標準アーキテクチャ (Extended Industry-Standard Architecture) の略語。EISA コンピュータの拡張カードコネクタは、8 ビットまたは 16 ビットの ISA 拡張カードとも互換性があります。

EISA 拡張カードをインストールするときに設定コンフリクトを回避するには、EISA コンフィグレーション ユーティリティを使用する必要があります。このユーティリティは、どの拡張スロットにカードを入れるか指定し、対応する EISA 設定ファイルからカードの必要システム リソース情報を取得します。

EMC

電磁環境適合性 (Electromagnetic Compatibility) の略語。

EMI

電磁妨害 (Electromagnetic interference) の略語。

EMM

拡張メモリマネージャ (Expanded memory manager) の略語。Intel386™ 以上のマイクロプロセッサで拡張メモリをエミュレートする拡張メモリを使用するユーティリティ。

EMS

拡張メモリ仕様（Expanded Memory Specification）の略語。

EPP

双方向データ転送を向上させる拡張パラレルポート（Enhanced Parallel Port）の略語。ネットワークや SCSI アダプタなど、ノートブックコンピュータのパラレルポートに接続する多くのデバイスはこの EPP 標準を利用するように設計されています。

EPROM

消去可能PROM（erasable programmable read-only memory）の略語。

ERA/O

Embedded Remote Access option の略語。

ERA

Embedded Remote Access の略語。

ESD

静電気放電（Electrostatic discharge）の略語。

ESM

組込み式サーバ管理（Embedded Server Management）の略。

F

華氏。

FAT

ファイル割り当てテーブル（File allocation 表）の略語。FAT はファイル保存記録を整理および管理するために MS-DOS で使用されるファイルシステム構造です。Windows NT® オペレーティングシステム（および以降の Windows バージョン）は、オプションとして FAT ファイルシステム構造を使用できます。

FCC

連邦通信委員会（Federal Communications Commission）の略語。

FEPROM

フラッシュ消去可能 PROM（Flash Erasable Programmable Read-Only Memory）の略語。フラッシュメモリはEEPROMに似た非揮発性ストレージ デバイスの一種ですが、消去がブロックまたはチップ全体単位で行われます。

FIFO

first-in、first-out の略語。コンピュータプログラミングで FIFO（first-in、first-out）は、キューまたはスタックからのプログラム作業要求を扱う方法です。これで最も古い要求順に取り出すことができます。

FPBGA

フィールドプログラム可能ゲート配列（Field Programmable Gate Array）の略語。高いゲート密度を持ったプログラム可能ロジックチップ（PLD）。

FRU

フィールド置換可能ユニット (Field Replaceable Unit) の略語。

ft

フィート。

FTP

ファイル転送プロトコル (File transfer protocol) の略語。

g

グラム。

G

重力。

GB

ギガバイト (Gigabyte) の略語。ギガバイトは 1,024 メガバイト、1,073,741,824 バイトと同等。

GUI

グラフィカル ユーザー インタフェース (Graphical user interface) の略語。

h

16 進法 (Hexadecimal) の略語。基本の 16 進数システムは、システムのコンピュータやデバイスの I/O メモリのアドレスを識別するためにプログラミングでよく使用されます。たとえば、0~16 の 10 進数を 16 進数で表すと次のようになります。0、1、2、3、4、5、6、7、8、9、A、B、C、D、E、F、10。通常、16 進数を表記する場合は、数字の後に h を付けます。

HIP

Dell OpenManage™ Hardware Instrumentation Package の略語。

HMA

ハイメモリ領域 (high memory area) の略語。1 MB を超える拡張メモリの最初の 64 KB を指します。XMSにXMSに準拠するメモリマネージャは、コンベンショナルメモリの直接的な拡張領域として HMA を使用することができます。「上位メモリ領域」と「XMM」も参照してください。

HPFS

Windows NT と新しいバージョンの Windows オペレーティングシステムの高性能ファイルシステム (High Performance File System) オプションの略語。

HTTPS

ハイパーテキスト転送プロトコル、セキュア (HyperText Transmission Protocol, Secure) の略。HTTPS は HTTP の変形で、ウェブブラウザがセキュアトランザクションを処理するのに使用します。HTTPS は、HTTP の下に SSL が来るだけの固有のプロトコルです。SSL を持つ HTTP では「https://」を使い、SSL を使わない HTTP の URL には引き続き「http://」を使用します。

Hz

ヘルツ (Hertz) の略語。

I/O

入出力 (input/output) の略語。キーボードは入力デバイスで、プリンタは出力デバイスです。一般に、I/O 作業はコンピュータ計算作業とは別に考えられます。たとえばプログラムが文書をプリンタに送信すると、プリンタは出力作業を行います。一方、プログラムが用語を並べ替える作業はコンピュータ計算作業と考えられます。

ICES

カナダ標準機構、Interference-Causing Equipment Standard の略語。

ICU

ISA コンフィグレーション ユーティリティの略語。

ID

身分証明 (Identification) の略語。

IDE

Integrated Device Electronics の略語。IDE は、ハードドライブや CD で主に使用されているコンピュータシステムインタフェースです。

IHV

独立ハードウェアベンダ (Independent Hardware Vendor) の略語。IHV はしばしば、製造するコンポーネント用に独自の MIB を開発します。

interlacing

画面上の代替水平線だけを更新してビデオ解像度を増加させる技法。interlacing では、顕著なちらつきが発生することがあるので、多くのユーザーはノンインターレースを選びます。

IP

インターネットプロトコル (IP) は、データをインターネット上で 1 つのコンピュータから別のコンピュータに送信する方法、またはプロトコルです。インターネット上の各コンピュータ (ホストと呼ばれる) には、最低 1 つの IP アドレスが付いており、インターネットの他のすべてのコンピュータから一意に識別します。

IPMI

Intelligent Platform Management Interface の略語。Intel アーキテクチャベースのエンタープライズコンピュータで使用される複数の周辺機器を管理するための業界標準のインタフェース。IPMI の主な特徴は、インベントリ、監視、ログ、回復制御機能は、メインプロセッサ、BIOS、オペレーティングシステムとは関係なく提供されていることです。

IPX

ネットワーク間パケット交換 (Internetwork Packet Exchange) の頭字語。

IRQ

割り込み信号 (Interrupt request) の略語。周辺デバイスによってデータ送受信される信号は、IRQ 回線を通じてプロセッサに送られます。各周辺接続には IRQ 番号が割り当てられます。たとえば、コンピュータの最初のシリアルポート (COM1) は、デフォルト設定では IRQ4 に割り当てられます。2 つのデバイスで同じ IRQ 割り当てを共有することはできますが、両方のデバイスを同時に実行することはできません。

ISA

業界標準アーキテクチャ (Industry-Standard Architecture) の略語。16 ビット拡張バスのデザイン。ISA コンピュータの拡張カードコネクタは、8 ビットの ISA 拡張カードとも互換性があります。

ITE

情報技術機器用の略語

JVM

Java Virtual Machine の略語。

K

キロの略語。1,000 を意味する。

KB/sec

秒あたりのキロバイト (kilobytes per second) の略語。

KB

キロバイトの略語。1,024 バイト。

Kbit (s) /sec

秒あたりのキロビット (kilobits per second) の略語。

Kbit (s)

キロビットの略語。1,024 ビット。

Kerberos

秘密鍵暗号方式を用い、クライアント/サーバーアプリケーションのための強固な認証システムを提供するために設計されたネットワーク認証プロトコル。

kg

キログラムの略語。1,000 グラム。

KHz

キロヘルツの略語。1,000 ヘルツ。

LAN 上でのウェイクアップ

ネットワークによってクライアントステーションの電源をオンにできる機能。リモート ウェイクアップを使うと、就労日が終わってからユーザーのマシン上でソフトウェアのアップグレードやその他の管理タスクを実行することができます。また、リモート ユーザーがオフになっているマシンにアクセスすることもできます。Intel ではリモート ウェイクアップを「Wake-on-LAN」と呼びます。

LAN

ローカルエリア ネットワーク (local area network) の略語。LAN システムは、LAN 専用回線によってすべての機器をつなぐため、通常、同じ建物か近くのいくつかの建物間に限られています。

lb

ポンド。

LCC

鉛または無鉛のチップキャリア (leadless or leadless chip carrier) の略語。

LDAP

Lightweight Directory Access Protocol の頭字語。TCP/IP ネットワーク上のディレクトリサービスを検索したり、変更したりするためのネットワークプロトコル。

LED

発光ダイオード (light-emitting diode) の略語。電流が流れると発光する電子デバイス。

LIF

Low insertion force の略語。コンピュータによっては LIF ソケットとコネクタを使用して、マイクロプロセッサチップなどのデバイスを最小の圧力でデバイスにインストールしたり取り外したりできるものがあります。

LPT n

コンピュータ上にある 1~3 番目のパラレルポートのデバイス名は、LPT1、LPT2、LPT3 です。

LRA

ローカル応答エージェント (Local Response Agent) の略語。

LS ドライブ

レーザーサーボテクノロジーを使って、標準 3.5 インチディスクのように 120 MB までのデータを格納できる LS 120 ディスクを読み込むドライブ。

LSI

Large-Scale Integration の略語。

LUN

Logical Unit Number の略語。SCSI ID を共有する複数のデバイスの中から特定なデバイスを選択するために使われるコード。

mA

ミリアンペア。

mAh

ミリアンペア時 (milliampere-hour) の略語。

MB/sec

1秒あたりのメガバイト数 (megabyte(s) per second) の略語。

Mb

メガビット (megabit) の略語。

MB

メガバイト (megabyte) の略語。1 メガバイト は 1,048,576 バイトです。ただし、ハードディスクドライブの容量を表すときには、1 MB = 1,000,000 バイトを意味する場合もあります。

Mbps

1秒あたりのメガビット数 (megabits per second) の略語。

MBR

マスタートレコード (master boot record) の略語。

MCA

マルチプロセッシング用に設計されたマイクロ チャンネル アーキテクチャ (Micro Channel Architecture) の略。MCA は新しい周辺デバイスを取り付けるときに発生する可能性のあるコンフリクトをなくします。MCA は EISA または XT バス アーキテクチャとは互換性がないため、古いカードと一緒に使用することはできません。

MHz

メガヘルツ (megahertz)。

MIB

管理情報ベース (management information base) の略語。MIB を使用して、SNMP管理デバイスに状態/コマンドの詳細を送受信します。

MIDI

楽器用デジタルインタフェース (musical instrument digital interface) の略語。

MIF

管理情報フォーマット (management information format) の頭字語。MIFファイルには、情報、状態、コンポーネント計装へのリンクが入っています。MIFファイルは、DMI サービスレイヤによって MIF データベースにインストールされます。MIFの内容は DTMF 作業委員会によって定義されており、MIF 定義ドキュメントとして公開されています。このドキュメントには、DMI 管理可能コンポーネントに関連するグループおよびアトリビュートが定義されています。

mm

ミリメートル。

modem

コンピュータが電話回線を使って他のコンピュータと通信するための機器。

MOF

管理オブジェクトフォーマット (managed object format) の略語。ASCII ファイルに CIM スキーマの公式定義が入っています。

mouse

画面上でのカーソルの動きを制御するポインティングデバイス。マウス対応のソフトウェアを使用すると、画面に表示されたオブジェクトを指してマウスボタンをクリックすることにより、特定のコマンドを起動できます。

MPEG

Motion Picture Experts Groupの頭字語。MPEGはデジタルビデオファイルのフォーマットです。

ms

ミリ秒 (millisecond) の略語。

MTBF

平均故障間隔 (mean time between failures) の略語。

mV

ミリボルト (millivolt) の略語。

name

オブジェクトまたは変数の名前は SNMP MIB (Management Information Base) ファイル、DMI MIF (Management Information Format) ファイル、または CIM MOF (Management Object File) で識別する文字列です。

NDIS

Network Driver Interface Specificationの略語。

NIC

network interface controllerの頭字語。

NIF

network interface function の頭字語。この用語はNICと同義です。

NIS

Network Information System の略語。NIS は、ネットワークネームサービスおよび小規模ネットワーク用の管理システムです。すべてのホストのユーザーが、1つの ID およびパスワードで、ネットワーク内にあるすべてのホスト上のファイルまたはアプリケーションにアクセスすることができます。

NMI

マスク不可能割り込み (nonmaskable interrupt) の略語。デバイスは NMI を送信して、ハードウェアエラー (パリティエラーなど) をプロセッサに知らせます。

ns

ナノ秒 (nanosecond) の略語。1 ナノ秒は、10 億分の 1 秒です。

NTFS

Windows NT と新しいバージョンの Windows オペレーティングシステムの NT ファイルシステム (NT File System) オプションの略語。

NuBus

Apple Macintosh パーソナル コンピュータで使用する専用拡張バス。

NVRAM

不揮発性ランダムアクセスメモリ (nonvolatile random-access memory) の略語。NVRAM は、コンピュータの電源を切っても情報が保持されるメモリです。NVRAM は、日付、時刻、システム設定情報の保存に使用されます。

OEM

相手先ブランド製造メーカー (Original Equipment Manufacturer) の略語。OEM は、再販業者のブランド名を使って、再販または別の製品を製造するために、設備を他のメーカーに供給する会

社。

OID

object identifier の略語。オブジェクトを一意に識別する、実装固有の整数またはポインタ。

OTP

一回限りプログラム可能 (one-time programmable) の略語。

PCI

周辺機器相互接続 (Peripheral Component Interconnect) の略語。PCI は、Intel Corporation が開発したローカルバス規格です。

PCMCIA

Personal Computer Memory Card International Association。ノートブックコンピュータに接続できるモデムや外付けハードドライブなどのデバイスの規格を作成した国際通商協会。

PERC

Dell PowerEdge™ Expandable RAID controller の頭字語。

PGA

pin grid array の略語。プロセッサチップの取り外しが可能なプロセッサソケット。

PIC

プログラム可能割り込み信号コントローラ (programmable interrupt controller) の頭字語。

PIP

周辺交換プログラム (peripheral interchange program) の頭字語。ファイルをコピーするのに使用する CPM ユーティリティプログラム。

PLCC

プラスチック有鉛チップキャリア (plastic leaded chip carrier) の略語。

PME

電力管理イベント (Power Management Event) の略語。PME は周辺機器相互接続上のピンで、PCI デバイスは PME によって wake イベントをアサートできます。

POST

電源投入時セルフテストの頭字語。コンピュータの電源を入れると、オペレーティングシステムがロードされる前に、POSTによってさまざまなシステムコンポーネント (RAM、ディスクドライブ、キーボードなど) がテストされます。

ppm

1分あたりのページ数 (pages per minute) の略語。

PQFP

plastic quad flat pack の略語。プロセッサチップが固定されて取り外しできないプロセッサソケット。

PS/2

Personal System/2 の略語。

PS

電源 (Power Supply) の略語。

PXE

Preboot eXecution Environmentの略語。

QFP

クワッドフラットパック (quad flat pack) の略語。

RAC

Remote Access Controller の略語。Dell OpenManage Server Administrator は、すべての RAC をサポートします。(DRAC II、DRAC III、DRAC III/XT、ERA、および ERA/O)

RAID

Redundant array of independent drives の略語。

RAM

Random-Access Memory の略語。コンピュータプログラムの命令やデータの保存に使用される主要な一時記憶領域。RAM 内部の各領域は、「メモリアドレス」と呼ばれる数値によって識別されます。コンピュータの電源を切ると、RAM に格納されたすべての情報は失われます。

RAMBUS

Rambus DRAM の略語。Rambus, Inc. が開発したメモリ (DRAM) の種類。

RAMDAC

ランダムアクセスメモリデジタルアナログコンバータ (random-access memory digital-to-analog converter) の頭字語。

RAW

未処理。この用語は、I/O デバイスに未解釈で渡されるデータを指します。対照的に、「cooked」は I/O デバイスに渡される前に処理済みのデータを指します。

しばしば、専用のフォーマットに保存されていない非圧縮テキストを指すこともあります。この用語は、端末へのデータ出力のクックドモードとローモードをサポートする UNIX から来ています。

RDRAM

Rambus DRAM の頭字語。Rambus, Inc. の DRAM チップテクノロジーダイレクト RDRAM がコンピュータに使用されています。ダイレクト RDRAM チップは RIMM モジュールにあります。これは DIMM に似ていますが、ピン設定が異なります。チップをデュアル チャンネルで作成して、転送レートを 2 倍の 3.2 GB/sec にすることができます。

readme ファイル

ソフトウェアパッケージまたはハードウェア製品に付属しているテキストファイル。そのソフトウェアまたはハードウェアに関する補足情報やマニュアルのアップデートが入っています。通常、readme ファイルには、インストール情報、新製品の拡張機能、マニュアルに記載されていない訂正事項、確認されている問題点など、その製品を使用する際に必要な情報が入っています。

RFI

無線周波数干渉（radio frequency interference）の略語。

RGB

赤 / 緑 / 青（red/green/blue）の略語。

RIMM

Rambus In-line Memory Module の略語。Rambus の DIMMモジュールに相当します。

ROM

読み取り専用メモリ（read-only memory）の頭字語。コンピュータのプログラムの中には、ROM コードで実行しなければならないものがあります。RAM とは違って、コンピュータの電源を切っても、ROM チップの内容は保持されます。ROM コードの例として、コンピュータのブートルーチンと POST を起動するプログラムなどが挙げられます。

ROMB

RAID on motherboard の略語。RAID コントローラがシステムの基板に統合されている場合、このシステムは ROMB テクノロジを搭載しています。

RPM

1分あたりの回転数（revolutions per minute）の略語。

RTC

リアルタイムクロック（real-time clock）の略語。RTC はコンピュータに内蔵されたバッテリー方式のクロック回路で、コンピュータの電源を切っても日付と時刻の情報が保持されます。

SAS

シリアルアタッチド SCSI（Serial Attached SCSI）の頭字語。

SCA

単一コネクタ接続（single connector attachment）の略語。

schema

特定環境における管理オブジェクトを説明したクラス定義の集まり。CIM スキーマは各管理環境に共通した管理オブジェクトを表すのに使用するクラス定義の集まりです。CIM が共通情報モデル（Common Information Model）と呼ばれるのはこのためです。

SCSI

小型コンピュータシステムインタフェース（small computer system interface）の頭字語。SCSI は、標準ポートよりもデータ伝送速度が速い I/O バスインタフェースです。1 つの SCSI インタフェースに最大 7 個（新しい SCSI タイプによっては 15 個）のデバイスを接続できます。

SDMS

SCSI デバイス管理システム（SCSI device management system）の略語。

sec

秒（second）の略語。

SEC

単一エッジコネクタカートリッジ（single-edge connector cartridge）の略語。

SGRAM

synchronous graphics RAM の頭字語。

SIMD

Single Instruction Multiple Dataの略語。

SIMM

single in-line memory moduleの頭字語。DRAMチップを持つ小さな回路基板で、システム基板に接続します。

SIP

single in-line package の頭字語。接続ピンが一方から突き出た電子コンポーネントのハウジングの一種。SIP は、シングル インライン ピン パッケージ（Single In-line Pin Package-SIPP）とも呼ばれます。

SKU

stock keeping unit の頭字語。

SMART

Self-Monitoring Analysis Reporting Technology の頭字語。ハードディスクドライブにエラーや障害があった場合に、システムBIOSが報告し、画面にエラーメッセージを表示するための技術です。この技術を利用するには、SMART準拠のハードディスクドライブおよびシステムBIOSのサポートが必要です。

SMBIOS

system management BIOSの頭字語。

SMD

表面取り付けデバイス（surface mount device）の略語。

SMTP

Simple Mail Transfer Protocol の略語。インターネットを介して電子メールを通信する方法。

SNMP

シンプルネットワーク管理プロトコル（Simple Network Management Protocol）の略語。SNMPは、ネットワークマネージャがワークステーションをリモートで監視および管理するための業界標準のインタフェースです。

SODIMM

small outline-DIMM の頭字語。TSOP チップパッケージの使用により、薄型プロファイルを持つ DIMM モジュール。SODIMM は一般にラップトップコンピュータで使用されます。

SRAM

静的ランダムアクセスメモリ（static random-access memory）の略語。SRAM チップは定期的なリフレッシュを必要としないため、DRAM チップよりかなり高速です。

SVGA

super video graphics arrayの略語。VGAとSVGAは、従来の規格よりも高い解像度と多くの表示色数を使用できるビデオアダプタ用のビデオ規格です。

特定の解像度でプログラムを表示するには、適切なビデオドライバとその解像度をサポートしているモニターが必要です。同様に、プログラムが表示可能な表示色数は、モニターの性能、ビデオドライバ、およびビデオメモリの量によって決まります。

system.ini ファイル

Windows オペレーティングシステム用の起動ファイル。Windows を起動すると、**system.ini** ファイルを参照して、Windows の操作環境のさまざまなオプションが設定されます。**system.ini** ファイルには、Windows にどのビデオ、マウス、キーボードがインストールされているかが記録されています。

コントロールパネルまたは Windows セットアッププログラムを実行すると、**system.ini** ファイルのオプションを変更できます。それ以外の場合は、メモ帳などのテキストエディタを使用して、手作業で **system.ini** ファイルのオプションの変更や追加を行う必要があります。

tpi

1インチあたりのトラック数 (tracks per inch) の略語。

TQFP

薄型クワッドフラットパック (thin quad flat pack) の略語。

TSR

メモリ常駐 (terminate-and-stay-resident) の略語。TSR プログラムは「バックグラウンド」で実行されます。ほとんどの TSR プログラムには特定の複合キー (ホットキー) が組み込まれており、別の MS-DOS プログラムを実行している間に TSR プログラムのインタフェースを起動することができます。TSR プログラムを使い終わったら、元のアプリケーションプログラムに戻り、TSR プログラムをメモリに常駐させて後で再使用することができます。

TSR プログラムは、メモリ コンフリクトを引き起こす場合があります。トラブルシューティングを行うときは、TSR プログラムを起動しない状態でコンピュータをリブートして、このようなメモリコンフリクトの可能性を除外してください。

UART

Universal asynchronous receiver transmitter の頭字語。シリアルポートを構成する電子回路。

UDP

ユーザーデータグラムプロトコル (user datagram protocol) の略語。

UL

Underwriters Laboratories の略語。

UMB

上位メモリブロック (upper memory block) の略語。

unicode

Unicode Consortium が開発維持する、固定長の 16 ビット国際文字コードシステム。

UPS

無停電電源装置 (Uninterruptible power supply) の略語。停電が発生するとコンピュータに自動的に電力を供給するバッテリー内蔵の電源装置のことです。

USB

Universal Serial Bus の略語。USB コネクタは、マウス、キーボード、プリンタ、スピーカなど、USB 準拠の複数のデバイスに対応しています。また、USB デバイスはシステムの実行中に取り付

けたり取り外したりすることができます。

UTP

unshielded twisted pair（シールドなしツイストペア）の略語。

UUID

ユニバーサル固有識別（Universal Unique Identification）の略語。

V

ボルトの略語。

VAC

ボルト交流（volt(s) alternating current）の略語。

varbind

オブジェクト識別子または OID の割り当てに使用するアルゴリズム。varbind は、企業を一意に識別する 10 進数接頭辞に到達する規則を提供するとともに、その企業の MIB で定義されるオブジェクトの一意 ID を指定する数式も提供します。

VCCI

Voluntary Control Council for Interference の略語。

VCR

ビデオカセットレコーダ（video cassette recorder）の略語。

VDC

ボルト直流（volts direct current）の略語。

VESA

ビデオ電子規格協会（Video Electronics Standards Association）の頭字語。

VGA 対応コネクタ

VGA ビデオアダプタが内蔵された一部のシステム上では、VGA 対応コネクタを使用すると、ビデオアクセラレータなどの拡張アダプタをコンピュータに追加することができます。VGA 対応コネクタは、VGA バススルーコネクタとも呼ばれます。

VGA

video graphics array の略語。VGA と SVGA は、従来の規格よりも高い解像度と多くの表示色数を使用できるビデオアダプタ用のビデオ規格です。特定の解像度でプログラムを表示するには、適切なビデオドライバとその解像度をサポートしているモニターが必要です。また、プログラムで表示できるカラーの数は、モニターやビデオドライバの機能と、ビデオアダプタに搭載されたビデオメモリの容量に応じて異なります。

VLSI

超大規模集積回路（very-large-scale integration）の略語。

VLVESA

very low voltage enterprise system architecture の頭字語。

VPP

ピーク時電圧 (peak-point voltage) の略語。

VRAM

ビデオランダムアクセスメモリ (video random-access memory) の略語。ビデオアダプタの中には、VRAM チップ (または VRAM と DRAM の組み合わせ) を使用してビデオ性能の向上を図っているものがあります。VRAM はデュアルポートであるため、ビデオアダプタを通じて、画面の更新と新しい画像データの受信を同時に行うことができます。

VRM

電圧変換モジュール (Voltage Regulator Module) の略語。

W

ワット (watt) の略語。

WH

watt-hour(s) (1時間当たりのワット数) の略語。

win.ini ファイル

Windows オペレーティングシステム用の起動ファイル。Windows を起動時に、この win.ini ファイルが Windows の動作環境の各種オプションを決定します。この win.ini ファイルは特にプリンタやフォントのインストール情報を持ちます。さらに win.ini ファイルは通常、ハードドライブにインストール済みの Windows アプリケーションプログラムのオプション設定情報のセクションを持ちます。

コントロール パネルか Windows セットアッププログラムを実行すると、win.ini ファイルのオプションの変更が可能です。またメモ帳などのエディタを使って、テキストベースでこの win.ini ファイルに変更や追加を行うことも可能です。

Winbind

異なるネットワークのユーザの、UNIX オペレーティングシステムのワークステーションを使ったログインを可能にするプログラム。このプログラムは、Windows を各 UNIX ワークステーションに対し UNIX のように見せかけることで、Windows ドメインで UNIX ワークステーションを機能させます。

XMM

拡張メモリアマネージャ (eXtended Memory Manager) の略語。XMM は、アプリケーションプログラムやオペレーティングシステムで、XMS に準拠する拡張メモリを使用できるようにするユーティリティです。

XMS

拡張メモリ仕様 (eXtended Memory Specification) の略語。

ZIF

Zero Insertion Force の略語。コンピュータによってこの ZIF ソケットやコネクタを利用して、マイクロプロセッサチップなどのデバイスに対して負荷をかけずに取り付け、取り外しを行うものがあります。

ZIP

Imaging Technology Corporation 提供の 3.5 インチのリムーバブルディスクドライブ。基本的に 100 MB のリムーバブル カートリッジを使用します。ドライブは、ディスクをカタログ化してセキュリティのためにファイルをロックするソフトウェアとバンドルされています。

ZIP ドライブには 250 MB のバージョンもありますが、100 MB ZIP カートリッジの読み書きも可能です。

アクセス

変数値に対してユーザーが行うことのできる動作。例として、読み取り専用や読み書きなどがあります。

アセットタグコード

通常システム管理者によって、安全性および追跡目的で、各コンピュータに個別割り当てられるコード。

アダプタ カード

コンピュータシステム基板上の拡張カードコネクタに差し込む拡張カード。アダプタカードは拡張バスと周辺装置とのインタフェースをもってコンピュータに特殊な機能を提供します。アダプタカードの例として、ネットワークカード、サウンドカード、SCSI アダプタなどが挙げられます。

アトリビュート

管理可能なコンポーネントに関する特定の情報を含んだアトリビュートまたはプロパティ。アトリビュートを組み合わせて、グループにすることができます。アトリビュートが読み込み / 書き込みとして定義されていれば、管理アプリケーションで定義することができます。

ウイルス

システムに損害を与えるように設計された自己起動型プログラム。ウイルスプログラムは、ハードディスクドライブに格納されたファイルを破壊したり、システムやネットワークのメモリが一杯になるまで自己増殖したりすることが知られています。

一般的に、ウイルスプログラムは「感染した」から自分自身をハードディスクドライブにコピーすることによって、数多くのシステムに感染していきます。ウイルスからシステムを保護するために、次のような対策を請じてください。

- 1 コンピュータのハードディスクドライブに対して定期的にウイルス検査ユーティリティを実行します。
- 1 ディスク（市販のソフトウェアも含みます）を使用する前に、そのディスクに対して必ずウイルス検査ユーティリティを実行します。

オンラインアクセスサービス

インターネット、電子メール、掲示板、チャットルームおよびファイルライブラリなどへのアクセスを提供するサービス。

書き込み防止

読み込み専用ファイルは「書き込み保護」が掛けられているファイルです。3.5 インチのディスクは書き込み保護タブを動かして書き込み保護することもできますが、セットアップ ユーティリティプログラムの機能で設定することも可能です。

拡張カード コネクタ

拡張カードを接続するための、コンピュータのシステム基板またはライザ ボードのコネクタ。

拡張バス

コンピュータには、マイクロプロセッサが周辺機器（ネットワークカードや内蔵モデムなど）のコントローラと通信できるようにする拡張バスがあります。

拡張メモリ（expanded memory）

1 MB を超える RAM にアクセスする技術。コンピュータで拡張メモリを有効にするには、EMM を使用する必要があります。拡張メモリを使用する（または必要とする）アプリケーションプログラムを実行している場合のみ、拡張メモリをサポートするようにシステムを設定する必要があります。

拡張メモリ（extended memory）

1 MB を超える RAM。拡張メモリを使用できるほとんどのソフトウェア（Windows オペレーティング システムなど）では、拡張メモリを XMM で制御する必要があります。

仮想メモリ

ハードディスクドライブを使用して、アドレスリング可能な RAM を増加させる技法。たとえば、16 MB の RAM を搭載したコンピュータのハードディスクドライブ上で 16 MB の仮想メモリをセットアップした場合、オペレーティングシステムでは、32 MB の物理 RAM が存在する場合と同様の方法でシステムメモリが管理されます。

機能

オブジェクトが実行できる動作、または管理オブジェクトで実行できる動作を示します。たとえば、カードがホットプラグ対応の場合、システム電源がオンの状態でカードを取り替えることができます。

キャッシュ

データのコピーまたはすぐにデータを取得するための手順を保管しておく記憶領域。たとえば、コンピュータの BIOS は、ROM コードを高速 RAM にキャッシュする場合があります。または ディスク キャッシュユーティリティで RAM を保存して、コンピュータのディスクドライブからアクセス頻度の高い情報をそこに保管することができます。プログラムがキャッシュにあるデータをディスクドライブに要求すると、ディスク キャッシュユーティリティはディスクドライブより速く RAM からデータを取得することができます。

グラフィック コプロセッサ

コプロセッサを参照。

グラフィック モード

水平ピクセル x 垂直ピクセル y カラー z で定義されるビデオモード。

グループ

DMI関連では、グループは管理可能なコンポーネントについての共通の情報またはアトリビュートを定義するデータ構造です。

形式

ファイルを保存するためにハードドライブまたはディスクを用意すること。無条件の形式では、ディスクに保存されているすべてのデータが削除されます。

こうぶん構文

コンピュータが理解できるようにコマンドや命令を入力する方法を指示する規則。変数のシンタックスはそのデータタイプを示します。

コプロセッサ

コンピュータのプロセッサから特定の処理タスクを開放するチップ。たとえば数値演算コプロセッサは、数値処理を担当します。またグラフィックコプロセッサはビデオレンダリングを行います。たとえば、Intelには組み込み数値演算コプロセッサが搭載されています。

コントローラ

マイクロプロセッサとメモリ、またはマイクロプロセッサとディスクドライブやキーボードなどの周辺デバイスとの間のデータ転送を制御するチップ。

コントロールパネル

電源スイッチ、ハードディスクドライブインジケータ、電源インジケータなどのインジケータやコントロールを収めるコンピュータの一部。

コンベンショナル メモリ

RAMの最初の 640 KB の部分。コンベンショナルメモリはすべてのコンピュータにあります。MS-DOS® プログラムは特別に設計されていない限り、コンベンショナルメモリ内で実行されます。

コンポーネント

DMI関連では、管理可能なコンポーネントとは、オペレーティングシステム、コンピュータシステム、拡張カード、またはDMIと互換性のある周辺機器を指します。各コンポーネントは、それぞれに関連したグループおよびアトリビュートから構成されます。

サービス タグ ナンバー

コンピュータ上のバーコードラベルはお客様が デル社のカスタマー サポートやテクニカル サポートへ問い合わせる際の識別番号が記載されています。

しきい値

温度、電圧、電流およびファン速度などを監視するセンサーを備えたシステム。センサーのしきい値は、センサーが通常、非重要、重要または危険状態で稼働しているかを決定する範囲（最小値と最大値）を指定します。Dell がサポートするしきい値:

- 1 致命的しきい値上限
- 1 重要しきい値上限
- 1 非重要しきい値上限
- 1 標準
- 1 非重要しきい値下限
- 1 重要しきい値下限
- 1 致命的しきい値下限

システムディスク

ブート可能ディスクの同義語。

システムメモリ

RAMの同義語。

システム基板

コンピュータの主要な回路ボードであるシステムボードには、次のような内蔵コンポーネントの多くが搭載されています。

- 1 プロセッサ
- 1 RAM
- 1 標準的な周辺機器（キーボードなど）のコントローラ
- 1 ささまざまな ROMチップ

システム基板は、マザーボードや論理ボードと呼ばれることもあります。

システム設定情報

取り付けられているハードウェアの種類とコンピュータの動作環境の構成をコンピュータに指示するデータ。

シャドウイング

通常、コンピュータのシステムとビデオの BIOS コードは、ROM チップに格納されます。シャドウイングとは、起動ルーチンの実行中に（640 KB 以上の）上位メモリ領域の高速 RAM チップに BIOS コードをコピーして性能を向上させる技法を指します。

ジャンパ

ジャンパは 2 本以上のピンがある、回路基板上の小さなブロックです。ワイヤの付いたプラスチックのプラグをピンにかぶせます。ワイヤはピンを接続し、回路を作成します。ジャンパはプリント回路基板の回路を変更する、簡単に両方向の方法を提供します。

終端処理

一部のデバイス（SCSIケーブルの終端に接続されるデバイスなど）では、過剰な電流の吸収や発散を行うための終端処理が必要です。このようなデバイスを 2 つ以上連結する場合は、ジャンパまたはスイッチの設定を変更するか、デバイスの設定ソフトウェアで設定を変更することで、ターミネータを有効または無効にする必要があります。

周辺デバイス

コンピュータに接続される内蔵装置または外付け装置（プリンタ、ディスクドライブ、キーボードなど）。

上位メモリ領域

640 KB ~ 1 MB の間に位置する 384 KB の RAM。コンピュータに Intel 386 以降のプロセッサが搭載されている場合は、メモリマネージャと呼ばれるユーティリティを使用して上位メモリ領域内に UMB を作成し、デバイスドライバやメモリ常驻型プログラムをその UMB にロードすることができます。

状況

1 つ以上の条件を持つオブジェクトの状態を指します。たとえば、オブジェクトは「準備中」状況である場合があります。

状態

オブジェクトの健康状態や機能状態を指します。たとえば、温度プローブを、プローブが許容温度を測定している場合に通常状態と呼ぶことができます。プローブがユーザー設定の制限を超えた温度を読み取ると、重要状態が報告されます。

シリアル ポート

一般的に、モデムやマウスをコンピュータに接続するのに使用される I/O ポート。通常、コンピュータのシリアルポートは、9 ピンのコネクタで識別できます。

スイッチ

コンピュータのシステム基板のスイッチは、コンピュータシステムでさまざまな回路機能を制御します。これらのスイッチは「DIP スイッチ」として知られています。通常、DIP スイッチは 2 つ以上のスイッチがパッケージ化されており、プラスチックのケースに入っています。システム基板では、スライドスイッチとロッカースイッチです。スイッチの名前は、設定（オン / オフ）の変更方法に基づいています。

数値演算コプロセッサ

「コプロセッサ」を参照。

ローカルバス

ローカルバス拡張機能を持つコンピュータでは、特定の周辺デバイス（ビデオアダプタ回路など）を従来の拡張バスを使用する場合よりかなり高速で動作するように設定できます。ローカルバスのデザインの中には、コンピュータのプロセッサと同じ速度、同じ幅のデータバスで周辺機器を実行できるものがあります。

セットアップユーティリティ

コンピュータのハードウェアを構成し、パスワード保護機能や省電力設定などを設定することでコンピュータの動作をカスタマイズするための BIOS プログラム。セットアップユーティリティのオプションの中には、コンピュータをリブートしないと（自動的にリブートする場合があります）ハードウェア設定の変更が有効にならないものがあります。セットアップユーティリティは NVRAM に保存されるため、設定は明示的に変更しない限り有効に維持されます。

外付けキャッシュメモリ

RAM キャッシュで、SRAM チップを使用するもの。SRAM チップは DRAM チップの数倍の速度で実行されるため、マイクロプロセッサは RAM よりも速く外付けキャッシュメモリからデータと指示を取り込みます。

タイムアウト

省電力機能が起動されるまでのシステムのアイドル時間。

チップ

コンピュータのプロセッサやメモリ用に設計された超小型の電子回路セット。小さいチップは、何万ものトランジスタを収納できます。チップは小さなアルミニウム片のようなもので、大きさは 1/16 インチ四方未満、厚さは 1/30 インチ未満と、その名のとおりまさに「チップ」といった風情の代物です。1/2 インチ以上の大きいチップには、数百万のトランジスタを収納できます。回路を収納しているのは、実際にはチップの 1 インチの最初の 1000 分の 1 の部分です。残りは基底部分です。

ディスプレイ アダプタ

「ビデオアダプタ」を参照。

テーブル

SNMP MIB では、テーブルは管理オブジェクトを構成する変数について説明した 2D の配列です。

テキストエディタ

ASCII 文字だけを含むテキストファイルを編集するためのアプリケーションプログラム。たとえば、Windows のメモ帳などはテキストエディタです。ワードプロセッサの中には、テキストファイルの読み取りと書き込みができるものもありますが、大部分のプログラムはバイナリ文字を含む固有のファイル形式を使用しています。

テキストモード

x 列として y 行の文字で定義されるビデオモード。

デバイスドライバ

オペレーティングシステムまたは他のプログラムが、プリンタなどの周辺デバイスと正しく相互作用できるようにするプログラム。ネットワークドライバなどのデバイスドライバは、`-config.sys`ファイルから (`device=` ステートメントにより) ロードするか、またはメモリ常驻プログラム (通常は、`autoexec.bat`ファイルから起動) としてロードする必要があります。ビデオドライバなど他のドライバは、対象のプログラムを起動したときにロードする必要があります。

電源装置

壁コンセントからの AC 電流をコンピュータ回路が必要とする DC 電流に変換する電気システム。パーソナルコンピュータの電源装置は通常、いくつもの電圧を生成します。

電力装置

システムシャーシ内の電源装置。

ドライブタイプ番号

コンピュータでは、複数の特定のハードディスクドライブが認識されます。各システムにはドライブタイプ番号が割り当てられ、NVRAMに保存されます。システムのセットアップユーティリティに指定するハードドライブと実際にインストールしたドライブとは一致している必要があります。セットアップユーティリティでは、NVRAM に保存されていないドライブタイプのテーブルに含まれていないドライブの物理パラメータ (論理シリンダ、論理ヘッド、シリンダ番号およびバックごとの論理セクタ) を指定できます。

内蔵プロセッサキャッシュ

プロセッサに組み込まれた命令とデータのキャッシュ。Intel Pentium プロセッサには 16 KB の内部キャッシュがあり、8 KB の読み取り専用命令キャッシュと、8 KB の読み書きデータ キャッシュに設定されています。

認証局

認証局は、業界で認可された事業体で、ネットワークまたはインターネットで他のシステムに身分を証明する情報を要求している組織の身元を確認します。応募者に証明書を発行する前に、認証局は身分を証明する情報とその他のセキュリティ情報を要求します。

認証

Server Administrator Remote Access Controller には、ユーザーアクセスを認証する 2 つの方法があります。RAC 認証と、ローカルオペレーティングシステム認証です。RAC 認証は常に有効になっています。システム管理者は、RAC へのアクセスを許可する特定のユーザーアカウントとパスワードを設定することができます。

オペレーティングシステムでは、システム管理者が異なるレベルのユーザーとユーザーアカウントを定義する必要があります。各ユーザーレベルによって与えられる特権が異なります。RAC におけるローカルオペレーティングシステム認証は、オペレーティングシステムのユーザーに 1 組の特権を定義し、RAC に別のユーザーとアカウントを設定することを希望しないシステム管理者が使用できるオプションです。RAC のローカルオペレーティングシステム認証を有効にすると、RAC にログインするオペレーティングシステム上でシステム管理者状態を持つすべてのユーザーを有効にすることになります。

ノンインタレース

画面上の各水平線を順次に更新することで、画面のちらつきを低減させる技術。

パーティション

「fdisk」コマンドを使用すると、**パーティション**と呼ばれる複数の物理セクションにハードディスクドライブを分割できます。各パーティションには、複数の論理ドライブを格納できます。

ハードドライブをパーティションした後、それぞれの論理ドライブを **format** コマンドを使ってフォーマットする必要があります。

バイト

8 ビットの情報。コンピュータで用いる基本データ単位。

バイナリ

0と1を使って情報を表す2進法。コンピュータはこれをもとに処理を行い、数値計算を実行します。

バス

コンピュータのコンポーネント間のデータの通り道。コンピュータには拡張バスが搭載され、それによってマイクロプロセッサは各種の周辺デバイスのコントローラとの通信が可能となります。また、コンピュータには、マイクロプロセッサとRAM間の通信用にアドレスバスおよびデータバスが搭載されています。

バックアップ

プログラムまたはデータファイルのコピー。安全対策として、コンピュータのハードディスクドライブは定期的にバックアップしてください。コンピュータの構成の変更前は、オペレーティングシステムからスタートアップに必要なファイルをバックアップしておくことが肝心です。

パラメータ

プログラムに対して指定する値またはオプション。パラメータは、「スイッチ」または「引数」と呼ばれることもあります。

パラレル ポート

一般的には、パラレルプリンタをコンピュータに接続するのに使用される I/O ポート。通常、コンピュータのパラレルポートは、25 穴コネクタで識別できます。

ヒート シンク

熱を発散させるための金属釘または金属リブが付いた金属板。ほとんどのプロセッサは、このヒートシンクを装備しています。

ピクセル

ビデオ画面上の単一の点。ピクセルを行と列に配列して画像が表示されます。640 x 480 というビデオ解像度は、横方向に 640 個のピクセル、縦方向に 480 個のピクセルが並んだ行列として表されます。

ビット

コンピュータによって解釈される情報の最小単位。

ビデオアダプタ

モニタ（ディスプレイ）と連携してコンピュータのビデオ機能を実現するための論理回路。ビデオアダプタは、特定のモニタが提供する機能よりも多い機能または少ない機能をサポートします。通常、ビデオアダプタには、一般的なアプリケーションプログラムやオペレーティング システムをさまざまなビデオモードで表示するためのビデオドライバが付属しています。

デル弊社の一部のコンピュータでは、システム基板にビデオアダプタが組み込まれています。また、拡張カードコネクタに差し込む数多くのビデオアダプタカードが利用できます。

通常、ビデオアダプタには、システム基板上の RAM とは別個のメモリが割り当てられます。同時に表示できるカラーの数は、ビデオメモリの容量とアダプタのビデオドライバに応じて異なります。高速のグラフィック描画を実現するために、ビデオアダプタには独自のコプロセッサが内蔵される場合もあります。

ビデオドライバ

特定の数のカラーを希望の解像度で、グラフィックモードのアプリケーションプログラムやオペレーティングシステムを表示するためのプログラム。一部のソフトウェアパッケージには汎用的なビデオドライバが組み込まれています。コンピュータにインストールされているビデオアダプタ用にビデオドライバの追加が必要になる場合もあります。

ビデオメモリ

ほとんどの VGA ビデオアダプタと SVGA ビデオアダプタには、コンピュータの RAM とは別にメモリチップが内蔵されています。プログラムで同時に表示できるカラーの数は主に、インストールされたビデオメモリの容量によって決まります（他の要因としては、ビデオドライバやモニタの機能があります）。

ビデオモード

通常、ビデオアダプタでは複数のテキスト / グラフィック表示モードがサポートされます。文字ベースのソフトウェアは、「x 列 × y 行の文字」で定義されるテキストモードで表示されます。グラフィックベースのソフトウェアは、x 個の横ピクセル × y 個の縦ピクセル × z 種類のカラーで定義されるグラフィックモードで表示されます。

ビデオ解像度

ビデオ解像度（800 x 600 など）は、「横方向のピクセル数 × 縦方向のピクセル数」で表されます。特定の解像度でプログラムを表示するためには、適切なビデオドライバをインストールすること、およびモニタでその解像度がサポートされることが必要です。

ブートルーチン

コンピュータ起動時にメモリをクリアし、デバイスを初期化し、OS をロードします。OS が応答に失敗しない限り、コンピュータは <Ctrl><Alt> で再起動（ウォームブート）できます。これができない場合はリセットボタンを押すか、コンピュータの電源を一度落としてまた入れなおす、コールドブートを実行する必要があります。

ブート可能ディスク

コンピュータはフロッピーで起動可能です。このブート可能ディスクを作成するときは、ディスクをドライブに挿入し、sys a: とコマンドラインプロンプトに入力してから <Enter> を押します。コンピュータがハードドライブから起動できないときにこのブート可能ディスクを使用します。

複数周波数モニタ

いくつかのビデオ規格をサポートするモニタ。複数周波数モニタはさまざまなビデオ アダプタの周波数範囲に合わせて調整できます。

複合キー

複数のキーを同時に押すコマンド。たとえば、<Ctrl><Alt> キーの組み合わせを押すと、コンピュータを再起動できます。

物理メモリアレイ

物理メモリアレイは、システムの全物理メモリ配列です。物理メモリアレイの変数には、最大サイズ、マザーボード上の合計メモリスロット数、および使用中の合計スロット数などがあります。

プラグ アンド プレイ

ハードウェアデバイスをパーソナルコンピュータに追加しやすくなるための業界標準仕様。プラグアンドプレイによって、自動インストールと設定、既存ハードウェアとの互換性、およびモバイルコンピューティング環境のダイナミックサポートが提供されます。

フラッシュ BIOS

ROM でなくフラッシュメモリに保存される PC BIOS。ROM BIOS が新しいチップと交換しなければならないのに対し、フラッシュ BIOS チップはアップデートすることができます。

フラッシュメモリ

コンピュータに取り付けたまま、ディスク内のユーティリティを使用して再プログラミングできる EEPROM チップ。ほとんどの EEPROM チップは、特別なプログラミングツールがなければ書き込みできません。

プローブ

システムのある一定の時点で、量的測定をしたり、システムの状態を決定する電気センサー。Server Administrator は温度、電圧、ファン、メモリ、電流、およびシャーシントルージョンなどを監視します。プローブは計量（特定の場所および時間での温度測定など）、あるいは状態（シャーシントルージョンが発生した、またしなかった場合など）をスナップショットで表示します。

プログラムディスクセット

オペレーティングシステムまたはアプリケーションプログラムを完全にインストールできるディスクのセット。プログラムを再設定するときには、通常、プログラムディスクセットが必要になります。

プロセッサ

演算機能と論理機能の解釈と実行を制御する、コンピュータ内部の主要な演算チップ。1つのプロセッサに書き込まれたソフトウェアは、別のプロセッサで実行するためには改訂する必要があります。CPUはマイクロプロセッサの同義語です。

プロテクトモード

80286以降のプロセッサによってサポートされる動作モード。プロテクトモードでは、オペレーティングシステムを通じて次のことが実現されます。

- 1 16 MB（80286 マイクロプロセッサの場合）～ 4 GB（Intel 386 以上のプロセッサの場合）のメモリアドレススペース
- 1 マルチタスク
- 1 仮想メモリ（ハードディスクドライブを使用して、アドレッシング可能なメモリを増加させる技法）

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、OS/2、および UNIX 32 ビットオペレーティングシステムはプロテクトモードで実行されます。ただし、MS-DOS から起動できる一部のプログラム（Windows など）は、コンピュータをプロテクトモードに移行することができます。

プロバイダ

プロバイダは管理オブジェクトと通信してさまざまなソースからデータとイベント通知にアクセスする CIM スキーマの拡張機能です。プロバイダはこの情報を CIM オブジェクト マネージャに転送して統合と解釈を行います。

変数

管理オブジェクトの一部。たとえば温度プローブには、機能、健康状態または状態、および正しい温度プローブを見つけるのに役立つ特定の指標などの変数があります。

ポーレート

データ伝送速度の尺度。たとえば、モデムはコンピュータの COM（シリアル）ポートを通じてのデータ転送をいくつかのポーレートで行えるよう設計されています。

ホストアダプタ

ホストアダプタはコンピュータのバスと周辺デバイスのコントローラ間の通信を行います。（ハードドライブ コントローラ サブシステムは内蔵ホストアダプタ回路を含みます。）SCSI 拡張バスをシステムに追加するには、適切なホストアダプタを設置または接続する必要があります。

ホットプラグ

システムを使用中に、冗長部分を削除または置換できる機能。「ホット スベア」とも呼ばれます。

マップされた物理メモリアレイ

マップされた物理メモリ配列は物理メモリの区分け方法を指します。たとえば、あるマップ領域に 640 KB があり、別のマップ領域には 1 MB ～ 127 MB ある場合があります。

メモリ

コンピュータには、複数のタイプのメモリ（RAM、ROM、ビデオメモリなど）を搭載できます。「メモリ」という言葉はよく RAM の同義語として使われます。たとえば、「16 MB のメモリのコンピュータ」とは 16 MB RAM 搭載のコンピュータという意味です。

メモリアドレス

コンピュータ RAM 上の、通常16進数で表記される特定の場所。

メモリマネージャ

コンベンショナルメモリ以外のメモリ（拡張メモリや EMS メモリなど）の実装を管理するユーティリティ。

メモリモジュール

DRAMチップを持つ小さな回路基板で、システム基板に接続します。

ユーティリティ

システム資源（メモリ、ディスクドライブ、プリンタなど）を管理するためのプログラム。

読み取り専用ファイル

編集や削除が禁止されているファイル。次のいずれかの条件が満たされる場合、ファイルは読み取り専用になります。

- 1 ファイルの読み取り専用属性が設定されている。
- 1 物理的に書き込みが禁止されているディスク内、または書き込みが禁止されているドライブ内のディスクにファイルが存在する。
- 1 システム管理者がユーザーに読み取り権限だけを付与したネットワークディレクトリ内にファイルが存在する。

リアルモード

80286以降のプロセッサによってサポートされる動作モード。リアルモードは、8086 プロセッサのアーキテクチャをシミュレートする動作モードです。

冷却ユニット

システムシャーシにあるファンまたはその他の冷却デバイス。

リフレッシュレート

モニタ画面上のビデオ画像を、モニタが再描画する速度。画面の水平線が再充電される周期（単位は Hz）。モニタのリフレッシュレートは、「垂直周波数」とも呼ばれます）。リフレッシュレートが高いほど、人間の目にはちらつきが感じられなくなります。このような高いリフレッシュレートはノンインタレースとも呼ばれます。

設定

設定は、コンポーネントに特定の値が検出されたときにどうするかを決定する、管理可能オブジェクトヘルプの条件です。たとえばユーザーは、温度プローブの上限しきい値を摂氏 75 度 に設定できます。プローブがその温度に達すると、ユーザーが介入できるように管理 コンソールに警告が送られます。設定の中には、値に達するとシステムのシャットダウンやシステム損傷を防ぐその他の反応を引き起こすものがあります。

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

omhelp: CLI コマンドのヘルプ

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザズガイド

omhelp コマンドと、それに同等の <コマンド> -? を使用すると、CLI の詳しいヘルプテキストのインタフェースにアクセスします。ヘルプには複数の詳細レベルがあります。

完全修飾された CLI コマンドは、複数の部分で構成されている場合があります。たとえば、コマンド(コマンドレベル 1)、1 つまたは複数のサブコマンド(コマンドレベル 2 とコマンドレベル 3)、1 つまたは複数の「名前=値」ペアなどがあります。

-? (スペース - ダッシュ - 疑問符) をコマンドの後に入力すると、そのコマンドに関するヘルプを表示できます。

ヘルプコマンドの例

omconfig -? と入力すると、omconfig コマンドについてのヘルプが表示されます。このレベルでのヘルプは omconfig で使用できるサブコマンドを一覧表示します。

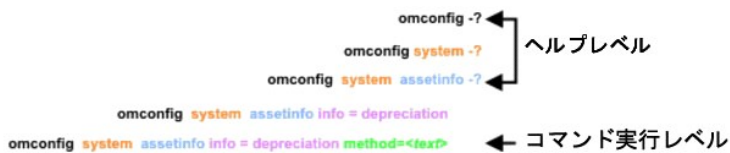
```
1 about
1 preferences
1 chassis
1 system
```

omconfig system -? と入力すると、CLI ヘルプに omconfig system で使用できるすべてのサブコマンドが一覧表示されます。

```
1 alertaction
1 alertlog
1 assetinfo
1 cmdlog
1 esmlog
1 events
1 recovery
1 shutdown
1 thrmshtutdown
1 webserver
```

[図 2-1](#) は、コマンドのヘルプのレベルを示します。

図 2-1. コマンドの各レベルのヘルプ



次のように omconfig system assetinfo コマンドを解析することもできます。

```
<コマンドレベル 1 コマンドレベル 2 コマンドレベル 3> <「名前=値」ペア 1> [「名前=値」ペア 2]
```

コマンドレベル 1、2、3 は omconfig system assetinfo、「名前=値」のペア 1 は info=depreciation、「名前=値」のペア 2 は method=straightline で表します。

減価償却方法を直線に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation method=straightline
```

CLI から次のメッセージが返されます。

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

omconfig system assetinfo -? と入力すると、名前フィールドとオプションフィールドの値の割り当てに関する情報がヘルプに表示されます。omconfig system assetinfo -? 要求の部分的な結果は、次のようになります。

```
assetinfo Set asset information.
```

1つの情報値につき、オプションのパラメータを1つまたは複数、次のように指定します。[表 2-1 info=acquisition](#) のオプションパラメータを表示します。

表 2-1. オプションパラメータ

情報値	オプションパラメータ
Info=acquisition	purchasecost=<数字> waybill=<数字> installdate=<mmddyy> purchasedate=<mmddyy> ponum=<数字> signauth=<テキスト> expensed=<はい\いいえ> costcenter=<テキスト> info=depreciation method=<テキスト> duration=<数字> percent=<パーセント> unit=<月 年 不明>

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

はじめに

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

- [バージョン 5.2 の新機能](#)
- [Windows コマンドプロンプトからの CLI コマンドの使い方](#)
- [主要な CLI コマンド](#)
- [CLI エラーチェックとエラーメッセージ](#)
- [CLI を使ったスクリプトと比較](#)
- [コマンド構文の概要](#)

Dell™ OpenManage™ Server Administrator では、グラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) またはコマンドラインインタフェース (CLI) を使って重要なシステム管理タスクを実行できます。

報告と表示の機能を使うと、ネットワーク上のシステムの正常性を調べることができます。コンポーネントレベルでは、電圧、温度、電流、ファン RPM、メモリ機能、その他多くの重要コンポーネントの詳細が表示されます。概要表示では、システムに関連する所有コスト (COO) の詳細が報告されます。BIOS、ファームウェア、オペレーティングシステムや、インストールされているソフトウェアすべてのバージョン情報も簡単に確認できます。

Server Administrator の設定機能を使うと、以下の項で詳しく説明する主要タスクを実行できます。



メモ: セキュリティに関する不安がある場合は、Server Administrator のホームページの代わりに CLI を使用して、Server Administrator Web サーバーをオフにすることもできます。CLI は Web サーバーを使用しません。omconfig system webserver action=stop コマンドは、Web サーバーを終了する場合に使用します。再起動後、自動的に Web サーバーが起動するので、このコマンドはシステムが起動するたびに発行する必要があります。詳細については、「[omconfig system webserver](#)」を参照してください。

バージョン 5.2 の新機能

- 1 Dell PowerEdge™ 2970 システムのサポートを追加
- 1 Microsoft Windows Server® 2003 シリーズ (x86) (SP2 Web, Standard, および Enterprise editions) のサポートを追加
- 1 Microsoft Windows Server 2003 シリーズ (x86_64) (SP2 Web, Standard, および Enterprise editions) のサポートを追加
- 1 Microsoft Windows® Unified Data Storage Server 2003 (x86_64) のサポートを追加
- 1 Microsoft Windows Server 2003 R2, Datacenter x64 Edition のサポートを追加
- 1 Red Hat® Enterprise Linux® バージョン 5 (x86) および (x86_64) システムのサポートを追加
- 1 Linux オペレーティングシステム用の NIS, Kerberos, LDAP, および Winbind 認証プロトコルのサポートを追加
- 1 **プロセッサ情報** のページに、Intel® および AMD™ のプロセッサの特性についての情報を追加
- 1 **Storage Management** の新しいコマンドを追加: importrecoverforeignconfig
- 1 SNMP Set 操作を設定する omconfig preferences snmp setting コマンドを追加



メモ: Server Administrator では、SNMP Set 操作はデフォルトで無効になっています。

Windows コマンドプロンプトからの CLI コマンドの使い方

Windows オペレーティングシステムを実行中の場合、32 ビットコマンドプロンプトを使用して Server Administrator CLI コマンドを発行します。32 ビットのコマンドプロンプトにアクセスするには、**スタート** ボタンをクリックして **プログラム→アクセサリ→コマンドプロンプト** のショートカットを使用するか、**スタート** ボタンをクリックして **ファイル名を指定して実行** を選択し、**ファイル名を指定して実行** ダイアログボックスに cmd.exe と入力します。

コマンドラインウィンドウを起動する場合、**ファイル名を指定して実行** ダイアログボックスに コマンド を入力しないでください。この操作は、MS-DOS® のエミュレータ **command.com** をアクティブにするので、その環境変数の制限によって CLI に問題が発生する可能性があります。

主要な CLI コマンド

Server Administrator の機能を実行するコマンドを以下に表示します。

- 1 **omconfig**
- 1 **omhelp**
- 1 **omreport**

omconfig コマンドはオブジェクトのプロパティに割り当てる値を書き込みます。コンポーネントの警告しきい値を指定したり、警告やエラーイベントが発生した場合にシステムが実行する操作を指定できます。また、**omconfig** コマンドを使って、システムに関する資産情報パラメータに、システムの購入価格や管理タグ、設置場所などの特定の値を割り当てることもできます。

omhelp コマンドは CLI コマンドの短いテキストヘルプを表示します。**omhelp** は、ヘルプを必要とするコマンドの後に ? を入力する場合と同じです。たとえば、**omreport** コマンドのヘルプを表示する場合、次のどちらかのコマンドを入力します。

```
omhelp omreport
```

```
omreport -?
```

omreport コマンドは、システムの管理情報のレポートを生成します。



 **メモ:** CLI コマンドの概要を見るには、`omhelp` と入力します。

表 1-1 は、Server Administrator が使用するプライマリ CLI コマンドを一覧表示します。このマニュアルでは、主要なコマンドについて各項で説明します。

表 1-1. CLI コマンドとこのマニュアルの項

主要な CLI コマンド	項の見出し	関連する項
omconfig	omconfig Instrumentation Service (計装サービス)を使ったコンポーネントの管理	omconfig system assetinfo: 所有コスト値の編集
omhelp	omhelp: CLI コマンドのヘルプ	
omreport	omreport Instrumentation Service (計装サービス)を使用したシステム状態の表示	omreport rac: Remote Access Controller コンポーネントの参照

 **メモ:** **Omupdate** コマンドは Server Administrator ではサポートされなくなり、Dell Update Package および Server Update Utility のコマンドに置換されました。各種コンポーネントをアップデートするには、Dell Update Packages をダウンロードして、`<パッケージ名> /s [/f]` を実行してください。対応する CLI 構文の詳細については、『Microsoft Windows オペレーティングシステム用 Dell Update Packages ユーザーズガイド』、『Red Hat Enterprise Linux 用 Dell Update Packages ユーザーズガイド』、または『Server Update Utility ユーザーズガイド』を参照してください。

さらに、CLI に関する役立つトピックは以下でも参照できます。

- 1 [CLI コマンド結果の使い方](#)
- 1 [用語集](#)

CLI エラーチェックとエラーメッセージ

CLI はコマンド入力時に、そのコマンドの構文が正しいかどうかを調べます。コマンドを入力してそのコマンドが正常に実行されると、コマンドに成功したというメッセージが表示されます。

成功のメッセージ

omreport コマンドに成功すると、コンポーネントに関するデータが表示されます。このデータが表示されると、コマンドの実行に成功したことになります。

以下に、**omconfig** コマンドの例として、有効な CLI コマンドと、コマンドに成功した場合のメッセージを示します。

コマンド:

```
omconfig chassis temps index=0 warnthresh=default
```

メッセージ:

```
Temperature probe warning threshold value(s) set successfully.
```

(温度プローブの警告しきい値が正常に設定されました。)

コマンド:

```
omconfig chassis biossetup attribute=speaker setting=on
```

メッセージ:

```
BIOS setup configured successfully.
```

(BIOS が正常に設定されました。)

コマンド:

```
omconfig system assetinfo info=depreciation duration=6
```

メッセージ:

```
Asset information set successfully.
```

(資産情報は正常に設定されました。)

失敗のメッセージ

CLI の失敗を知らせるメッセージによって、コマンドに成功しなかった理由がわかります。コマンドに失敗する一般的な理由として、シンタックスエラーや、コンポーネントがないことが挙げられます。多くの場合、エラーメッセージの構文情報を利用して、コマンドを正常に実行できます。

システム構成に存在しないコンポーネントや機能のコマンドを実行しようとすると、コンポーネントが見つからないというエラーメッセージが表示されます。

コマンド:

```
omreport chassis currents
```

メッセージ例:

```
Error! No current probes found on this system.
```

(エラー！システムに電圧プローブが検知されません。)

コマンド:

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=3.3000
```

メッセージ例:

```
Error! Number with up to 3 digits after decimal point expected, read 3.3000
```

(エラー！数字の期待値は小数点以下 3 桁までです。読み取り値: 3.3000)

```
The value given by the command specifies more than 3 digits after the decimal point. A valid minimum warning threshold value for volts contains up to 3 digits after the decimal point.
```

(コマンドで指定された値は、小数点以下 3 桁を超えています。電圧の有効な最小警告しきい値は、小数点以下 3 桁までです。)

次のように入力します。

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=3.3000
```

小数点以下 3 桁を使ってもう一度入力すると、別のエラーメッセージが表示されます。

```
Error! This voltage probe min warning threshold must be between 11.400 and 12.480.
```

(エラー！電圧プローブの最小警告しきい値は 11.400~12.480 でなければなりません。)

変更後のコマンド:

```
omconfig chassis volts index=3 minwarnthresh=11.500
```

メッセージ:

```
Voltage probe warning threshold(s) set successfully.
```

(電圧プローブの警告しきい値は正常に設定されました。)

CLI を使ったスクリプトと比較

システム管理者は Server Administrator CLI を使って、バッチプログラムやオペレーティングシステムに実行させるスクリプトを作成できます。多くのシステムを有する企業では、システム管理者が設定スクリプトを使用して、システムの主要コンポーネントの警告しきい値を指定したり、警告やエラーイベントが発生した場合にシステムに実行させる一連の操作を指定します。最悪の場合は、システム管理者がスクリプトを作成してシステムをシャットダウンすると、被害を防ぐことができます。その後、スクリプトを多数の管理システムに同時に配信して実行することができます。このシナリオでは、会社が大量のシステムを購入した場合でも円滑に設定でき、再設定が必要な既存のシステムに新しいシステム管理ポリシーを実装する場合も容易にできます。

同様のシナリオを使って、新しく購入した多数のシステムに詳細な資産情報を自動入力することも可能です。システムの製造元やリース会社、サポートの外部委託の有無、システムの保険会社名、減価償却方法などの情報の大半は同じです。全システムに共通する変数をスクリプト化し、管理下システムのすべてに送信して実行します。システムに固有の資産情報はグループとしてスクリプト化し、その管理ノードに送信して実行します。たとえば、スクリプトを使うと、所有者、主要ユーザーの電話番号、管理タグなどの固有の変数をすべて指定できます。固有の値を自動入力するためのスクリプトは、システムのコマンドラインから 1 つずつ設定するのではなく、すべての固有変数を一度に設定します。

多くの場合、CLI を使うと非常に明確なタスクを視野に入れたユーザーシステム情報をすばやく取得できます。CLI は、システムコンポーネントすべての包括的な概要を確認したい場合や、その情報を今後のシステム状態と比較する目的でファイルに保存する場合に理想的です。

CLI コマンドを使うと、システム管理者はバッチプログラムやスクリプトを作成して、特定の時間に実行することができます。このようなプログラムが実行されると、システム高使用時とシステム最低使用時のファン RPM の比較など、特定コンポーネントに関するレポートをキャプチャできます。コマンド結果はファイルに転送しておく、後で分析できます。システム管理者は、レポートを利用して、使用パターンを調整したり、新規システムリソースの購入を正当化したり、問題のあるコンポーネントの状態を監視するための情報を入手できます。

コマンド構文の概要

コマンドの複雑性はさまざまです。最も単純なコマンドは、コマンドレベルが 1 だけです。たとえば、**omhelp** コマンドは単純なコマンドです。omhelp と入力すると、主要 CLI コマンドのリストが表示されます。

次に複雑なコマンドレベルには、コマンドレベルの 1 と 2 があります。**about** コマンドはすべてコマンドレベル 2 の複雑性を表します。**omconfig about** および **omreport about** のコマンドは概要を表示します。概要には、システムにインストールされているシステム管理ソフトウェアのバージョン情報 (たとえば Server Administrator 1.x) が表示されます。

一部のコマンドには、コマンドレベル 1 とコマンドレベル 2 があり、「名前=値」のペアがあります。次のコマンドは、Server Administrator の環境詳細に関して Server Administrator を指令している例です。

```
omdiag about details=true
```

コマンドレベル 1 が **omreport**、コマンドレベル 2 は **about** で、「名前=値」のペアは **details=true** です。

多くのコマンドではコマンドレベル 1、コマンドレベル 2、およびコマンドレベル 3 を使いますが、任意のパラメータ(「名前=値」のペア)を必要としません。omreport コマンドはこのタイプに属します。たとえば以下ようになります。

```
omreport system alertaction
```

上の例では、システムのコンポーネントに設定されている警告処置のリストが表示されます。

最も複雑なコマンドには 3 つのコマンドレベルがあり、複数の「名前=値」のペアを持つことができます。2 つの「名前=値」ペアの例を次に示します。

```
omconfig system assetinfo info=depreciation duration=3
```

9 つの「名前=値」ペアの例を次に示します。

```
omconfig system assetinfo info=acquisition
purchasecost=<n> waybill=<n> installdate=<mmddyy> purchasedate=<mmddyy> ponum=<n> signauth=<テキスト>
expensed=<yes | no> costcenter=<テキスト>
```

各セクションでは、コマンド構文とコマンドに関する他の情報は、以下の該当フィールドを使用してフォーマットされます。

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	「名前=値」のペア 1	「名前=値」のペア 2
-----------	-----------	-----------	-------------	-------------

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

omreport: Instrumentation Service (計装サービス)を使用したシステム状態の表示

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザズガイド

- [パラメータ表の規則](#)
- [omreport コマンドの概要](#)
- [omreport コマンドのヘルプ](#)
- [omreport about](#)
- [omreport chassis コマンド](#)
- [omreport system のコマンド](#)

omreport コマンドを使用すると、システムコンポーネントの詳細が表示されます。一度に多数のシステムコンポーネントの概要を取得したり、特定のコンポーネントの詳細を取得することができます。この章では必要な詳細レベルを備えたレポートの取得方法について説明します。

この章に記述したコマンドは、特定 omreport コマンドの結果に表示されるフィールドを定義するかどうかで異なります。フィールドは特別な用法、あまり知られていない用法がある場合にのみ定義されています。

他のすべてのコンポーネントについては、omreport を使ってコンポーネントの状態を表示し、omconfig を使ってコンポーネントを管理できます。管理するコンポーネントの設定方法については、「[omconfig Instrumentation Service \(計装サービス\)を使ったコンポーネントの管理](#)」を参照してください。

omreport コマンドは、omconfig コマンドの実行に必要な情報を得るために使用できる場合があります。たとえば、温度プローブの警告イベントの最低温度を編集する場合は、設定するプローブのインデックスを知っておく必要があります。そのような場合は、omreport chassis temps を使って、プローブの一覧とそのインデックスを表示することができます。

パラメータ表の規則

コマンドに使えるパラメータをリストにする場合、パラメータはコマンドラインインタフェースに表示される順ではなくアルファベット順に並んでいます。

記号「|」は「パイプ」と呼ばれることがあり、「排他的論理和」または「演算子」を表します。たとえば、「有効 | 無効」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

omreport コマンドの概要

メモ: この章では、可能なすべての omreport コマンドを一覧にしますが、お使いのシステムで使用できるコマンドはシステム構成によって異なります。omreport コマンドの結果の表示は、システムによって異なります。インストールされているコンポーネントのみのデータが表示されます。

メモ: システムに外部シャーシがある場合、表示される結果はオペレーティングシステムによって異なります。SUSE® Linux Enterprise Server および Red Hat® Enterprise Linux® のシステムでは、omreport コマンドは、メインシャーシ情報の後の別の項に外部シャーシ情報を表示します。Microsoft® Windows® システムの場合は、外部シャーシのデータは omreport 出力には表示されません。

[表 3-1](#) は omreport コマンドの高レベルの概要です。「コマンドレベル 1」列には、一般的な omreport コマンドを示します。「コマンドレベル 2」列には、omreport を使って表示できる主要オブジェクトやコンポーネント(バージョン情報、シャーシ、ストレージ、システム、および RAC)を示します。「コマンドレベル 3」列には、レポートを表示できる特定のオブジェクトとコンポーネントを一覧にします。「ユーザー特権が必要」とはコマンドの実行に必要な特権の種類を表します(U=ユーザー、P=パワーユーザー、A=システム管理者)。「用途」は omreport を使って実行される操作に関する一般的な説明です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

[表 3-1](#) は、「バージョン情報」、「システム」、および「メインシステムシャーシ」に使用可能な omreport コマンドを示しています。ストレージコンポーネントの表示については、「[omreport: Instrumentation Service \(計装サービス\)を使用したシステム状態の表示](#)」を参照してください。

表 3-1. omreport コマンドレベル 1、2、3

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	必要なユーザー権限	用途
omreport				
	about		U、P、A	Server Administrator プログラムのバージョン番号とプロパティを表示します。
		details=true	U、P、A	インストールされている全ての Server Administrator プログラムの情報を表示します。
	chassis		U、P、A	メインコンポーネントすべての一般的な状態を表示します。
		acswitch	U、P、A	冗長 AC 電力線がシステムでサポートされているフェールオーバー設定を表示します。
		batteries	U、P、A	バッテリーのプロパティ設定を表示します。
		bios	U、P、A	製造元、バージョン、および最後にアップデートされた日付など BIOS 関連情報を表示します。
		biossetup	A	システム起動中に設定された BIOS 設定プロパティを表示します。
		bmc	U、P、A	リモートアクセスの一般情報を表示します。
				メモ: このサブコマンドは、今後のリリースで段階的に廃止されます。将来は remoteaccess サブコマンドに置き換えられます。

currents	U, P, A	システム電流センサーの状態としきい値を表示します。
fancontrol	U, P, A	ファン速度のプロパティ設定を表示します。
fans	U, P, A	システムファンの状態としきい値を表示します。
firmware	U, P, A	バージョン、最終更新日、アップデート可能性などのファームウェアのプロパティを表示します。
frontpanel	U, P, A	電源ボタンやマスク不可能割り込み (NMI) ボタン (システムに存在する場合) などのフロントパネルボタン設定が有効になっているか無効になっているかを表示します。
fru	U, P, A	フィールドで交換可能なパーツ (FRU) の情報を表示します。
info	U, P, A	メインシステムのシャーシコンポーネントの状態の概要を表示します。
intrusion	U, P, A	システムのイントルージョンセンサーの状態を表示します。
leds	U, P, A	色々な警告状況に従って LED が点滅するように設定したプロパティを表示します。
memory	U, P, A	システムのメモリ配列のプロパティを表示します。
nics	U, P, A	システムにインストールされている NIC の数、NIC ベンダー、NIC の説明、IP アドレス、接続状態などを表示します。
ports	U, P, A	I/O アドレス、IRQ レベル、コネクタの種類、最大速度など、システムのパラレルポートとシリアルポートのプロパティを表示します。
processors	U, P, A	速度、製造元、プロセッサファミリなど、システムのプロセッサのプロパティを表示します。
pwrsupplies	U, P, A	電源装置のプロパティを表示します。
remoteaccess	U, P, A	リモートアクセスの一般情報を表示します。
slots	U, P, A	システムの拡張スロットやその他のスロットタイプのプロパティを表示します。
temps	U, P, A	システムの温度センサーの状態としきい値を表示します。
volts	U, P, A	システムの電圧センサーの状態としきい値を表示します。
storage	U, P, A	「Storage Management Service (ストレージ管理サービス) の使い方」 を参照してください。
system	U, P, A	システムコンポーネントの高レベルな概要を表示します。
alertaction	U, P, A	警告と失敗のしきい値、および必要不可欠なコンポーネントが警告や失敗状況を検出した場合に設定されている処置を表示します。
alertlog	U, P, A	システム管理者がアラートログを表示できます。
assetinfo	U, P, A	システムの所有コスト情報を表示します。
cmdlog	U, P, A	システム管理者がコマンドログをクリアできます。
esmlog	U, P, A	システム管理者がハードウェアログを表示できます。
events	U, P, A	システムの Simple Network Management Protocol (SNMP) イベント設定を表示します。
operatingsystem	U, P, A	オペレーティングシステム名とバージョンを表示します。
pedestinations	U, P, A	プラットフォームイベント警告に対して設定された送信先を表示します。
platformevents	U, P, A	リストの各プラットフォームイベントについてシステムの反応を表示します。
recovery	P, A	ハング状態にあるオペレーティングシステムにシステムが応答する方法の設定を表示します。
shutdown	P, A	シャットダウン操作の実行方法を表示します。
summary	U, P, A	メインシステムシャーシ、ソフトウェア、ストレージなど、すべてのシステムコンポーネントの鍵となる事実を表示します。
thrmshutdown	P, A	温度警告または失敗の状態が検出された場合に、実行されるシャットダウン操作を表示します。
version	U, P, A	システム上のアップデート可能なコンポーネントすべての概要を表示します。
rac	U, P, A	「omreport rac: Remote Access Controller コンポーネントの参照」 を参照してください。

omreport コマンドのヘルプ

omreport -? コマンドを使用すると、omreport に使用可能なコマンドの一覧が表示されます。

omreport <コマンドレベル 2> -? を使って レベル 2 のコマンドのバージョン情報、シャーシ、およびシステムのヘルプを表示します。omreport system -? に関する次の情報は、omreport chassis コマンドのヘルプの表示にも適用されます。

omreport システムの有効なコマンドを一覧にするには、次のように入力します。

```
omreport system -? | more
```


omreport about

omreport about コマンドを使用すると、システムにインストールされているシステム管理アプリケーションの製品名とバージョン番号を確認できます。以下は、omreport about コマンドの出力例です。

```
Product name : Dell OpenManage Server Administrator
Version      : 5.x.x
Copyright    : Copyright (C) Dell Inc. 1995-2006. All rights reserved.
Company      : Dell Inc.
```

Server Administrator 環境に関する詳細を知るには、以下のように入力します。

```
omdiag about details=true
```

Server Administrator には多くのサービスが含まれており、それぞれ独自のバージョン番号を持っています。内容 フィールドはサービスのバージョン番号やその他の役立つ詳細を報告します。以下の出力はその例です。システムにインストールされている Server Administrator の設定とバージョンによって出力が異なる場合があります。

```
Contains: Instrumentation Service 5.x.x
          Storage Management Service 3.x.x
          Sun JRE - OEM Installed Version 3.x.x
          Secure Port Server 1.x.x
          Core Service 1.x.x
          Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
          Storage Management Service Integration Layer 1.x.x
          Server Administrator 5.x.x
```

omreport chassis コマンド



omreport chassis コマンドを使用すると、シャーシ全体または特定のコンポーネントの詳細が表示されます。

omreport chassis

以下のように入力します。

```
omreport chassis
```

メインシステムのシャーシコンポーネントの一般的な状態が表示されます。

-  **メモ:** モジュラシステムのサーバモジュールに CLI コマンドを実行すると、シャーシはサーバモジュールのみを参照します。
-  **メモ:** このマニュアルで使用するすべての出力例と同様に、以下は 1 例にすぎず、実際の出力はシステム構成によって異なります。

```
SEVERITY : COMPONENT
Ok       : Fans
Critical : Intrusion
Ok       : Memory
Ok       : Power Supplies
Ok       : Temperatures
Ok       : Voltages
```

omreport chassis acswitch

フェールオーバー設定された冗長電 AC 電力線がシステムに含まれる場合は、omreport chassis acswitch コマンドを使用します。以下のように入力します。

```
omreport chassis acswitch
```

次のように出力されます。

```
AC Failover SwitchAC Switch Redundancy
Redundancy Status                : Full
Number of devices required for full redundancy : 2
Redundancy Mode                  :
Redundancy Configuration        : Input Source Line 1, upon redundancy restoration, return to Line 1
AC Power Lines
Status                           : Ok
Location                         : AC Power Line 1
```

```

AC Present                : Power Present
Active Source             : Active
Status                   : Ok
Location                 : AC Power Line 2
AC Present               : Power Present
Active Source            : Not Active

```

Server Administrator で **冗長性状態** と **冗長性モード** フィールドの値が報告されます。

omreport chassis batteries

omreport chassis batteries コマンドを使用すると、バッテリーのプロパティが表示されます。

omreport chassis bios

omreport chassis bios コマンドを使用すると、現在のBIOS 情報が表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis bios
```

システムの BIOS 情報の概要が表示されます。

omreport chassis biossetup

omreport chassis biossetup コマンドを使用すると、通常はシステム起動時にのみ使用可能な BIOS セットアップパラメータが表示されます。

次のように入力します。

```
omreport chassis biossetup
```

[表 3-2](#) 使用できる BIOS 設定パラメータを表示します。



 **メモ:** すべてのパラメータが表示されるとは限りません。システムブート中に設定された BIOS 設定プロパティのみが表示されます。

表 3-2. BIOS 設定パラメータ

パラメータ	説明
Bezel	システムリブート中にベゼルの削除イントルージョンが有効または無効になっているかを表示します。
Bootsequence	システムのブートに使用するデバイスを表示します。
Console Redirection	BIOS 画面が特定のシリアルポートにリダイレクト、またはオフになっているかを表示します。
Console Redirection After Boot	システム起動後のコンソールリダイレクトが有効か無効かを表示します。
Diskette	ディスクケットが無効、自動有効、または読み取り専用になっているかを表示します。
Demand Based Power Management (DBS)	DBS がシステムで有効または無効になっているかを表示します。
Dual NIC	PXE が付いた NIC 1 および NIC 2 が有効または無効になっているかを表示します。
External Serial Connector	外部シリアルコネクタが COM ポート 1、COM ポート 2、リモートアクセスデバイスのうち、どれにマップされているかを表示します。
Console Redirection Failsafe Baud Rate	コンソールリダイレクト Failsafe ポーレートの設定を表示します。
IDE	ドライブが有効または無効になっているかを表示します。
IDE Primary Drive 0	デバイスが自動検知され有効になっている、または無効になっているかを表示します。
IDE Primary Drive 1	デバイスが自動検知され有効になっている、または無効になっているかを表示します。
Intrusion	システムブート中にベゼルの削除イントルージョンが有効または無効になっているかを表示します。
Mouse	マウスが有効または無効になっているかを表示します。
NIC 1	システムブート中に(PXE の有無に関わらず)最初の NIC が有効になっている、または無効になっているかを表示します。
NIC 2	システムブート中に(PXE の有無に関わらず)2番目の NIC が有効になっている、または無効になっているかを表示します。
Numlock	キーボードを数字キーとして使用できるかどうかを表示します。
Parallel port address	アドレスが LPT1、LPT2、LPT3 に存在するか、または無効になっているかを表示します。
Parallel port mode	パラレルポートに関連した設定を表示します。
Primary SCSI	デバイスがオンまたはオフになっているかを表示します。
RAID on motherboard	オンボード RAID が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されている、またはデバイスがシステムブート中に無効になっているかを表示します。
RAID Channel A	オンボード RAID チャンネル A が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されているかを表示します。

RAID Channel B	オンボード RAID チャンネル B が RAID デバイスまたは SCSI デバイスとして検知されているかを表示します。
SATA	オンボード SATA コントローラが ATA モード、RAID モード、または無効かどうかを表示します。
SATA port	SATA ポートが有効または無効を表示します。
Secondary SCSI	デバイスが有効または無効になっているかを表示します。
Serial Communications	COMポート 1 と COMポート 2 が有効か無効か、またコンソールリダイレクトの有無を表示します。
Serial Port 1	シリアルポート 1 が COM ポート、COM ポート 1、COM ポート 3、COM1 BMC、BMC シリアル、BMC NIC、BMC RAC にマップされている、または無効かを表示します。
Serial Port 2	シリアルポート 2 が COM ポート、COM ポート 2、COM ポート 4 にマップされている、または無効かを表示します。
Speaker	スピーカーがオンまたはオフになっているかを表示します。
USB or USBB	USB ポートが有効または無効になっているかを表示します。
User accessible USB	ユーザーアクセス可能 USB ポートが有効または無効になっているかを表示します。

omreport chassis bmc

 **メモ:** このコマンドは、今後のリリースで段階的に廃止されます。これは、将来 `omreport chassis remoteaccess` コマンドに置き換えられます。

`omreport chassis bmc` コマンドを使用してベースボード管理コントローラ(BMC)一般情報を表示します。

次のように入力します。

```
omreport chassis bmc
```

`omreport chassis bmc` コマンドからの出力には、有効なパラメータの一覧が表示されます。表 3-3 に、使用可能な設定を示します。

表 3-3. omreport chassis bmc

「名前=値」のペア	説明
config=advsol	ローカルエリアネットワーク(LAN)接続におけるシリアルの詳細 BMC 情報を報告します。
config=nic	LAN の BMC 情報を報告します。
config=serial	BMC のシリアルポート情報を報告します。
config=serialoverlan	LAN 接続でのシリアルの BMC 情報を報告します。
config=terminalmode	シリアルポートのターミナルモード設定を報告します。
config=user	BMC ユーザーに関する情報を報告します。

omreport chassis currents

`omreport chassis currents` コマンドを使って、電流(アンペア)プローブの状態と設定値を表示します。以下のように入力します。

```
omreport chassis currents index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合、Server Administrator はシステムにあるすべての電流プローブ用に設定された状態、読み取り値、およびしきい値の概要を表示します。インデックスを指定する場合は、Server Administrator は特定の電流プローブの概要を表示します。

omreport chassis fans

`omreport chassis fans` コマンドを使用すると、ファンプローブの状態と設定が表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis fans index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムに存在する可能性のあるファンプローブに設定されている状態、読み取り値、しきい値の概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のファンプローブの概要が表示されます。

omreport chassis fancontrol

`omreport chassis fancontrol` コマンドを使用すると、システムのファン速度の設定方法が表示されます。ファン速度は、冷却または静かな操作に最適化して設定できます。表 3-4 に、使用可能な設定を示します。

表 3-4. ファンコントロール 設定

「名前=値」のペア	説明
-----------	----

speed=quiet	音が小さくなるようにファン速度を設定します。
speed=maxcool	冷却が最大化されるようにファン速度を設定します。

omreport chassis firmware

omreport chassis firmware コマンドを使用すると、現行のファームウェアのプロパティが表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis firmware
```

Server Administrator はシステムのファームウェアのプロパティの概要を表示します。

omreport chassis frontpanel

omreport chassis frontpanel コマンドを使用すると、電源ボタンやマスク不可能割り込み (NMI) (システムに存在する場合) などのフロントパネルボタンの制御設定が有効か無効かを確認できます。

お使いのシステムに電源ボタンの上書きが存在する場合に、電源ボタン 上書きが有効かどうかを確認できます。有効になっていると、電源ボタンはシステムの電源を**オン**および**オフ**に切り替えます。

システムに NMI ボタンが存在する場合に、NMI ボタンが有効かどうか確認できます。NMI ボタンは一部のオペレーティングシステムでは、ソフトウェアとデバイスのエラーのトラブルシューティングに利用できます。

omreport chassis fru

omreport chassis fru コマンドを使用すると、フィールドで交換可能ユニット (FRU) の情報が表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis fru
```

Server Administrator でシステムの FRU 情報の要約が表示されます。この情報は Server Administrator GUI、SNMP、Common Information Model を経由して入手でき、主にトラブルシューティングアクティビティのサポートに使用します。

omreport chassis info

omreport chassis info コマンドを使用すると、インストールされているコンポーネントのバージョンの概要が表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis info index=n
```

index パラメータはシャーシ番号を指定し、オプションになっています。インデックスを指定しない場合は、各シャーシの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のシャーシの概要が表示されます。

設定にもよりますが、出力は以下の例のようになります。

```
Index : 0
Chassis Name : Main System Chassis
Host Name : everglades
Baseboard Management Controller Version : 1.80
Primary Backplane Version : 1.01
Sensor Data Record Version : SDR Version 0.33
Chassis Model : PowerEdge 1750
Chassis Lock : Present
Chassis Service Tag : 8RLNB1S
Chassis Asset Tag :
Flash chassis indentify LED state : Off
Flash chassis indentify LED timeout value : 300
```

このコマンドを PowerEdge 1655MC システムで実行すると、次の追加情報が表示されます。

- 1 **サーバモジュールサービスタグ** - 現在ログインしているサーバモジュールのサービスタグ (シャーシサービスタグのフィールドは、お使いの PowerEdge 1655MC システムシャーシのサービスタグを示しています。)
- 1 **サーバモジュール管理タグ** - 現在ログインしているサーバモジュールの管理タグ
- 1 **サーバモジュールの場所** - PowerEdge 1655MC システムシャーシで、場所を示すためにサーバモジュールに割り当てられた番号

omreport chassis intrusion

omreport chassis intrusion コマンドを使用すると、システムのカバーが開いているかどうかを確認できます。イントルージョンは、システムのコンポーネントを盗んだり、システムを無断で保守しようとする者がいる可能性を示している場合があるため、Server Administrator ではシャーンイントルージョンを記録します。次のように入力します。

```
omreport chassis intrusion
```

次のようなメッセージが表示されることがあります。

```
Status      : Ok

Probe Name  : Main chassis intrusion

State       : Chassis is closed

(Status    : OK

プローブ名 : メインシャーンイントルージョン

状況       : シャーンは閉じています)
```

omreport chassis leds

omreport chassis leds コマンドを使用すると、ハードドライブフォルトのクリアがサポートされているかどうかと、どの重大度レベルで LED が点滅するかを確認できます。次のように入力します。

```
omreport chassis leds index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、シャーン 0 の LED 情報の概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のシャーンの概要が表示されます。

次に出力例を示します。

```
Flash chassis indentify LED state      : Off

Flash chassis indentify LED timeout value : 300
```

omreport chassis memory

omreport chassis memory を使用すると、システムの名メモリモジュールスロットの詳細が表示されます。システムが冗長メモリをサポートしている場合は、システムに実装されているメモリ冗長のステータス、状態、種類も表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis memory index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムのすべてのメモリ情報が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のメモリモジュールの概要が表示されます。

以下は、使用中のメモリスロットの出力例です。

```
Index      : 1
Status     : OK
Connector Name : DIMM_B
Type       : SDRAM-SYNCHRONOUS
Size       : 256 MB
```

使用されていないメモリスロットには、まだコネクタ名が付いています。以下は、使用されていないメモリスロットの出力例です。

```
Index      : 2
Status     : Unknown
Connector Name : DIMM_D
Type       : Not Occupied
Size       : Unknown
```

システムが冗長メモリをサポートしている場合は、冗長出力が次のように表示されます。

```
Memory Redundancy
Redundancy Status      : Full
Fail Over State        : Inactive
Redundancy Configuration : SpareBank
Attributes              : Location
Memory Array 1         : Proprietary Add-on Card
Attributes              : Use
Memory Array 1         : Unknown
Attributes              : Installed Capacity
Memory Array 1         : 1536 MB
Attributes              : Maximum Capacity
Memory Array 1         : 12288 MB
Attributes              : Slots Available
Memory Array 1         : 12
```

omreport chassis nics

omreport chassis nics コマンドを使用すると、NIC のプロパティが表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis nics index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムのすべての NICS に関するプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定の NIC のプロパティが表示されます。

次のフィールドに対して値が表示されます。**インデックス** (NIC カードの数)、**IP アドレス**、**ベンダー**、**説明**、および**接続状態**。

omreport chassis ports

omreport chassis ports コマンドを使用すると、システムのパラレルポートとシリアルポートのプロパティが表示されます。

次のフィールドに対して値が表示されます。**ポートタイプ**、**外部名**、**ベース I/O アドレス**、**IRQ レベル**、**コネクタ種類**、および**最大速度**。

ポートのの種類 は各システムポート種類の詳細で、シリアル、パラレル、USB などのポートや、ポインティングデバイス、キーボードなどポートに接続されるデバイス種類ごとのポート名が示されます。

外部名 はシリアルまたはパラレル、USB、マウス、キーボードなどのポート名です。

ベース I/O アドレス は 16 進数で表される開始 I/O アドレスです。

IRQ レベル はシステムのハードウェア割り込みです。ハードウェア割り込みはイベントがモデムまたはプリンタのような周辺機器で開始または終了したことをシステムの CPU に通知します。周辺機器内部接続カードで通信する場合、IRQ レベルは、割り込み要求を送信しているデバイスの種類を識別する一般的な方法です。

コネクタタイプ はプラグまたはケーブルの種類と 2 つのデバイスを接続するプラグを指し、この場合は外付けデバイスをシステムに取り付けられるコネクタの種類を指します。コネクタタイプは数多く、それぞれ異なる種類をシステムに接続するように設計されています。例としては DB-9 Male、AT、アクセス バス、PS/2 などが挙げられます。

最大速度 はポート速度です。ポート速度は入力/出力 チャンネルのデータ転送レートを指し、1 秒あたりのビット数で測定されます。通常、シリアルポートの最大速度は 115Kbps で、USB バージョン 1.x ポートの最大速度は 12 Kbps です。

omreport chassis processors

omreport chassis processors コマンドを使用すると、システムプロセッサのプロパティが表示されます。

次のフィールドに対して値が表示されます。**コネクタ名**、**メーカー**、**プロセッサファミリ**、**プロセッサバージョン**、**現在の速度**、**外部クロック速度**、**状況**。

コネクタ名 はシステムのプロセッサ スロットを占有するデバイス名またはデバイス番号を指します。

メーカー はプロセッサを販売する企業団体を指します。

プロセッサ シリーズ は、メーカーが製造した Intel® Itanium® または Pentium® III または AMD Opteron™ などのプロセッサのタイプを指します。

プロセッサバージョン はプロセッサのモデルとステップング番号を指します。

現在の速度 はシステム起動時の実際のプロセッサの速度を MHz で表したものです。

外部クロック速度 はプロセッサの外部クロック速度を MHz で表したものです。

状況 はプロセッサスロットが有効か無効かを示します。

コアカウント は 1 つのチップに内蔵されたプロセッサ数を表したものです。

特定のプロセッサの機能とキャッシュプロパティ

特定のコネクタ上のプロセッサのキャッシュプロパティを調べるには、次のように入力します。

```
omreport chassis processors index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、すべてのプロセッサのプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のプロセッサのプロパティが表示されます。

特定のマイクロプロセッサ上の機能には、以下のフィールドが定義されます。

Intel プロセッサ

- 1 64 ビットサポート
- 1 Hyperthreading (HT)
- 1 Virtualization Technology (VT)
- 1 Demand-Based Switching (DBS)
- 1 Execute Disable (XD)

AMD™ プロセッサ

- 1 64 ビットサポート
- 1 AMD-V™
- 1 AMD PowerNow!™
- 1 No Execute (NX)

特定のマイクロプロセッサ上のキャッシュには、以下のフィールドが定義されます。そのキャッシュがプロセッサの内部にある場合、キャッシュレポートにフィールドは表示されません。

- 1 速度
- 1 キャッシュデバイスがサポートしている種類
- 1 キャッシュデバイス現在の種類
- 1 外部ソケット名

特定プロセッサ上のキャッシュごとに報告されるフィールド

状態 は、そのプロセッサ上のキャッシュの状態が有効か無効かを報告します。

レベル は、それが 1 次キャッシュか 2 次キャッシュかを示します。1 次キャッシュは、プロセッサに内蔵されたメモリバンクです。2 次キャッシュは、1 次キャッシュに転送されるデータのステージ領域です。2 次キャッシュは、プロセッサ内に内蔵される場合とプロセッサ外部のメモリチップに搭載される場合があります。内部プロセッサキャッシュはレベル 1 (または L1) と呼びます。L2 キャッシュは Intel Pentium プロセッサ システムの外部キャッシュで、2 次的にアクセスされるキャッシュです。L1 または L2 という呼び名は、そのキャッシュの物理的な場所 (内部または外部) を示すものではなく、どちらのキャッシュが最初にアクセスされるかを示しています (L1、つまり内部)。

速度 はキャッシュがメインメモリからプロセッサへデータを転送するときの速度レートを示します。

最大サイズ はそのキャッシュの最大メモリ容量を KB で表します。

インストールサイズ はそのキャッシュの実サイズです。

種類 はそれが 1 次キャッシュか 2 次キャッシュかを示します。

場所 はプロセッサ上、またはプロセッサ外のチップセット上のキャッシュの場所です。

書き込みポリシー はキャッシュの書き込みサイクル方法を示します。書き戻しポリシーでは、キャッシュはバッファとして機能します。プロセッサが書き込みサイクルを開始すると、キャッシュはデータを受け取ってサイクルを停止します。その後、システムバスが利用可能になると、キャッシュはそのデータをメインメモリに書き戻します。

ライトスルーポリシーでは、プロセッサがキャッシュ経由でメインメモリに書き込みます。データがメインメモリに格納されるまで書き込みサイクルは完了しません。

結合性 はメインメモリの内容をキャッシュに格納するときの方法を示します。

- 1 フルアソシエーティブキャッシュ方式では、メインメモリのラインはキャッシュのどの場所にも格納できます。
- 1 4 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 4 ラインをキャッシュ内の同一の 4 ラインに直接マップします。
- 1 3 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 3 ラインをキャッシュ内の同一の 3 ラインに直接マップします。
- 1 2 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定の 2 ラインをキャッシュ内の同一の 2 ラインに直接マップします。
- 1 1 ウェイセットアソシエーティブキャッシュ方式では、メモリ内の特定ラインをキャッシュ内の同一ラインに直接マップします。

たとえば、メモリ内のページのライン 0 はキャッシュメモリ内のライン 0 に格納されます。

キャッシュデバイス対応の種類 は、そのデバイスがサポートできる SRAM (Static Random Access Memory) の種類を示します。

キャッシュデバイス現在の種類 は、現在搭載済みで、そのキャッシュがサポートしている SRAM の種類を示します。

外部ソケットシルクスクリン名 は、ソケットの隣りのシステムボードに刻印される名前です。

エラー修正の種類 は、このメモリで実行される ECC (エラー検査と訂正) の種類を示します。たとえば、訂正可能な ECC または訂正不可能な ECC が挙げられます。

この報告には、マイクロプロセッサ上に存在する各キャッシュ情報が示されます。

omreport chassis pwrsupplies


omreport chassis pwrsupplies コマンドを使用すると、システムの電源装置のプロパティが表示されます。次のように入力します。

```
omreport chassis pwrsupplies index=n
```

index パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムのすべての電源装置のプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のプロセッサのプロパティが表示されます。

システムの各電源装置については、次のフィールドの値が表示されます。**状態**、**場所**、**種類**、**最大ワット数**、**オンライン状況**。

omreport chassis remoteaccess

 **メモ:** このコマンドは、Dell PowerEdge x8xx および x9xx のシステムにのみ適用可能です。

DRAC がインストールされている場合に `omreport chassis remoteaccess` コマンドを使用すると、ベースボード管理コントローラ (BMC) とリモートアクセスコントローラ (RAC) の一般情報が表示されます。

次のように入力します。

```
omreport chassis remoteaccess
```

`omreport chassis remoteaccess` コマンドからの出力には、有効なパラメータの一覧が表示されます。表 3-5 に、使用可能な設定を示します。

表 3-5. `omreport chassis remoteaccess`

「名前=値」のペア	説明
<code>config=advsol</code>	ローカルエリアネットワーク (LAN) 接続におけるシリアルの詳細 BMC または RAC の情報を報告します。
<code>config=nic</code>	LAN の BMC または RAC の情報を報告します。
<code>config=serial</code>	BMC または RAC のシリアルポート情報を報告します。
<code>config=serialoverlan</code>	シリアルオーバー LAN 接続の BMC または RAC の情報を報告します。
<code>config=terminalmode</code>	シリアルポートのターミナルモード設定を報告します。
<code>config=user</code>	BMC または RAC ユーザーの情報を報告します。

omreport chassis slots

`omreport chassis slots` コマンドを使用すると、システムのスロットのプロパティが表示されます。

次のように入力します。

```
omreport chassis slots index=n
```

`index` パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムのすべてのスロットのプロパティが表示されます。インデックスを指定する場合は、特定のスロットのプロパティが表示されます。

システムの各スロットについては、**インデックス**、**スロット ID**、**アダプタ**、**データベースの幅** フィールドの値が表示されます。

インデックス はシステムのスロット番号です。

スロット ID は、スロットの隣のシステムのマザーボードに印刷されたシルクスクリーン名です。英数字テキストはシステムの各スロットを独自に識別します。

アダプタ はスロットに合ったカード名とタイプを指し、たとえばストレージ配列コントローラ、SCSI アダプタ、HBA などが含まれます。

データベースの幅 は、システムのコンポーネント間の情報経路の幅をビットで表したものです。データベースの幅の範囲は 16~64 ビットです。

omreport chassis temps

`omreport chassis temps` コマンドを使用すると、システムの温度プローブのプロパティが表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis temps index=n
```

`index` パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムにある可能性のある温度プローブ用に設定された状態、読み取り値、しきい値などの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定の温度プローブの概要が表示されます。

omreport chassis volts

`omreport chassis volts` コマンドを使用すると、システムの電圧プローブのプロパティが表示されます。以下のように入力します。

```
omreport chassis volts index=n
```

`index` パラメータはオプションです。インデックスを指定しない場合は、システムにある可能性のある電圧プローブ用に設定された状態、読み取り値、しきい値などの概要が表示されます。インデックスを指定する場合は、特定の電圧プローブの概要が表示されます。

omreport system のコマンド

`omreport system` コマンドを使用すると、ログを表示したり、シャットダウン操作の設定方法を確認したり、しきい値、所有権情報のコスト、回復処置などの設定方法に関する情報が表示されます。


omreport system

omreport system コマンドを使用すると、システムコンポーネントの一般的な状態が表示されます。**omreport system shutdown** のようなレベル 3 のコマンドを指定すると、**omreport system** で取得する高レベルの状態ではなく、1 つのシステム コンポーネントの詳細情報を取得できます。

次のように入力します。

```
omreport system
```


システムに、メインシステムシャーシと直接接続している 最低 1 つのストレージデバイスの両方がある場合は、以下の例に示すような概要が表示されます。

 **メモ:** このマニュアルで使用するための出力例と同様に、以下は 1 例にすぎず、実際の出力はシステム構成によって異なります。

```
SEVERITY : COMPONENT
Ok       : Main System Chassis
Critical : Storage
```

ログ表示のコマンド

omreport system コマンドを使用すると、ログが表示されます。表示できるログには、警告ログ、コマンドログ、ハードウェアまたは ESM ログがあります。

 **メモ:** 警告ログまたはコマンドログで無効な XML データ (選択対象で生成された XML データがうまくできていなかった場合など)、"omconfig system alertlog action=clear" または "omconfig system cmdlog action=clear" とタイプしてログをクリアすると問題を解決できます。今後のためにログ情報を保管しておきたい場合は、ログをクリアする前にログのコピーを保存しておくといでしょう。ログのクリアの詳細については、「[ログをクリアするコマンド](#)」を参照してください。

アラートログの内容を表示するには、次のように入力します。

```
omreport system alertlog
```

コマンドログのコンテンツを表示するには、次のように入力します。

```
omreport system cmdlog
```

ESM ログのコンテンツを表示するには、次のように入力します。

```
omreport system esmlog
```

ESM ログ総合正常性状態

omreport system esmlog と入力すると、組み込みシステム管理報告 (ESM) が表示されます。報告の 1 行目はシステムハードウェアの総合的な正常性を反映しています。たとえば、正常性:OK となっていたら、esmlog 割り当てスペースにおけるメッセージの占有率がまだ 80 % 未満という意味です。これが 80 % 以上になると、次の警告が表示されます。

```
Health: Non-Critical
(正常性: 非重要)
```

警告が表示されたら、警告と重要な重大度の要因をすべて解決してから、ログをクリアします。

omreport system alertaction

omreport system alertaction コマンドを使用すると、システムコンポーネントでの警告やエラーイベントに対して設定されている警告処置の概要が表示されます。警告処置はコンポーネントに警告またはエラー イベントがある場合に、Server Administrator の応答方法を決定します。

omreport system alertaction は、コンポーネントに指定された警告処置を表示するのに役立ちます。コンポーネントに警告処置を設定するには **omconfig system alertaction** コマンドを使う必要があります。「[omconfig Instrumentation Service \(計装サービス\)を使ったコンポーネントの管理](#)」を参照してください。

警告処置を表示できるコンポーネントとイベント

システムにコンポーネントまたはイベントが存在する場合、次のようなコンポーネントやイベントに関して警告処置のプロパティを表示できます。

- 1 バッテリ警告
- 1 バッテリエラー
- 1 シャーシントルージョン
- 1 電流プローブ警告
- 1 電流プローブエラー
- 1 ファン警告
- 1 ファンエラー

- 1 メモリブリエラー
- 1 メモリエラー
- 1 電源装置警告
- 1 電源装置エラー
- 1 冗長の低下
- 1 冗長の喪失
- 1 温度警告
- 1 温度エラー
- 1 電圧警告
- 1 電圧エラー
- 1 プロセッサ警告
- 1 プロセッサエラー
- 1 ハードウェアログ警告
- 1 ハードウェアログが一杯です
- 1 ウォッチドッグ ASR

omreport system assetinfo

omreport system assetinfo コマンドを使用すると、取得、減価償却、および保証情報などのシステムの所有コストデータが表示されます。これらのフィールドを設定するには、**omconfig system assetinfo** コマンドを使用する必要があります。[「omconfig Instrumentation Service\(計表サービス\)を使ったコンポーネントの管理」](#)を参照してください。

omreport system events

omreport system events コマンドを使用すると、現在有効または無効の SNMP トラップが表示されます。このコマンドは、イベントが生成される各コンポーネントの概要を表示します。各コンポーネントについて、報告するように設定されている重大度と、報告されないように設定されている重大度がレポートに示されます。いくつかのコンポーネントの出力例を次に示します。

```

omreport system events
Current SNMP Trap Configuration
-----
System
-----
Settings
Enable: Informational, Warning and Critical
Disable: None

-----
Power Supplies
-----
Settings
Enable: Informational, Warning and Critical
Disable: None

-----
Fans
-----
Settings
Enable: Critical
Disable: Informational and Warning

```

完全なレポートには、イベントを生成できるシステムのすべてのコンポーネントの設定が一覧になります。

特定の種類のコンポーネントの状態を表示するには、**omreport system events type=<コンポーネント名>** コマンドを使用します。このコマンドは、イベントが生成される各コンポーネントの概要を表示します。[表 3-6](#) は、さまざまな種類のコンポーネントのイベントを表示します。


 **メモ:**一部のコンポーネントの種類は、システムで使用できないものもあります。

表 3-6. コンポーネントの種類別のシステムイベント

「名前=値」のペア	説明
type=accords	AC 電源コードのイベントを報告します。
type=battery	バッテリーのイベントを報告します。
type=currents	ファンアンペアブロープのイベントをレポートします。
type=fanenclosures	ファンエンクロージャのイベントをレポートします。
type=fans	ファンのイベントを設定します。

type=intrusion	シャーシントルージョンのイベントをレポートします。
type=log	ログのイベントを設定します。
type=memory	メモリのイベントを設定します。
type=powersupplies	電源装置のイベントをレポートします。
type=redundancy	冗長性のイベントを設定します。
type=temps	温度のイベントを設定します。
type=volts	電圧のイベントを設定します。

イベントの種類のコマンド例

以下のように入力します。

```
omreport system events type=fans
```

次に出力例を示します。

```
-----
Fans
-----
Settings
Enable: Critical
Disable: Informational and Warning
```

omreport system operatingsystem

omreport system operatingsystem コマンドを使用すると、オペレーティングシステムの情報が表示されます。


omreport system pedestinations

omreport system pedestinations コマンドを使用すると、プラットフォームイベントの警告に対して設定された送信先が表示されます。表示される送信先の数によっては、各送信先アドレスに個別の IP アドレスを設定できます。

次のように入力します。

```
omreport system pedestinations
```

omreport system pedestinations コマンドからの出力には、それぞれ有効なパラメータが表示されます。

 **メモ:** システム上で設定できる実際の宛先数は、システムによって異なります。

[表 3-7](#) に、使用可能な設定を示します。

表 3-7. omreport system pedestinations

出力	アトリビュート	説明
送信先リスト	送信先番号: Destination 1	destination 1: 最初の送信先を表示します。
	送信先 IP アドレス: 101.102.103.104	101.102.103.104: 最初の送信先の IP アドレス。
	送信先番号: Destination 2	destination 2: 2 番目の送信先を表示します。
	送信先 IP アドレス: 110.120.130.140	110.120.130.140: 2 番目の送信先の IP アドレス。
	送信先番号: Destination 3	destination 3: 3 番目の送信先を表示します。
送信先設定	送信先 IP アドレス: 201.202.203.204	201:202:203:204: 3 番目の送信先の IP アドレス。
	送信先番号: Destination 4	destination 4: 4 番目の送信先を表示します。
	送信先 IP アドレス: 210.211.212.213	210.211.212.213: 4 番目の送信先の IP アドレス。
	attribute=communitystring	communitystring: パスワードとして機能するテキストを表示し、ベースボード管理コントローラ (BMC) と送信先管理ステーションの間で送信される SNMP メッセージを認証する場合に使用します。

omreport system platformevents

omreport system platformevents コマンドを使用すると、リストの各プラットフォームイベントにシステムがどのように反応するかが表示されます。

omreport system recovery

omreport system recovery コマンドを使用すると、オペレーティングシステムがハング状態になった場合の対応方法が設定されているかどうかを確認できます。何秒経ったらオペレーティングシステムがハング状態にあると判断するかを表示することもできます。

omreport system shutdown

omreport system shutdown コマンドを使用すると、システムで保留中のシャットダウン処理が表示されます。シャットダウンのプロパティが設定されている場合は、このコマンドを実行するとプロパティが表示されます。

omreport system summary

omreport system summary コマンドを使用すると、現在システムにインストールされているソフトウェアとハードウェアコンポーネントの包括的な概要が表示されます。

コマンド出力例

以下のように入力します。

```
omreport system summary
```

CLI ウィンドウに表示される出力は、システムにインストールされているシステム管理ソフトウェア、オペレーティングシステム、およびハードウェアコンポーネントとオプションによって異なります。次の部分的コマンド結果は特有のもので、ご使用のシステムのハードウェア構成とソフトウェア設定とは異なる場合があります。

```
System Summary
-----
Software Profile
-----
System Management

Name           : Dell OpenManage Server Administrator
Version        : 5.x.x
Description    : Systems Management Software
Contains:      : Instrumentation Service 5.x.x
                : Storage Management Service 3.x.x
                : Sun JRE - OEM Installed Version 3.x.x
                : Secure Port Server 1.x.x
                : Dell OpenManage Core Service 1.x.x
                : Instrumentation Service Integration Layer 1.x.x
                : Storage Management Service Integration Layer 1.x.x

Operating System
Name           : Microsoft Windows 2000 Server
Version        : Service Pack 3 (Build 2XXX)
System Time    : Fri Sep 20 18:02:52 2XXX
System Bootup Time : Wed Sep 18 18:37:58 2XXX
```

システム概要ハードウェア情報には、システムに存在するインストール済みの次の種類のコンポーネントに関するデータ値が含まれます。

システムの属性

- 1 ホスト名
- 1 システムの場所

メインシステムシャーシ

シャーシ

- 1 シャーシモデル
- 1 シャーシサービスタグ
- 1 シャーシロック
- 1 シャーシ管理タグ

このコマンドを PowerEdge 1655MC システムで実行すると、次の追加情報が表示されます。

- 1 **サーバモジュールサービスタグ** - 現在ログインしているサーバモジュールのサービスタグ(シャーシサービスタグのフィールドは、お使いの PowerEdge 1655MC システムシャーシのサービスタグを示しています。)
- 1 **サーバモジュール管理タグ** - 現在ログインしているサーバモジュールの管理タグ
- 1 **サーバモジュールの場所** - PowerEdge 1655MC システムシャーシで、場所を示すためにサーバモジュールに割り当てられた番号

プロセッサ

システムの各プロセッサにつき、次の情報が一覧になります。

- 1 プロセッサメーカー
- 1 プロセッサシリーズ
- 1 プロセッサバージョン
- 1 現在の速度
- 1 最大速度
- 1 外部クロック速度
- 1 電圧

メモリ

- 1 インストール合計容量
- 1 オペレーティングシステムで使用可能なメモリ
- 1 最大容量
- 1 メモリアレイカウント

メモリアレイ

システムの各メモリボードやモジュールについて、以下の詳細が一覧になります(たとえば、指定のスロット番号のシステムボードやメモリモジュール)。

- 1 場所
- 1 用途
- 1 インストール容量
- 1 最大容量
- 1 使用可能なスロット
- 1 使用中のスロット
- 1 ECC の種類

BIOS

- 1 メーカー
- 1 BIOS バージョン
- 1 リリース日
- 1 BIOS ファームウェア情報
- 1 名前
- 1 BIOS ファームウェアバージョン

ファームウェア

- 1 名前
- 1 バージョン

ネットワークインタフェースカード

システムの各 NIC について、次の詳細が表示されます。

- 1 IP アドレス
- 1 サブネットマスク
- 1 デフォルトゲートウェイ
- 1 MAC アドレス

ストレージエンクロージャ

システムに接続されている各ストレージエンクロージャについて、次の詳細が一覧表示されます。

- 1 名前
- 1 Product ID (プロダクト ID)

omreport system thrmshutdown

`omreport system thrmshutdown` コマンドを使用すると、サーマルシャットダウン処置用に設定されたプロパティが表示されます。

サーマルシャットダウンで表示される 3 つのプロパティには、無効、警告、エラーがあります。CLI が次のメッセージを表示する場合、サーマルシャットダウン機能は無効になっています。

```
Thermal protect shutdown severity: disabled
```

(サーマル保護シャットダウン重大度: 無効)

温度プローブが警告またはエラーイベントを検出したときにシャットダウンするようにシステムが設定されている場合は、次のどちらかのメッセージが表示されます。

```
Thermal protect shutdown severity: warning
```

(サーマル保護シャットダウン重大度: 警告)

```
Thermal protect shutdown severity: failure
```

(サーマル保護シャットダウン重大度: エラー)

omreport system version

`omreport system version` コマンドを使用すると、システムにインストールされている BIOS、ファームウェア、システム管理ソフトウェア、およびオペレーティングシステムのバージョン番号が表示されます。

コマンド出力例

以下のように入力します。

```
omreport system version
```

CLI ウィンドウに表示される出力は、システムにインストールされている BIOS、RAID コントローラ、およびファームウェアのバージョンによって異なります。次の部分的コマンド結果は特有の結果で、ご使用のシステムの設定結果と異なる場合があります。

```
Version Report
```

```
-----  
Main System Chassis  
-----
```

```
Name : BIOS  
Version : 0.2.16  
Updateable : N/A
```

```
Name : BMC  
Version : 0.26  
Updateable : N/A
```

```
Name : Primary Backplane  
Version : 1.01  
Updateable : N/A
```

Software

Name : Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition
Version : 5.2 <Build 3790 : Service Pack 1> <x86>
Updateable : N/A

Name : Dell Server Administrator
Version : 5.1.0
Updateable : N/A

[目次ページに戻る](#)


[目次ページに戻る](#)


omreport rac: Remote Access Controller コンポーネントの参照

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザズガイド

- [パラメータ表の規則](#)
- [omreport rac コマンドの概要](#)
- [omreport rac コマンドのヘルプ](#)
- [omreport rac authentication](#)
- [omreport rac dialinusers](#)
- [omreport rac dialoutusers](#)
- [omreport rac network](#)
- [omreport rac modem](#)
- [omreport rac remote](#)
- [omreport rac snmptraps](#)
- [omreport rac users](#)
- [omreport rac viewcertificate](#)

Remote Access Controller (RAC) はシステム管理機能の完全セットを提供するシステムコンポーネントです。Server Administrator は、RAC 機能をインタフェースに統合することにより、Dell OpenManage Server Administrator および Dell OpenManage IT Assistant からユーザーがコントロールを表示したり管理することを可能にします。

 **メモ:** マニュアルに記載される機能はそのシステムによって RAC で使用できない場合もあります。たとえば、ダイヤルアップモデムの使用がサポートされているのは DRAC III のみです。

 **メモ:** コマンドは、DRAC III、DRAC III/XT、ERA、ERA/O を持つシステムでのみ使用できます (DRAC 4 および DRAC 5 を持つシステムでは使用できません)。

omreport rac コマンドを使って、Server Administrator で RAC コンポーネントのレポートを表示することができます。

パラメータ表の規則

パラメータ表ではコマンドラインインタフェースで表示される順番でコマンドの入力パラメータが一覧表示されます。「[omreport rac: Remote Access Controller コンポーネントの参照](#)」では、パラメータは設定する必要のある順番に一覧表示されています。

記号「|」は「パイプ」と呼ばれることがあり、「排他的論理和」または「演算子」を表します。たとえば、「有効 | 無効」はコンポーネントや機能を有効または無効にできますが、同時に有効と無効にすることはできません。

omreport rac コマンドの概要


 **メモ:** この項では、可能な omreport rac コマンドすべてをリストにしますが、お使いのシステムで使用できるコマンドはシステムの設定によって異なります。ヘルプを表示したり、またはシステムにインストールされていないコンポーネントのコマンドを実行すると、Server Administrator はコンポーネントまたは機能がシステムで見つからない旨のメッセージを発行します。

表 6-1 は omreport rac コマンドの簡単な概要です。「コマンドレベル 3」とタイトルが付いた欄は omreport rac で使用できる主な引数を一覧表示します。「ユーザー特権が必要」とは、コマンドを実行するのに必要な特権の種類を表し、U=ユーザー、P=パワーユーザー、A=アドミニストレータを表します。「用途」は omreport rac コマンドを使って実行される操作についての概略です。コマンドの構文と使い方の詳細については、この項で後述します。

表 6-1. omreport rac コマンドレベル 1、2、3

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	必要なユーザー権限	用途
omreport				
	rac			
		authentication	U、P、A	システム管理者が設定した各ユーザーのローカルオペレーションシステムユーザーアカウント特権に応じて、RAC へのユーザーアクセスを有効または無効にします。
		dialinusers	U、P、A	ダイヤルインユーザーのプロパティを表示します。
		dialoutusers	U、P、A	ダイヤルアウトユーザーのプロパティを表示します。
		network	U、P、A	オンボード NIC のプロパティを表示します。
		modem	U、P、A	オンボードモデムのプロパティを表示します。
		remote	U、P、A	リモート機能のプロパティを表示します。
		snmptraps	U、P、A	SNMPトラップのプロパティを表示します。
		users	U、P、A	ユーザー名のプロパティを表示します。
		viewcertificate	U、P、A	サーバまたは CA 証明書を表示します。

omreport rac コマンドのヘルプ

omreport rac -? コマンドを使って、omreport rac で使用できるコマンドの一覧を入手します。

omreport rac authentication

omreport rac authentication コマンドを使って、ユーザーのローカルオペレーティングシステム認証を、RAC 用に有効にするか無効にするか指定することができます。

RAC には、ユーザーアクセスを認証する方法が 2 つあります。RAC 認証と、ローカルオペレーティングシステム認証です。RAC 認証は常に **有効** になっています。システム管理者は、RAC へのアクセスを許可する特定のユーザーアカウントとパスワードを設定することができます。

オペレーティングシステムでは、システム管理者が異なるレベルのユーザーとユーザーアカウントを定義する必要があります。各ユーザーレベルによって与えられる特権が異なります。RAC におけるローカルオペレーティングシステム認証は、オペレーティングシステムのユーザーに 1 組の特権を定義し、RAC に別のユーザーとアカウントを設定することを希望しないシステム管理者が使用できるオプションです。RAC のローカルオペレーティングシステム認証を有効にすると、RAC にログインするオペレーティングシステム上でシステム管理者状態を持つすべてのユーザーを有効にすることになります。

omreport rac authentication のコマンド例

以下のように入力します。

```
omreport rac authentication
```

表示される結果には、オペレーティングシステムユーザーアクセス定義を使用して RAC にアクセスするユーザーの認証が無効になっているか、有効になっているが表示されます。たとえば以下のようになります。

```
omreport rac authentication
```

```
localauthenable=true
```

omreport rac dialinusers

omreport rac dialinusers コマンドを使って、ダイヤルインユーザーのプロパティ値を表示します。表 6-2 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 6-2. omreport rac dialinusers

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	<テキスト> で指定したユーザー名を持つダイヤルイン ユーザー エントリを表示します。
index=<数値>	インデックスが n と等しいダイヤルインユーザーのエントリを表示します。インデックスは通常 0~15 で、RAC に 16 あるユーザー「位置」のいずれかを指定します。 メモ: インデックス番号は RAC でのユーザーのポジションに相当します。

omreport rac dialoutusers

omreport rac dialoutusers コマンドはデマンドダイヤルアウトユーザーのプロパティ値を表示します。表 6-3 は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 6-3. omreport rac dialoutusers

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	<テキスト> で指定した IP アドレスを持つデマンドダイヤルアウトユーザーエントリを表示します。このアドレスはデマンドダイヤルアウトユーザーからのコンタクト後に RAC がコールバックするときの IP アドレスです。
index=<数値>	インデックスが n と等しいデマンドダイヤルアウトユーザーのエントリを表示します。インデックスは通常 0~15 で、RAC に 16 あるユーザー「位置」のいずれかを指定します。 メモ: インデックス番号は RAC でのユーザーのポジションに相当します。

omreport rac network

omreport rac network コマンドを使って、NIC プロパティ値を表示します。

omreport rac modem

omreport rac modem コマンドを使って、オンボードモデムプロパティ値を表示します。

omreport rac remote

omreport rac remote コマンドを使ってリモート機能プロパティ値を表示します。

omreport rac snmptraps

omreport rac snmptraps コマンドを使って、SNMPトラッププロパティ値を表示します。[表 6-4](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 6-4. omreport rac snmptraps

「名前=値」のペア	説明
ipaddr=<テキスト>	<テキスト>で指定した IP アドレスを持つトラップ エントリを表示します。
index=<数値>	インデックスが n と等しいダイヤルインユーザーのエントリを表示します。インデックスは通常 0~15 で、RAC に 16 あるトラップ「位置」のいずれかを指定します。 メモ: インデックス番号は RAC でのトラップのポジションに相当します。

omreport rac users

omreport rac users コマンドを使って、その RAC ユーザー名に該当するプロパティを表示します。[表 6-5](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 6-5. omreport rac users

「名前=値」のペア	説明
username=<テキスト>	<テキスト>で指定したユーザー名を持つ RAC ユーザー エントリを表示します。
index=<数値>	インデックスが n と等しい RAC ユーザーのエントリを表示します。インデックスは通常 0~15 で、RAC に 16 あるユーザー「位置」のいずれかを指定します。 メモ: インデックス番号は RAC でのユーザーのポジションに相当します。

omreport rac viewcertificate

omreport rac viewcertificate コマンドを使用して、RAC 上のサーバまたは認証局 (CA) 証明書を表示します。指定しなければならない唯一のパラメータは、表示する証明書が CA 証明書か、サーバ証明書か、ということです。[表 6-6](#) は、コマンドの有効なパラメータを表示しています。

表 6-6. omreport rac viewcertificate

「名前=値」のペア	説明
type=server ca	表示している証明書がサーバ証明書か CA 証明書を示します。

サンプル出力では、Subject は証明書の署名を要求している会社または組織を表します。Issuer は、証明書を与える組織です。

次の例は、omreport rac viewcertificate type=ca: コマンドの出力例です。

```
Type CA Certificate
Serial 1 00
Keysize 1024
Valid From DSU+15:34:31
Valid To DSU+15:34:31
```

Subject CN=test, O=test, OU=test, L=Austin, ST=Texas, C=US,

E=name@company.com

Issuer CN=Thawte Test CA Root, O=Thawte Certification,

OU=TEST TEST TEST, L=San Jose, ST=CA, C=US,

E=name@thawte.com

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

CLI コマンド結果の使い方

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

Server Administrator コマンドラインインタフェース (CLI) のユーザーはさまざまな方法でコマンド出力を利用できます。この項では、コマンド出力をファイルに保存する方法と、コマンド結果のフォーマットを目的に合わせて選択する方法について説明します。

コマンド結果の出力オプション

CLI コマンド出力はオペレーティングシステムのタイプによって、コマンドウィンドウ、X-ターミナル、または画面上でシステムの標準出力に表示されます。

コマンド結果を標準出力に表示する代わりに、ファイルにリダイレクトすることができます。コマンド出力をファイルに保存すると、後で分析や比較に使うことができます。

コマンド結果を標準出力に表示する場合もファイルに書き込む場合も、結果をフォーマットできます。選択するフォーマットによって、コマンド出力の表示形式やファイルへの書き込み方法が決まります。

コマンド出力表示の管理

各オペレーティングシステムには、コマンド結果の標準出力表示方法を管理する手段が備わっています。次のコマンドは、コマンド結果を確認する前に、スクロールして消えてしまわないようにする場合に便利です。Microsoft® Windows® コマンドプロンプト、Red Hat® Enterprise Linux® ターミナル、および SUSE® Linux Enterprise Server ターミナルで、同じコマンド構文を使用できます。スクロール制御機能を備えたコマンド出力を表示するには、CLI コマンドを入力してパイプ記号の後に `more` を付加します。たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary | more
```

マルチスクリーンシステムの概要では、最初の画面が表示されます。コマンド出力の次の画面を表示するには、スペースバーを押します。

コマンド出力のファイルへの書き込み

コマンド結果をファイルにリダイレクトする場合は、コマンド結果の書き込み先のファイル名と、必要に応じてディレクトリパスを指定できます。ファイルの書き込み先のパスを指定する場合は、オペレーティングシステムに適した構文を使用してください。

コマンド結果の保存には 2 とおりの方法があります。指定する出力ファイルと同じ名前の任意のファイルを上書きするか、コマンド結果を同じ名前のファイルに追加し続けることができます。

上書き可能なファイルへのコマンド結果の保存

`-outc` オプションは、以前に書き込まれたファイルに保存されているデータを上書きする場合に使います。たとえば、午前 11 時にシステムのファンブロープ 0 のファンブロープ RPM の読み取り値をキャプチャして、結果を `fans.txt` と名前の付いたファイルに書き込むとします。この場合、次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```

以下は、ファイルに書き込まれた結果の一部です。

```
Index          : 0
Status         : OK
Probe Name     : System Board Fan 1 RPM
Reading        : 2380RPM
Minimum Warning Threshold : 600RPM
Maximum Warning Threshold : 5700RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM
```

4 時間後、コマンドを繰り返します。 `fans.txt` に書き込まれた午前 11 時のスナップショットは不要だとします。同じコマンドを次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outc fans.txt
```

`fans.txt` ファイルに保存されていた午前 11 時のデータが午後 3 時のデータで上書きされます。

`fans.txt` の内容が今度は以下ようになります。

```
Index          : 0
Status         : OK
Probe Name     : System Board Fan 1 RPM
Reading        : 3001RPM
Minimum Warning Threshold : 700RPM
Maximum Warning Threshold : 5500RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM
```

前のコマンド結果を参照して、前のファンブロープ 0 出力を現在の出力と比較することはできません。`-outc` オプションを使って `fans.txt` ファイルを上書きしたからです。

既存のファイルへのコマンド結果の追加

-outa オプションは、以前に書き込まれたファイルに保存されているデータに新しいコマンド結果を追加する場合に使用します。たとえば、午前 11 時にシステムのファンブローブ 0 のファンブローブ RPM の読み取り値をキャプチャして、結果を **fans.txt** と名前の付いたファイルに書き込むとします。この結果を 4 時間後に得た同じブローブの出力と比較する場合、**-outa** コマンドを使って新しい出力を **fans.txt** に追加できます。

次のように入力します。

```
omreport chassis fans index=0 -outa fans.txt
```

fans.txt の内容が今度は以下ようになります。


```
Index          : 0
Status         : OK
Probe Name     : System Board Fan 1 RPM
Reading        : 2380RPM
Minimum Warning Threshold : 600RPM
Maximum Warning Threshold : 5700RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM

Index          : 0
Status         : OK
Probe Name     : System Board Fan 1 RPM
Reading        : 3001RPM
Minimum Warning Threshold : 700RPM
Maximum Warning Threshold : 5500RPM
Minimum Failure Threshold : 500RPM
Maximum Failure Threshold : 6000RPM
```

テキストエディタを使用すると、各データブロックがキャプチャされた時間を挿入できます。ファンブローブ 0 の 2 つのスナップショットを比較すると、2 回目の報告で数か所に変更があります。ファン RPM の読み取り値は 621 RPM 増加しましたが、まだ標準範囲内にあります。だれかが最小警告しきい値を 200 RPM 増やし、最大警告しきい値を 2000 RPM 減らしました。

CLI コマンド出力のフォーマットの選択

CLI コマンド結果のフォーマットを指定できます。フォーマットはコマンド出力の表示形式を決定します。コマンド結果がファイルに転送されると、コマンド結果の書き込み先ファイルによってフォーマットがキャプチャされます。

 **メモ:** **omconfig** コマンドは、ほとんどの出力形式オプションを無視して、標準テキストのメッセージを返します。ただし、**xml** オプションを使用した場合は、**omconfig** コマンドは XML コードを返します。

以下のようなフォーマットを使用できます。

- 1 リスト (lst)
- 1 セミコロン区切りの値 (ssv)
- 1 テーブル (tbl)
- 1 生の xml (xml)
- 1 カスタム区切りの形式 (cdv)

フォーマットオプションの構文は次のようになります。

```
<コマンド> -fmt <フォーマットオプション>
```

たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl
```

-fmt tbl はテーブル形式を指定します。

フォーマットオプションを出力をファイルに転送するオプションと組み合わせることができます。たとえば、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl -outa summary.txt
```

-fmt tbl はテーブル形式を指定し、**-outa** はコマンド結果を **summary.txt** という名前ファイルに追加することを指定します。

リスト (lst)

デフォルトのフォーマットは **lst** (リスト形式) です。出力の読みやすさを最適化する場合に、この形式を使用します。**lst** 以外のフォーマットが必要であれば、コマンド出力のフォーマットを指定する必要があります。

次のコマンド出力例を **lst** 形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary
```

リスト形式はデフォルトの表示形式なので、特別なフォーマットオプションは不要です。次のシステム概要例のネットワークデータの一部は、以下のように表示されます。

```
-----
```

```
Network Data
```

```
-----
```

```
Network Interface Card 0 Data
IP Address : 143.166.152.108
Subnet Mask : 255.255.255.0
Default Gateway : 143.166.152.1
MAC Address : 00-02-b3-23-d2-ca
```

表 (tbl)

tbl (テーブル)フォーマットオプションを使うと、データがテーブルの行と列でフォーマットされます。次のコマンド出力例をテーブル形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt tbl
```

出力例は以下のように表示されます。

```
-----
Network Interface Card 0 Data
-----
| ATTRIBUTE | VALUE
| IP Address | 143.166.152.108
| Subnet Mask | 255.255.255.0
| Default Gateway | 143.166.152.1
| MAC Address | 00-02-b3-23-d2-ca
```

セミコロン区切りの値 (ssv)

ssv フォーマットオプションを使うと、出力がセミコロンで区切った値の形式にフォーマットされます。この形式は、コマンド出力結果を Microsoft Excel などの表計算プログラムやデータベースプログラムにインポートすることもできます。次のコマンド出力例をセミコロンで区切った値の形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt ssv
```

出力例は以下のように表示されます。

```
-----
Network Data
-----
Network Interface Card 0 Data
IP Address:143.166.152.108
Subnet Mask:255.255.255.0
Default Gateway:143.166.152.1
MAC Address:00-02-b3-23-d2-ca
```

生の XML (xml)

xml フォーマットオプションを使うと、システム管理アプリケーションでの使用や、xml を使う他のアプリケーションへの入力に適した出力が生成されます。次のコマンド出力例を raw xml 形式で表示するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt xml
```

出力例は以下のように表示されます。

```
<NICStatus>1</NICStatus><IPAddress>143.166.152.108</IPAddress><SubnetMask>255.255.255.0</SubnetMask><DefaultGateway>143.166.152.1</DefaultG
-02-b3-23-d2-ca</MACAddr>
```

カスタム区切り形式 (cdv)

cdv フォーマットオプションを使うと、エクスポートされたデータがカスタム区切りの形式でレポートされます。このオプションは他の **omreport** コマンドと一緒に指定できます。たとえば、カスタム区切り形式でシステム概要を生成するには、次のように入力します。

```
omreport system summary -fmt cdv
```

omconfig コマンドを使うと、カスタム区切り形式のプリファランスを設定できます。デリミタの有効値は、感嘆符、@、シャープ、ドル記号、パーセント記号、カレット(^)、アスタリスク、波型記号、疑問符、コロン、およびパイプです。

アスタリスクを使ってデータフィールドを分けるデリミタの設定の例は以下のとおりです。

```
omconfig preferences cdvformat delimiter=asterisk
```

[目次ページに戻る](#)

[目次ページに戻る](#)

Storage Management Service（ストレージ管理サービス）の使い方

Dell™ OpenManage™ Server Administrator バージョン 5.2 コマンドラインインタフェースユーザーズガイド

- [CLI のコマンド構文](#)
- [必須、オプション、変数のコマンド要素の構文](#)
- [omreport storage と omconfig storage のユーザー特権](#)
- [omreport コマンド](#)
- [omreport ストレージヘルプ](#)
- [omconfig グローバルのコマンド](#)
- [omconfig コントローラのコマンド](#)
- [omconfig 仮想ディスクのコマンド](#)
- [omconfig 物理ディスクのコマンド](#)
- [omconfig バッテリーのコマンド](#)
- [omconfig コネクタコマンド](#)
- [omconfig エンクロージャのコマンド](#)

Storage Management は全機能を装備したコマンドラインインタフェース（CLI）で、Storage Management のレポート、設定、管理などのあらゆる機能をオペレーティングシステムのコマンドシェルから実行できます。また、Storage Management CLI を使用すると、コマンドシーケンスのスクリプトを作成することもできます。

Storage Management CLI は、Dell OpenManage Server Administrator の **omreport** コマンドと **omconfig** コマンドのオプションを拡張するものです。本章では Storage Management に適用する **omreport** と **omconfig** コマンドについてのみ述べられています。インストールについては、『Dell OpenManage インストールとセキュリティユーザーズガイド』を参照してください。Storage Management の詳細に関しては、Storage Management オンラインヘルプおよび「Dell OpenManage Server Administrator Storage Management ユーザーズガイド」を参照してください。

CLI のコマンド構文

Server Administrator の全コマンドと同様に、**omreport** と **omconfig** のコマンド構文はコマンドの「レベル」の指定から成ります。最初のコマンドレベルは、コマンド名の **omreport** または **omconfig** です。次のコマンドレベルでは、コマンドの対象となるオブジェクトの種類や、コマンドで表示される情報をより細かく特定します。

たとえば、次の **omconfig** コマンド構文には 3 つのレベルがあります。

```
omconfig storage pdisk
```

以下の表で、これらのコマンドレベルについて説明します。

表 8-1. コマンドレベルの例

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	用途
omconfig			コマンドを指定します。
	storage		コマンドを実装する Server Administrator のサービス（この場合は Storage Management）を示します。
		pdisk	コマンドの対象となるオブジェクトの種類を指定します。

omreport と **omconfig** のコマンド構文では、コマンドレベルに続いて、「名前=値」のペアが 1 つまたは複数必要になることがあります。「名前=値」のペアは、オブジェクト自体（特定の物理ディスクなど）またはコマンドが実装するオプション（"blink" または "unblink"）を指定します。

たとえば、物理ディスクを点滅させる次の **omconfig** コマンド構文には、3 つのレベルと 3 つの「名前=値」のペアがあります。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

ここで、物理ディスク ID=<コネクタ:エンクロージャ ID:ポート ID|コネクタ:ターゲット ID>です。

この例では、controller=id の id はコントローラ番号のことで、たとえばコントローラ 1 は controller=1 と指定されます。

必須、オプション、変数のコマンド要素の構文

omreport および **omconfig** コマンドには、複数の「名前=値」のペアがあります。これらの「名前=値」ペアには、必須、オプション、および変数のパラメータが含まれる場合があります。以下の表で、これらのパラメータを示すために使用する構文について説明します。

表 8-2. パラメータの「名前=値」ペアの構文

構文	説明
controller=id	omreport storage controller コマンドによって報告されるコントローラ ID を示します。これらの値を得るには、 omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、 omreport storage pdisk controller=id と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。 たとえば、 controller=id パラメータは controller=1 と指定します。
connector=id	omreport コマンドによって報告されるコネクタ ID を示します。これらの値を得るには、 omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、 omreport storage connector controller=id と入力し、コントローラに接続されているコネクタの ID を表示します。

	たとえば、 connector=id パラメータは connector=2 のように指定します。
vdisk=id	omreport コマンドによって報告される仮想ディスク ID を示します。これらの値を得るには、 omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、 omreport storage vdisk controller=id と入力し、コントローラ上の仮想ディスクの ID を表示します。 たとえば、 vdisk=id パラメータは vdisk=3 と指定します。
enclosure=<エンクロージャ ID>	enclosure=connector または enclosure=connector:エンクロージャ ID のどちらかを指定することで、特定のエンクロージャを示します。 これらの値を得るには、 omreport storage controller と入力してコントローラ ID を表示してから、 omreport storage enclosure controller=ID と入力し、コントローラに接続しているエンクロージャの ID を表示します。
pdisk=<物理ディスク ID>	connector:ターゲット ID または connector:エンクロージャ ID:ポート ID のどちらかを指定することで、特定の物理ディスクを示します。 コネクタ、エンクロージャ、および物理ディスクの値（ターゲット ID またはポート ID）を得るには、 omreport storage controller を入力してコントローラ ID を表示し、次に omreport storage pdisk controller=id を入力して、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。
battery=id	omreport コマンドによって報告されるバッテリー ID を示します。この値を得るには、 omreport storage controller と入力してコントローラの ID を表示してから、 omreport storage battery controller=id と入力しコントローラのバッテリーの ID を表示します。
<>	キャレット記号 (<>) は、指定すべき変数要素を囲みます。 たとえば、 name=<文字列> パラメータは name=VirtualDisk1 のように指定します。
[]	ブラケット記号 ([]) は指定するかしないかを選択できるオプションの要素を示します。 たとえば、仮想ディスクを作成する場合、 [name=<文字列>] パラメータは仮想ディスク名を指定するかどうかを選択できるという意味です。このパラメータを構文から省略すると、仮想ディスクのデフォルト名が選択されます。
	パイプ記号 () は、複数のオプションから 1 つだけを選択する必要がある場合に、オプションを区切ります。 たとえば、仮想ディスクを作成する場合、 cachepolicy=d c はキャッシュポリシーを cachepolicy=d か cachepolicy=c のどちらかに指定しなければならないという意味です。

omreport storage と omconfig storage のユーザー特権

Storage Management で **omconfig storage** コマンドを使用するには、システム管理者権限が必要です。**omreport storage** コマンドを使用するには、ユーザー権限とパワーユーザー権限で十分です。

omreport コマンド

以下の項では、各種ストレージコンポーネントを表示するために必要な **omreport** コマンド構文について説明します。

omreport ストレージヘルプ

次の表には **omreport storage** コマンド構文が記載されています。

表 8-3. omreport storage help

コマンドレベル 1	コマンドレベル 2	コマンドレベル 3	用途
omreport			
	storage		omreport コマンドを使用できるストレージコンポーネントのリストを表示します。
		pdisk	omreport storage pdisk パラメータのリストを表示し、物理ディスク情報を表示します。
		vdisk	omreport storage vdisk パラメータのリストを表示し、仮想ディスク情報を表示します。
		controller	omreport storage controller パラメータのリストを表示し、コントローラ情報を表示します。
		enclosure	omreport storage enclosure パラメータのリストを表示し、エンクロージャ情報を表示します。
		connector	omreport storage connector パラメータのリストを表示し、コネクタ情報を表示します。
		battery	omreport storage battery パラメータのリストを表示し、バッテリー情報を表示します。
		globalinfo	omreport storage globalinfo パラメータのリストを表示し、グローバルストレージ情報を表示します。

omreport コントローラ状態

表 8-4. omreport コントローラのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage controller		システムに接続されたすべてのコントローラのプロパティ情報を表示します。
	controller=id <i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0	指定したコントローラと、それに接続しているエンクロージャ、仮想ディスク、物理ディスクなどのコンポーネントすべてを表示します。

omreport グローバル情報 (Smart サーマルシャットダウン状態)

表 8-5. omreport グローバル情報のコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage globalinfo		Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを表示します。詳細については、 「omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを有効にする」 コマンドを参照してください。

omreport バッテリ状態

表 8-6. omreport バッテリのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage battery		システム上のすべてのコントローラに存在するあらゆるバッテリを表示します (一部のコントローラにはバッテリがありません)。
	controller=id <i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0	指定したコントローラのバッテリを表示します。

omreport コネクタ状態

表 8-7. omreport コネクタコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage connector		システム上のすべてのコントローラに存在するあらゆるコネクタを表示します。 メモ: このコマンドはコントローラ ID が指定されている場合のみ有効です。
	controller=id <i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0	指定したコントローラのコネクタを表示します。
	controller=id <i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 connector=id <i>id</i> はコネクタ番号です。たとえば以下ようになります。connector=0	コントローラ上の指定したコネクタの情報を表示します。

omreport エンクロージャ状態

表 8-8. omreport エンクロージャのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号です。たとえば以下ようになります。 controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャとそのコンポーネントを表示します。

omreport 温度プローブ状態

表 8-9. omreport 温度プローブのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3) と「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>info=temps <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャの温度プローブを表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>info=temps index=n <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号で、"n" は温度プローブの番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2 info=temps index=1	指定した温度プローブを表示します。

omreport ファン状態

表 8-10. omreport ファン状態

必要なコマンドレベル (1、2、3) と「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=fans <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2 メモ: SCSI コントローラでは enclosure=<エンクロージャ ID> で指定された ID がコネクタ番号で、シリアルアタッチド SCSI (SAS) コントローラでは ID は connectorNumber:EnclosureIndex です。	指定したエンクロージャのファンを表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>info=fans index=n <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号で、"n" はファンの番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2 info=fans index=1	指定したファンを表示します。

omreport 電源装置状態

表 8-11. omreport 電源装置コマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3) と「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=pwrsupplies <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャの電源装置を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> info=pwrsupplies index=n <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号で、"n" は電源装置の番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2 info=pwrsupplies index=1	指定した電源装置を表示します。

omreport EMM 状態

表 8-12. omreport EMM のコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3) と「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage enclosure		システムに接続されたすべてのエンクロージャのプロパティ情報を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>info=emms <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2	指定したエンクロージャのエンクロージャ管理モジュール (EMM) を表示します。
	controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>info=emms index=n <i>id</i> はコントローラ番号とエンクロージャ番号で、"n" は EMM の番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 enclosure=2 info=emms index=1	指定した EMM を表示します。

omreport 物理ディスク状態

表 8-13. omreport 物理ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3) と「名前=値」のペア	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage pdisk controller=id		指定したコントローラに接続している物理ディスクをすべて表示します。
<i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0	connector=id <i>id</i> はコネクタ番号です。たとえば以下ようになります。connector=1	コントローラ上の指定したコネクタに接続している物理ディスクをすべて表示します。
	vdisk=id <i>id</i> は仮想ディスク番号です。たとえば以下ようになります。vdisk=1	コントローラ上の指定した仮想ディスクに含まれる物理ディスクをすべて表示します。
	pdisk=コネクタ ID: ターゲット ID コネクタ ID: エンクロージャ ID: スロット ID ただし、コネクタ ID: ターゲット ID はコネクタ番号と物理ディスク番号で、コネクタ ID: エンクロージャ ID: スロット ID はコネクタ番号、エンクロージャ番号、およびスロット番号です。 たとえば以下ようになります。pdisk=0:2 または pdisk=0:1:2	コントローラ上の指定したコネクタの指定した物理ディスクを表示します。

omreport 仮想ディスク状態

表 8-14. omreport 仮想ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア	用途
omreport storage vdisk		コントローラ上のすべての仮想ディスクのプロパティ情報を表示します。
	controller=id <i>id</i> はコントローラ番号です。たとえば以下ようになります。controller=0.	指定したコントローラ上のすべての仮想ディスクを表示します。
	controller=id vdisk=id <i>id</i> はコントローラ番号と仮想ディスク番号です。たとえば以下ようになります。controller=0 vdisk=1.	コントローラ上の指定した仮想ディスクを表示します。

omconfig グローバルのコマンド

以下の項では、グローバルコマンドを実行するために必要な omconfig コマンド構文について説明します。実行すると、これらのコマンドはすべてのコントローラに適用されます。また、これらのグローバルコマンドは、Storage ツリービューオブジェクトの **情報 / 設定** サブタブに表示されるグローバルタスクにも対応しています。

表 8-15. omconfig グローバルのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage globalinfo	
	action=enablests
	action=disablests
	action=globalrescan

omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを有効にする

デフォルトでは、PV220S および PV221S エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50° に達すると、オペレーティングシステムとサーバーがシャットダウンします。ただし、PV220S および PV221S エンクロージャにコネクタの冗長性を実装している場合は、エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50° に達したときにエンクロージャだけをシャットダウンし、オペレーティングシステムとサーバーはシャットダウンしないように指定できます。温度が高すぎる間エンクロージャだけをシャットダウンするように指定する操作を「Smart サーマルシャットダウン」と呼びます。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

サーマルシャットダウンを有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。


完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=enablests
```

構文例

サーマルシャットダウンを有効にする **omconfig** コマンド構文では、コントローラやエンクロージャの ID を指定する必要はありません。サーマルシャットダウンを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=enablests
```

 **メモ:** **omreport storage globalinfo** コマンドを使用すると、現在 Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを確認できます。Smart サーマルシャットダウンの状態は、Server Administrator のグラフィカルユーザーインターフェイスにも表示されます。この状態を見つけるには、Storage オブジェクトと **情報 / 設定** タブを選択します。

omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを無効にする

omconfig コマンドを使ってサーマルシャットダウンを有効にしている場合、サーマルシャットダウンを無効にしてシステムをデフォルト設定に戻すことができます。サーマルシャットダウンを無効にすると、PV220S および PV221S エンクロージャが臨界温度の摂氏 0 または 50° に達したときにオペレーティングシステムとサーバーがシャットダウンします。

サーマルシャットダウンを無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このコマンドは、すべてのコントローラの Smart サーマルシャットダウンを無効にします。


完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=disablests
```

構文例

サーマルシャットダウンを無効にする **omconfig** コマンド構文では、コントローラやエンクロージャの ID を指定する必要はありません。サーマルシャットダウンを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=disablests
```

 **メモ:** **omreport storage globalinfo** コマンドを使用すると、現在 Smart サーマルシャットダウンが有効か無効かを確認できます。Smart サーマルシャットダウンの状態は、Server Administrator のグラフィカルユーザーインターフェイスにも表示されます。この状態を見つけるには、Storage オブジェクトと **情報 / 設定** タブを選択します。

omconfig グローバルコントローラの再スキャン

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、システムのすべてのコントロールが再スキャンされます。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage globalinfo action=globalrescan
```

構文例

システムのすべてのコントローラを再スキャンする **omconfig** コマンド構文では、コントローラ ID を指定する必要はありません。すべてのコントローラをグローバルに再スキャンするには、次のコマンドを入力します。

```
omconfig storage globalinfo action=globalrescan
```

メモ: グローバル再スキャンは、非 RAID SCSI および SAS コントローラではサポートされていません。Storage Management が、非 RAID SCSI コントローラでの設定変更を認識するにはシステムを再起動する必要があります。

omconfig コントローラのコマンド

以下の項では、コントローラのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

注意: **omconfig storage controller action=resetconfig controller=id** は、コントローラの設定をリセットします。コントローラの設定をリセットすると、コントローラに接続している仮想ディスク上のすべてのデータが完全に破壊されます。システムまたはブートパーティションがこれらの仮想ディスク上にある場合は、それも破壊されます。

表 8-16. omconfig コントローラのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage controller	action=rescan controller=id
	action=globalrescan
	action=enablealarm controller=id
	action=disablealarm controller=id
	action=quietalarm controller=id
	action=testalarm controller=id
	action=resetconfig controller=id [force=yes]
	action=createvdisk controller=id raid=<c> r0 r1 r1c r5 r10 r50> size=<数値 max min > pdisk=<物理ディスク ID> [stripesize=<2kb 4kb 8kb 16kb 32kb 64kb 128kb>] [cachepolicy=<d c>] [readpolicy=<ra nra ara rc nrc>] [writepolicy=<wb wt wc nwc fwb>] [name=<文字列>] [spanlength=<n>]
	action=setrebuildrate controller=id
	rate=<0 ~ 100>
	action=setbgirate controller=id
	rate=<0 ~ 100 >
	action=setreconstructrate controller=id
	rate=<0 ~ 100>
	action=setcheckconsistency controller=id
	rate=<0 ~ 100>
	action=exportlog controller=id
	action=importforeignconfig controller=id
	action= importrecoverforeignconfig controller=id
	action=clearforeignconfig controller=id
action=setpatrolreadmode controller=id	
mode>manual auto disable	
action=startpatrolread controller=id	
action=stoppatrolread controller=id	

omconfig コントローラの再スキャン

コントローラを再スキャンするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文


```
omconfig storage controller action=rescan controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 を再スキャンするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=rescan controller=1
```

 **メモ:** 再スキャンコントローラは、非 RAID SCSI および SAS コントローラではサポートされていません。Storage Management が、非 RAID SCSI コントローラでの設定変更を認識するにはシステムを再起動する必要があります。

omconfig グローバルコントローラの再スキャン

omconfig storage controller action=globalrescan コマンドは Storage Management の以前のリリースではサポートされていません。このコマンドは **omconfig storage globalinfo action=globalrescan** コマンドに置き換わりました。システムのすべてのコントローラを再スキャンして CLI スクリプトを作成する場合は、**omconfig storage globalinfo action=globalrescan** コマンドの使用が適しています。

このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

omconfig コントローラ警告を有効にする

コントローラ警告を有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=enablealarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の警告を有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=enablealarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告を無効にする

コントローラ警告を無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=disablealarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の警告を無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=disablealarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告の静止

コントローラ警告を静止にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=quietalarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のアラームを静止にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=quietalarm controller=1
```

omconfig コントローラ警告のテスト

コントローラ警告の機能性をテストするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。アラームが約 2 秒間鳴ります。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=testalarm controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。


構文例

たとえば、コントローラ 1 のアラームをテストするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=testalarm controller=1
```

omconfig コントローラ設定のリセット

コントローラの設定をリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **注意：** 設定をリセットすると、コントローラに接続している仮想ディスク上のすべてのデータが完全に破壊されます。システムまたはブートパーティションがこれらの仮想ディスク上にある場合は、それも破壊されます。このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージはあらゆる状況で生成されるわけではありません。このコマンドを使うときは、システムやブートパーティション、その他の重要なデータが削除されないことを十分確認してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

このコマンドによってシステムまたはブートパーティションが削除される場合は、警告メッセージが表示される場合があります。**force=yes** パラメータを使うと、この警告をオーバーライドできます。この場合、構文は次のようになります。

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=id force=yes
```

構文例

たとえば、コントローラ 1 の設定をリセットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=resetconfig controller=1
```

omconfig 仮想ディスクの作成

仮想ディスクの作成については、オンラインヘルプに詳しい情報が含まれています。

仮想ディスクを作成するための **omconfig** 構文には複数のパラメータがあります。以下のパラメータを指定する必要があります。

- 1 コントローラ (controller=id)
- 1 RAID レベル (raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10| r50>)
- 1 サイズ (size=<数値 | max | min >)
- 1 物理ディスクは次のどちらかの方法で指定されます。

pdisk=コネクタ:エンクロージャ ID:ポート ID

または

pdisk=コネクタ:ターゲット ID

その他のパラメータについては、指定しなければ Storage Management によってデフォルト値が設定されます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=createvdisk controller=id raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10| r50> size=<数値 | max | min > pdisk=<物理ディスク ID> [stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>] [cachepolicy=<d | c>] [readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>] [writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>] [name=<文字列>] [spanlength=<n>]
```

仮想ディスクの作成と再設定のためのパラメータ指定

以下の項では、`omconfig storage controller action=createvdisk` パラメータを指定する方法について説明します。

`controller=id` パラメータ (必須)

`raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10| r50>` パラメータ (必須)

`size=<数値 | max | min >` パラメータ (必須)

`pdisk=<コネクタ:ターゲットID,コネクタ:ターゲットID,.....>` パラメータ (必須)

`[stripesize=< 2kb| 4kb| 8kb| 16kb| 32kb| 64kb| 128kb>]` パラメータ (オプション)

`[cachepolicy=<d | c>]` パラメータ (オプション)

`[readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>]` パラメータ (オプション)

`[writepolicy=<wb| wt| wc| nwc | fwb>]` パラメータ (オプション)

`[name=<文字列>]` パラメータ (オプション)

`[spanlength=<n>]` パラメータ (オプション)

controller=id パラメータ (必須)

`omreport storage controller` コマンドによって報告されるコントローラ ID を指定します。たとえば以下ようになります。

```
controller=2
```

raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10| r50> パラメータ (必須)

仮想ディスクの連結または RAID レベルを指定するには、`raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10| r50>` パラメータを使用します。サポートされる RAID レベルはコントローラによって異なります。コントローラがサポートしている RAID レベルと、RAID レベルおよび連結の一般的な情報については、オンラインヘルプを参照してください。以下の表に、各 RAID レベルおよび連結についての `raid=n` パラメータの指定方法を示します。

表 8-17. RAID レベルと連結

RAID レベルまたは連結	raid=n パラメータの指定
RAID 0	raid=r0
RAID 1	raid=r1
RAID 5	raid=r5
RAID 10	raid=r10
RAID 50	raid=r50
RAID 1-連結	raid=r1c
連結	raid=c

size=<数値 | max | min > パラメータ (必須)

以下の表に、`size=<数値 | max | min >` パラメータの指定方法を示します。

表 8-18. Size パラメータ

size=<数値 max min> パラメータの指定	説明
size=<n>	仮想ディスクに特定のサイズを指定するには、これを使用します。仮想ディスクサイズは b (バイト)、m (メガバイト)、または g (ギガバイト) で指定します。たとえば、size=500m は、仮想ディスクが 500MB という意味です。
size=max	可能な最大サイズの仮想ディスクを作成するには、size=max と指定します。RAID 50 の仮想ディスクを作成する場合、このパラメータは size=max と指定する必要があります。
size=min	可能な最小サイズの仮想ディスクを作成するには、size=min と指定します。

物理ディスク ID=<コネクタ:エンクロージャ ID:ポート ID | コネクタ:ターゲット ID>

仮想ディスクに含める物理ディスクを指定するには、このパラメータを使用します。

仮想ディスクを再構成する場合は、再構成後の仮想ディスクに含める物理ディスクすべてを指定する必要があります。物理ディスクの指定は、元の仮想ディスクからそのまま再構成後の仮想ディスクに属する物理ディスクと、再構成後の仮想ディスクに新しく追加された新しい物理ディスクに適用されます。コントローラによっては、仮想ディスクから物理ディスクを削除できます。この場合、削除する物理ディスクは指定しません。

pdisk=<物理ディスク ID> パラメータは、コネクタ:エンクロージャ ID:ポート ID または コネクタ:ターゲット ID のどちらかで指定される物理ディスクを指します。

stripesize=< 2kb | 4kb | 8kb | 16kb | 32kb | 64kb | 128kb> | パラメータ (オプション)

サポートされるストライプサイズはコントローラによって異なります。コントローラでどのストライプサイズがサポートされているかについては、オンラインヘルプを参照してください。ストライプサイズはすべてキロバイトで指定します。たとえば、ストライプサイズに 128KB を指定する場合は、次のように入力します。

stripesize=128kb

[cachepolicy=<d | c>] パラメータ (オプション)

サポートされるキャッシュポリシーはコントローラによって異なります。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。以下の表に、各キャッシュポリシーの [cachepolicy=<d | c>] パラメータの指定方法を示します。

表 8-19. キャッシュポリシーのパラメータ

キャッシュポリシー	cachepolicy=d c パラメータ指定
ダイレクト I/O	cachepolicy=d
キャッシュ I/O	cachepolicy=c

[readpolicy=<ra | nra | ara | rc | nrc>] パラメータ (オプション)

サポートされる読み取りポリシーはコントローラによって異なります。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。以下の表に、各読み取りポリシーの [readpolicy=<ra | nra | ara | rc | nrc>] パラメータの指定方法を示します。

表 8-20. 読み取りポリシーのパラメータ

読み取りポリシー	readpolicy=ra ara nra rc nrc パラメータ指定
先読み	readpolicy=ra
適応先読み	readpolicy=ara
先読みなし	readpolicy=nra
読み取りキャッシュ	readpolicy=rc
読み取りキャッシュなし	readpolicy=nrc

[writepolicy=<wb | wt | wc | nwc>] パラメータ (オプション)

サポートされる書き込みポリシーはコントローラによって異なります。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。以下の表に、各書き込みポリシーの [writepolicy=<wb | wt | wc | nwc>] パラメータの指定方法を示します。

表 8-21. 書き込みポリシーのパラメータ

書き込みポリシー	writepolicy=wb wt wc nwc パラメータ指定
先書き	writepolicy=wb
適応先書き	writepolicy=wt
先書きなし	writepolicy=nwc
書き込みキャッシュ	writepolicy=wc
書き込みキャッシュなし	writepolicy=nwc

書き込みポリシー	writepolicy=wb wt wc fwb nwc パラメータ指定
ライトバックキャッシュ	writepolicy=wb
ライトスルーキャッシュ	writepolicy=wt
書き込みキャッシュ	writepolicy=wc
ライトバックの強制	writepolicy=fwb
書き込みキャッシュなし	writepolicy=nwc

[name=<文字列>] パラメータ (オプション)

仮想ディスクの名前を指定するには、このパラメータを使用します。たとえば以下になります。

```
name=VirtualDisk1
```



メモ: CERC SATA 1.5/2s コントローラの場合は、仮想ディスクの名前を指定できません。仮想ディスクはデフォルト名で作成されます。

[spanlength=<n>] パラメータ (RAID 50 に必須)

各ストライプに含まれる物理ディスクの数を指定するには、このパラメータを使用します。このパラメータは RAID 50 の仮想ディスクのみに適用します。RAID 50 の仮想ディスクを作成していない場合は、このパラメータを指定しないでください。たとえば以下になります。

```
spanlength=3
```

構文例

たとえば、PERC 3/QC コントローラに RAID 5 仮想ディスクを作成したいとします。このコントローラがサポートしている読み取り、書き込み、およびキャッシュのポリシーを理解するには、オンラインヘルプが役に立ちます。この例では、以下の読み取り、書き込み、およびキャッシュのポリシーで仮想ディスクを作成します。

- 1 先読み
- 1 ライトスルーキャッシュ
- 1 キャッシュ I/O

仮想ディスクは 500MB で、ストライプサイズは 16KB になります。仮想ディスクの名前は **vd1** で、コントローラ 1 のコネクタ 0 に置かれます。仮想ディスクは RAID 5 なので、少なくとも 3 個の物理ディスクが必要です。この例では、4 個の物理ディスクを指定します。これらは物理ディスク 0 から 3 です。

この例で説明した仮想ディスクを作成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=createvdisk controller=1 raid=r5 size=500m pdisk=0:0,0:1,0:2,0:3 stripesize=16kb cachepolicy=c
readpolicy=ra writepolicy=wt
```

指定するパラメータは、コントローラ、RAID レベル、仮想ディスクのサイズと、物理ディスクの選択だけです。その他の指定していないパラメータについては、Storage Management によってデフォルト値が設定されます。

omconfig コントローラ再構成率の設定

コントローラ再構成率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setrebuildrate controller=id rate=<0 ~ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で再構成率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setrebuildrate controller=1 rate=50
```

omconfig バックグラウンドの初期化率の設定

バックグラウンドの初期化率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setbgirate controller=id rate=<0 ~ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 でバックグラウンドの初期化率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setbgirate controller=1 rate=50
```

omconfig 再構築率の設定

再構築率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setreconstructrate controller=id  
rate=<0 ~ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で再構築率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setreconstructrate controller=1  
rate=50
```

omconfig 整合性チェック率の設定

整合性チェック率を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setcheckconsistency controller=id  
rate=<0 ~ 100>
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で整合性チェック率を 50 に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setcheckconsistency controller=1  
rate=50
```

omconfig コントローラログのエクスポート

コントローラのログをテキストファイルにエクスポートするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。エクスポートされたログファイルの詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=exportlog controller=id
```

`id` は、`omreport storage controller` コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のログをエクスポートするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=exportlog controller=1
```

デフォルトでは、ログファイルは、Microsoft® Windows® システム（使用されている Windows バージョンに基づく）の場合には `C:\WinNt` または `C:\Windows` へ、またすべての Linux システムでは `/var/log` へエクスポートされます。

コントローラによって、ログファイル名は `afa_<mmdd>.log` または `lsi_<mmdd>.log`（<mmdd> は月と日付）になります。コントローラのログファイルの詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

 **メモ:** PERC 2/SC、2/DC、4/MM、CERC ATA 100/4ch、CERC SATA 1.5/2s の各コントローラでは `export log file` コマンドはサポートされていません。


omconfig 外部設定のインポート

次の `omconfig` コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに接続された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスクをインポートできます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=importforeignconfig controller=id
```

`id` は、`omreport storage controller` コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

 **メモ:** このコマンドは、ファームウェアバージョン 5.0.x でのみサポートされています。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の外部設定をインポートするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=importforeignconfig controller=1
```


omconfig Import/Recover Foreign Configuration

次の `omconfig` コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに接続された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスクをインポートし回復することができます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=importrecoverforeignconfig controller=id
```

`id` は、`omreport storage controller` コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

 **メモ:** このコマンドは、ファームウェアバージョン 5.1.1 でのみサポートされています。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の外部設定をインポートし回復するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=importrecoverforeignconfig controller=1
```

omconfig 外部設定のクリア

次の `omconfig` コマンド構文を使用すると、コントローラに新たに接続された物理ディスク上に存在するすべての仮想ディスクをクリアまたは削除できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=clearforeignconfig controller=id
```

`id` は、`omreport storage controller` コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の外部設定をクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=clearforeignconfig controller=1
```

omconfig 巡回読み取りモードの設定

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラに巡回読み取りモードを設定できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=setpatrolreadmode controller=id  
mode=manual|auto|disable
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で巡回読み取りを手動モードに設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=setpatrolreadmode controller=1  
mode=manual
```

omconfig 巡回読み取りの開始

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラで巡回読み取りタスクを開始できます。

完全な構文

```
omconfig storage controller action=startpatrolread controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で巡回読み取りタスクを開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=startpatrolread controller=1
```

 **メモ:** 巡回読み取りを開始可能にするには、現在の巡回読み取りモードを「手動」に設定する必要があります。

omconfig 巡回読み取りの停止

次の **omconfig** コマンド構文を使用すると、コントローラで巡回読み取りタスクを停止できます。

完全な構文


```
omconfig storage controller action=stoppatrolread controller=id
```

id は、**omreport storage controller** コマンドによって報告されるコントローラ ID です。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で巡回読み取りタスクを停止するには、次のように入力します。

```
omconfig storage controller action=stoppatrolread controller=1
```

 **メモ:** 巡回読み取りを停止可能にするには、現在の巡回読み取りモードを「手動」に設定する必要があります。

omconfig 仮想ディスクのコマンド

以下の項では、仮想ディスクタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。


 **注意:** `omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=id vdisk=id` コマンドは仮想ディスクを削除します。仮想ディスクを削除すると、仮想ディスク上のファイルシステムやボリュームをはじめ、すべての情報が破壊されます。

表 8-22. omconfig 仮想ディスク管理のコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage vdisk	action=checkconsistency controller=id vdisk=id
	action=cancelcheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=pausecheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=resumecheckconsistency controller=id vdisk=id
	action=blink controller=id vdisk=id
	action=unblink controller=id vdisk=id
	action=initialize controller=id vdisk=id
	action=fastinit controller=id vdisk=id
	action=slowinit controller=id vdisk=id
	action=cancelinitialize controller=id vdisk=id
	action=cancelbginitialize controller=id vdisk=id
	action=restoresegments controller=id vdisk=id
	action=splitmirror controller=id vdisk=id
	action=unmirror controller=id vdisk=id
	action=assigndedicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=<はい いいえ>
	action=deletevdisk controller=id vdisk=id [force=yes]
	action=format controller=id vdisk=id
	action=reconfigure controller=id vdisk=id raid=<c r0 r1 r1c r5 r10> size=<サイズ> pdisk=<物理ディスク ID>
	action=changepolicy controller=id vdisk=id [readpolicy=<ra nra ara rc nrc> writepolicy=<wb wt wc nwc fwb> cachepolicy=<d c>]
	action=rename controller=id vdisk=id

omconfig 仮想ディスクの点滅

仮想ディスクに含まれる物理ディスクを点滅させるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=blink controller=id vdisk=id
```

id は、`omreport` コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、`omreport storage controller` と入力してコントローラ ID を表示してから、`omreport storage vdisk controller=ID` と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=blink controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの点滅解除

仮想ディスクに含まれる物理ディスクを点滅解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=unblink controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=unblink controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの初期化

仮想ディスクを初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=initialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=initialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの初期化のキャンセル

仮想ディスクの初期化をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelinitialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の初期化をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelinitialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの高速初期化

仮想ディスクを高速初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=fastinit controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を高速初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=fastinit controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの低速初期化

仮想ディスクを低速初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=slowinit controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 を低速初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=slowinit controller=1 vdisk=4
```

omconfig バックグラウンドの初期化のキャンセル

仮想ディスクのバックグラウンドの初期化処理をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelbginitialize controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のバックグラウンドの初期化をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelbginitialize controller=1 vdisk=4
```

omconfig 無効セグメントの復元

破壊された RAID 5 仮想ディスクからデータを回復するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。このタスクは、RAID5 仮想ディスクに含まれる物理ディスクの破壊された部分からデータの再構成を試みます。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=restoresegments controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のセグメントを復元するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=restoresegments controller=1 vdisk=4
```

omconfig ミラー分割

RAID 1、RAID 1ミ連結、または RAID 10 の仮想ディスクとして設定されていたミラーデータを分割するには、**omconfig** コマンド構文を使用します。RAID 1 または RAID 1ミ連結ミラーを分割すると、2 つの連結された非冗長仮想ディスクが作成されます。RAID 10 ミラーを分割すると、2 つの RAID 0（ストライプ）非冗長仮想ディスクが作成されます。この操作でデータが失われることはありません。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=splitmirror controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 のミラー分割を開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=splitmirror controller=1 vdisk=4
```

omconfig ミラー解除

ミラーデータを分割してミラーの半分を空き容量として復元するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。RAID 1 または RAID 1 連結仮想ディスクをミラー解除すると、単一の非冗長の連結仮想ディスクが作成されます。RAID 10 仮想ディスクのミラーを解除すると、単一の非冗長の RAID 0（ストライプ）仮想ディスクが作成されます。この操作でデータが失われることはありません。このコマンドの使い方の詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=unmirror controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。


構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 をミラー解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=unmirror controller=1 vdisk=4
```

omconfig 専用ホットスペアの割り当て

1 つまたは複数の物理ディスクを専用ホットスペアとして仮想ディスクに割り当てるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** PERC 2/SC、2/DC、CERC SATA 1.5/2s の各コントローラは専用ホットスペアをサポートしていません。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=yes
```

id はコントローラ ID と仮想ディスク ID です。**<物理ディスク>** 変数は、物理ディスクを指定します。

コントローラ、仮想ディスク、および物理ディスクの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** そして **omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクと物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 上の物理ディスク 3 を、仮想ディスク 4 の専用ホットスペアとして割り当てています。シリアルアタッチド SCSI (SAS) コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 にあります

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアを割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:3 assign=yes
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアを割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:2:3 assign=yes
```

omconfig 専用ホットスペアの割り当て解除

専用ホットスペアとして仮想ディスクに割り当てられている 1 つまたは複数の物理ディスクを割り当て解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=id vdisk=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=no
```

id はコントローラ ID と仮想ディスク ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

コントローラ、仮想ディスク、および物理ディスクの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=id** として **omreport storage pdisk controller=id** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクと物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 上の物理ディスク 3 を、仮想ディスク 4 の専用ホットスペアとして割り当て解除しています。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアの割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:3 assign=no
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された専用ホットスペアの割り当てを解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=assignededicatedhotspare controller=1 vdisk=4 pdisk=0:2:3 assign=no
```

omconfig 整合性チェック

仮想ディスクの整合性確認を開始するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。整合性確認タスクは、仮想ディスクの冗長データを確認します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=checkconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=id** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を実行するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=checkconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックのキャンセル

整合性チェックの処理中にキャンセルするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=cancelcheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=cancelcheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックの一時停止

整合性チェックの処理中に一時停止するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=pausecheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を一時停止するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=pausecheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 整合性チェックの再開

整合性チェックを一時停止した後で再開するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=resumecheckconsistency controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の整合性確認を再開するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=resumecheckconsistency controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの削除

仮想ディスクを削除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

注意: 仮想ディスクを削除すると、仮想ディスク上のファイルシステムやボリュームをはじめ、すべての情報が破壊されます。システムまたはブートパーティションを削除しようとすると、警告メッセージが表示されることがあります。ただし、この警告メッセージはあらゆる状況で生成されるわけではありません。このコマンドを使うときは、システムやブートパーティション、その他の重要なデータが削除されないことを十分確認してください。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=deletevdisk controller=id vdisk=id  
  
wvon=deletevdisk controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクのフォーマット

仮想ディスクをフォーマットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=format controller=id vdisk=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=id** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 をフォーマットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=format controller=1 vdisk=4
```

omconfig 仮想ディスクの再設定

仮想ディスクを再設定して、仮想ディスクの RAID レベルを変更したり、物理ディスクを追加してサイズを増やしたりできます。コントローラによっては、物理ディスクを削除することもできます。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=id vdisk=id raid=<c| r0| r1| r1c| r5| r10> size=<サイズ> pdisk=<物理ディスク>
```

構文例

たとえば、仮想ディスク 4 を 800 MB のサイズに再設定するには、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある RAID 5 と物理ディスク 0 から 3 を使用します。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は **SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です**。

この例では、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=1 vdisk=4 raid=r5 size=800m pdisk=0:0,0:1,0:2,0:3
```

以下は **SAS コントローラの例です**。

この例では、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=reconfigure controller=1 vdisk=4 raid=r5 pdisk=0:2:0,0:2:1,0:2:2,0:2:3
```

omconfig 仮想ディスクポリシーの変更

仮想ディスクの読み取り、書き込み、またはキャッシュポリシーを変更するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage vdisk action=changepolicy controller=id vdisk=id [readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc> | writepolicy=<wb| wt| wc| nwc> |
cachepolicy=<d | c>]
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

コントローラ固有の読み取り、書き込み、およびキャッシュのポリシーについては、オンラインヘルプを参照してください。**omconfig** コマンドを使ってこれらのパラメータを指定する方法については、以下を参照してください。

- 1 [readpolicy=<ra| nra| ara| rc| nrc>] パラメータ (オプション)
- 1 [writepolicy=<wb| wt| wc| nwc| fwb>] パラメータ (オプション)
- 1 [cachepolicy=<d | c>] パラメータ (オプション)


構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の読み取りポリシーを先読みなしに変更するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=changepolicy controller=1 vdisk=4 readpolicy=nra
```

omconfig 仮想ディスクの名前の変更

仮想ディスクの名前を変更するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** CERC SATA 1.5/2s コントローラでは、仮想ディスクのデフォルト名を変更できません。

完全な構文

```
action=rename controller=id vdisk=id name=<文字列>
```

id は **omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID と仮想ディスク ID、<文字列> は仮想ディスクの新しい名前です。これらのコントローラ ID と仮想ディスク ID の値を得るためには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage vdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している仮想ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 の仮想ディスク 4 の名前を vd4 と変更するには、次のように入力します。

```
omconfig storage vdisk action=rename controller=1 vdisk=4 name=vd4
```

omconfig 物理ディスクのコマンド

以下の項では、物理ディスクのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

表 8-23. omconfig 物理ディスクのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage pdisk	action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=unblink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=remove controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=initialize controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=offline controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=online controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=<はい\いいえ>
	action=rebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=cancelrebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
	action=removedeadsegments controller=id pdisk=<物理ディスク ID>

omconfig 物理ディスクの点滅

コントローラに接続している 1 つまたは複数の物理ディスクのライト（発光ダイオード、すなわち LED ディスプレイ）を点滅させることができます。1 つまたは複数の物理ディスクを点滅させるには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
action=blink controller=ID action=blink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 0 を点滅したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=1 pdisk=0:0
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=blink controller=1 pdisk=0:2:0
```

omconfig 物理ディスクの点滅解除

コントローラに接続している 1 つまたは複数の物理ディスクのライト（発光ダイオード、すなわち LED ディスプレイ）を点滅解除することができます。1 つまたは複数の物理ディスクを点滅解除するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 0 を点滅解除したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=1 pdisk=0:0
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを点滅解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=unblink controller=1 pdisk=0:2:0
```

omconfig 物理ディスクの削除の準備

物理ディスクの削除を準備するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 の削除の準備をしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの削除を準備するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの削除を準備するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=remove controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクの初期化

物理ディスクを初期化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 を初期化したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを初期化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=initialize controller=1 pdisk=0:2:3
```


omconfig 物理ディスクのオフライン化

物理ディスクをオフライン化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=id pdisk=コネクタ ID:ターゲット ID
```

id は **omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID、コネクタ ID:ターゲット ID はコネクタ番号と物理ディスク番号です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:3
```

omconfig 物理ディスクのオフライン化

物理ディスクをオフライン化するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をオフライン化したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は **SCSI、SATA、および ATA コントローラの例**です。

この例で説明した物理ディスクをオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:3
```

以下は **SAS コントローラの例**です。

この例で説明した物理ディスクをオフライン化するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=offline controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクのオンライン化

オフラインの物理ディスクをオンラインに戻すには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=online controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をオンラインに戻したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをオンラインに戻すには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=online controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをオンラインに戻すには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=online controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig グローバルホットスペアの割り当て

物理ディスクをグローバルホットスペアに割り当てるには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク> assign=yes
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をグローバルホットスペアとして割り当てたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:3 assign=yes
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当てるには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:2:3 assign=yes
```

omconfig グローバルホットスペアの割り当て解除

物理ディスクをグローバルホットスペアに割り当て解除するには、以下の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=id pdisk=<物理ディスク ID> assign=no
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 をグローバルホットスペアとして割り当て解除したいと思います。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当て解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:3 assign=no
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクをグローバルホットスペアとして割り当て解除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=assignglobalhotspare controller=1 pdisk=0:2:3 assign=no
```

omconfig 物理ディスクの再構成

エラーのある物理ディスクを再構成するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。ディスクの再構成には、数時間かかることがあります。再構成をキャンセルする必要がある場合は、**再構成のキャンセル** タスクを使用します。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 を再構成したいと思います。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを再構成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクを再構成するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=rebuild controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスク再構成のキャンセル

進行中の再構成をキャンセルするには、次の **omconfig** コマンドを使用します。再構成をキャンセルした場合、仮想ディスクは状態が低下したままになります。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 の再構成をキャンセルしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの再構成をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの再構成をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelrebuild controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 無効セグメントの削除

使用できないディスクスペースを回復するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 の物理ディスク 3 の無効なディスクセグメントを削除したいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの無効なセグメントを削除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=1 pdisk=0:3
```

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクの無効なセグメントを削除するには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=removedeadsegments controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスクのクリア

次の **omconfig** コマンドを使用すると、物理ディスクからデータまたは設定をクリアできます。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=clear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 をクリアしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明した物理ディスクをクリアするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=clear controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig 物理ディスククリアのキャンセル

次の **omconfig** コマンドを使用して、物理ディスクで進行中のクリア操作をキャンセルできます。

完全な構文

```
omconfig storage pdisk action=cancelclear controller=id pdisk=<物理ディスク ID>
```

id はコントローラ ID です。<物理ディスク> 変数は、物理ディスクを指定します。

これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage pdisk controller=ID** と入力し、コントローラに接続している物理ディスクの ID を表示します。

構文例

この例では、コントローラ 1 のコネクタ 0 にある物理ディスク 3 のクリアをキャンセルしたいとします。SAS コントローラでは、物理ディスクはエンクロージャ 2 に配置されています。

以下は SAS コントローラの例です。

この例で説明された物理ディスクのクリア操作をキャンセルするには、次のように入力します。

```
omconfig storage pdisk action=cancelclear controller=1 pdisk=0:2:3
```

omconfig バッテリーのコマンド

以下の項では、バッテリーのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

表 8-24. omconfig バッテリーのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig ストレージバッテリー	action=recondition controller=id battery=id action=startlearn controller=id battery=id action=delaylearn controller=id battery=id days=d hours=h

omconfig バッテリーの修整

コントローラのバッテリーを修整するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。バッテリーおよび修整プロセスの詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=recondition controller=id battery=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリー ID です。この値を得るためには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage battery controller=ID** と入力し、コントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のバッテリーを修整にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=recondition controller=1 battery=0
```

omconfig バッテリー評価サイクルの開始

次の **omconfig** コマンドを使用して、バッテリー評価サイクルを開始できます。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=startlearn controller=id battery=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリー ID です。この値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラの ID を表示してから、**omreport storage battery controller=id** と入力しコントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で評価サイクルを開始するには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=startlearn controller=1 battery=0
```

omconfig バッテリー評価サイクルの遅延

次の **omconfig** コマンドを使用して、指定された期間、バッテリー評価サイクルを遅延できます。バッテリー評価サイクルは、最高 7 日間、つまり 168 時間、遅延できます。

完全な構文

```
omconfig storage battery action=delaylearn controller=id battery=id
```

```
days=d hours=h
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID およびバッテリー ID です。この値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラの ID を表示してから、**omreport storage battery controller=id** と入力しコントローラのバッテリーの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 で 3 日と 12 時間評価サイクルを遅延させるには、次のように入力します。

```
omconfig storage battery action=delaylearn controller=1 battery=0
```

```
days=3 hours=12
```

omconfig コネクタコマンド

以下の項では、コネクタのタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。


表 8-25. omconfig コネクタコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig storage connector	
	action=rescan controller=id connector=id

omconfig コネクタの再スキャン

コントローラコネクタを再スキャンするには、次の **omconfig** コマンドを使用します。このコマンドは、コントローラのすべてのコネクタを再スキャンするので、コントローラの再スキャンを実行すると

同じです。

 **メモ:** このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage connector action=rescan controller=id connector=id
```

id は、**omreport** コマンドによって報告されるコントローラ ID とコネクタ ID です。これらの値を得るには、**omreport storage controller** と入力してコントローラ ID を表示してから、**omreport storage connector controller=ID** と入力し、コントローラに接続しているコネクタの ID を表示します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 を再スキャンするには、次のように入力します。

```
omconfig storage connector action=rescan controller=1 connector=2
```

omconfig エンクロージャのコマンド

以下の項では、エンクロージャタスクを実行するために必要な **omconfig** コマンドについて説明します。

表 8-26. omconfig エンクロージャのコマンド

必要なコマンドレベル (1、2、3)	オプション「名前=値」のペア
omconfig ストレージ エンクロージャ	action=enablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=disablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=enablests
	action=disablests
	action=setassettag controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assettag=<文字列>
	action=setassetname controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assetname=<文字列>
	action=settempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id minwarn=n maxwarn=n
	action=resettempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id
	action=setalltempprobes controller=id
	enclosure=<エンクロージャ ID> minwarn=n
	maxwarn=n
	action=resetalltempprobes controller=id
	enclosure=<エンクロージャ ID>
	action=blink controller=id
	enclosure=<エンクロージャ ID>

omconfig エンクロージャ警告を有効にする

エンクロージャ警告を有効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャのアラームを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続されているエンクロージャ 2 のアラームを有効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=enablealarm controller=1 enclosure=1:2
```

omconfig エンクロージャ警告を無効にする

エンクロージャ警告を無効にするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャのアラームを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続されているエンクロージャ 2 のアラームを無効にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=disablealarm controller=1 enclosure=1:2
```

omconfig Smart サーマルシャットダウンを有効にする

omconfig storage enclosure action=enablests コマンドは Storage Management の以前のリリースではサポートされていませんでした。このコマンドは **omconfig storage globalinfo action=enablests** コマンドに置き換わりました。Smart サーマルシャットダウンを有効にして CLI スクリプトを作成する場合は、**omconfig storage globalinfo action=enablests** コマンドの使用が適しています。

詳細については、[「omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを有効にする」](#) コマンドを参照してください。

omconfig Smart サーマルシャットダウンを無効にする

omconfig storage enclosure action=disablests コマンドは Storage Management の以前のリリースではサポートされていませんでした。このコマンドは **omconfig storage globalinfo action=disablests** コマンドに置き換わりました。Smart サーマルシャットダウンを無効にして CLI スクリプトを作成する場合は、**omconfig storage globalinfo action=disablests** コマンドの使用が適しています。

詳細については、[「omconfig グローバル Smart サーマルシャットダウンを無効にする」](#) コマンドを参照してください。

omconfig エンクロージャ管理タグの設定

エンクロージャの管理タグを指定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assettag=<文字列>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、<文字列> はユーザー指定の英数字の文字列です。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続しているエンクロージャで管理タグに encl20 と指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=1 enclosure=2 assettag=encl20
```

以下は SAS コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続しているエンクロージャ 2 で管理タグに encl20 と指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassettag controller=1 enclosure=1:2 assettag=encl20
```

omconfig エンクロージャ資産名の設定

エンクロージャの資産名を指定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> assetname=<文字列>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、<文字列> はユーザー指定の英数字の文字列です。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続しているエンクロージャについて資産名を encl43 と指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=1 enclosure=2 assetname=encl43
```


以下は SAS コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 1 に接続しているエンクロージャ 2 について資産名を encl43 と指定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setassetname controller=1 enclosure=1:2 assetname=encl43
```

omconfig 温度プローブの設定しきい値の設定

指定した温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=settemprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id minwarn=n maxwarn=n
```

id はコントローラ ID と温度プローブ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

この構文では、"n" はユーザー指定の温度の値（摂氏）です。

構文例

たとえば、温度プローブ 3 の最小および最大の警告しきい値を、摂氏 10 と 40° に設定したいとします。


以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例では、温度プローブ 3 はコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャにあります。温度プローブのしきい値を摂氏 10 および 40° に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=settemprobes controller=1 enclosure=2 index=3 minwarn=10 maxwarn=40
```

omconfig 温度プローブしきい値のリセット

最小および最大の警告温度しきい値をデフォルトの値にリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** このコマンドは SAS コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=resettempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> index=id
```

id はコントローラ ID と温度プローブ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、温度プローブ 3 のしきい値をデフォルト値にリセットしたいとします。


以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

この例では、温度プローブ 3 はコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャにあります。温度プローブ 3 のしきい値をデフォルト値にリセットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=resettempprobes controller=1 enclosure=2 index=3
```

omconfig すべての温度プローブの設定しきい値の設定

エンクロージャ内のすべての温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値を設定するには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** このコマンドは SCSI RAID コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=setalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID> minwarn=n maxwarn=n
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、すべての温度プローブの最小および最大の警告しきい値を、摂氏 10 と 40° に設定したいとします。


SAS コントローラの例

この例では、温度プローブはコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャ 3 にあります。すべての温度プローブのしきい値を摂氏 10 および 40° に設定するには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=setalltempprobes controller=1 enclosure=2:3 minwarn=10 maxwarn=40
```

omconfig すべての温度プローブしきい値のリセット

エンクロージャ内のすべての温度プローブの最小および最大の警告温度しきい値をデフォルト値にリセットするには、次の **omconfig** コマンド構文を使用します。

 **メモ:** このコマンドは SCSI RAID コントローラではサポートされていません。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=resetalltempprobes controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

構文例

たとえば、コントローラ 1 のエンクロージャ 2 のすべての温度プローブのしきい値をリセットしたいと思います。

SAS コントローラの例

この例では、温度プローブはコントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されたエンクロージャ 3 にあります。すべての温度プローブのしきい値 をリセットするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=resetalltempresets controller=1 enclosure=2:3
```

omconfig 点滅

次の omconfig コマンドを使用すると、エンクロージャの 発光ダイオード (LED) を点滅できます。

完全な構文

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=id enclosure=<エンクロージャ ID>
```

id はコントローラ ID です。<エンクロージャ ID> 変数は、エンクロージャを指定します。

以下は SCSI、SATA、および ATA コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャの LED を点滅にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=1 enclosure=2
```

以下は SAS コントローラの例です。

たとえば、コントローラ 1 のコネクタ 2 に接続されているエンクロージャ 3 の LED を点滅にするには、次のように入力します。

```
omconfig storage enclosure action=blink controller=1 enclosure=2:3
```

[目次ページに戻る](#)